青森県埋蔵文化財調査報告書第91集

表館遺跡 Ⅱ

昭和59年度

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書第91集

表館遺跡

むつ小川原開発事業に伴う国道338号暫定迂回路
建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

昭和59年度

青森県教育委員会

序

青森県教育委員会は、むつ小川原開発予定地域内の埋蔵文化財の保護と活用を図るため、昭和46年度から年次計画をたて、分布調査、試掘調査、発掘調査を実施してまいりました。

昭和 58年度は、むつ小川原開発事業に伴う国道 338号暫定迂回路建設工事に係る表館遺跡の一部について、記録保存のための発掘調査を実施しました。

本報告書は、この調査結果をまとめたものでありますが、今後の埋蔵文化財の保護と研究にいささかでも役立てば幸いと思います。

ここに、調査の実施及び本報告書の作成に当たって、種々御指導、御協力をいただいた調査員をはじめ、関係各位に厚くお礼を申し上げます。

昭和 60年 3月

青森県教育委員会

教育長　　本　間　茂　夫

例　　言

1．本報告書は、昭和58年に実施した青森県上北郡六ヶ所村大字鷹架字発茶沢に位置する表館遺跡の発掘調査報告書である。

2．執筆者の氏名は、依頼原稿については文頭に、他は文末に記した。

3．記述ならびに挿図は、原則として次の基準にしたがった。

（1）遺構番号については、検出順に番号を付したが、本報告書作成において若干の移動がある。

（2）挿図縮尺は、原則として次のとおりとした。

住居跡　　1/40　炉跡　　1/20　溝状ピット　　1/50　その他1/40

土器実測図　　1/3・1/2.5　土器拓影図　　1/2・1/2.5　石器実測図　　1/1.5　1/2　1/3

4．資料の鑑定については、下記のとおり依頼した。

石質鑑定　　調査時・青森県立郷土館学芸員佐藤巧氏

　　整理時・青森県立八戸高等学校教諭松山力氏

5．発掘調査及び本報告書作成に当って、次の諸氏から御協力、御教示を得た。

（敬称略）

安孫子昭二、荒井幹夫、石岡憲雄、井上肇、工藤利幸、熊谷常正、鈴鹿良一、谷藤保彦、原川雄二、山内幹夫、横山裕平

6．注・引用・参考文献は巻末に一括して収録した。

7．実測図中における表現方法のうち、スクリーソ・トーンの使用部分は下記のとおりである。

A　B　C　D　E　F

遺構セクションの地山　　F

炉跡の焼土　　B

石器　A　　面がツルツルしている部分　B　　面がザラザラしている部分

　　C　　小さな凹みが、多数ある部分　D　　敲打痕のある部分

　　E　　凹みの部分

他の使用部分は、そのつど実測図中に記載した。

目　　次

序
例言
第　章　調査の経過　1
第 1節　調査に至る経過　1
第 2節　調査要項　1
第 3節　調査の方法　2
第 4節　調査概要　5
第　章　遺跡の環境　7
第　章　遺構と遺物　11
第 1節　遺構　11
第 2節　遺物　16
第　章　まとめ　76

第　章　調査に至る経過と調査要項

第 1節　調査に至る経過

昭和 44年度に発表された新全国総合開発計画で、本県のむつ小川原地域がその有力な候補地として注目を集めた。その後、昭和 47年度にはむつ小川原開発第一次基本計画及び住民対策大綱が発表され、それと同時に青森県教育委員会は、開発に伴って破壊の恐れのある遺跡の所在や範囲を確認するため、分布・試掘調査を実施し、その成果について概要を発表してきた。

昭和 49年には、むつ小川原第二次基本計画の骨子が発表され、幹線道路を含む工業基地土地利用図が公表された。

昭和 52年 3月、むつ小川原開発第二次基本計画に係る環境影響評価報告書、いわゆる環境アセスメントが住民に示され、本格的に着工される見通しとなった。

表館遺跡の調査は、昭和 47年と、 53年に実施したむつ小川原港臨港道路建設及び石油備蓄基地へのパイプライン敷設に係る試掘調査に始まり、昭和 54年には、東西幹線道路予定地及びパイプライン敷設予定地に係る発掘調査を実施した。

昭和 57年 11月、県土木部道路建設課から、国道 338号暫定迂回路建設工事に係る遺跡西端部の発掘調査の依頼があり、県教育委員会では、昭和 58年 4月から 8月までの予定で発掘調査を実施することにした。　（山田）

第 2節　調 査 要 項

調査目的

国道 338号仮設取付道路建設工事に伴い、当該路線内に所在する表館遺跡の発掘調査を実施して、その記録保存を行い、埋蔵文化財の活用をはかるものである。

遺跡名　　表館遺跡

所在地　　上北郡六ヶ所村大字鷹架字発茶沢 2の 59ほか

調査対象面積　　5 000㎡

調査期間　　昭和 58年 4月 18日から同年 7月 13日まで

調査依託者　　青森県土木部道路建設課

調査主体者　　青森県教育委員会

調査担当機関　青森県埋蔵文化財調査センター

調査協力機関　六ヶ所村

上北教育事務所

調査参加者　調査指導員　村越　潔　弘前大学教授、青森県文化財保護審議会委員

調査協力者　田中　澄　六ヶ所村教育委員会教育長

調　査　員　三辻　利一　奈良教育大学教授

滝沢　幸長　八戸市文化財審議委員

小山　陽造　八戸工業高等専門学校教授

松山　力　県立八戸高等学校教諭

山口　義伸　県立木造高等学校稲垣分校教諭

佐藤　巧　県立郷土館学芸員

青森県埋蔵文化財調査センター

所長　工藤泰典

次長　古井睦夫（現公立学校共済組合浅虫保養所「帰帆荘」支配人）

〃　須藤昭二

調査第二課長　山田洋一

主査　三宅徹也

主事　白鳥文雄

調査補助員　中嶋久彰　（昭和58年 8月退職）

千葉正人　（昭和58年 3月退職）

佐藤隆司

前田文子　（昭和58年12月退職）

種市美恵子

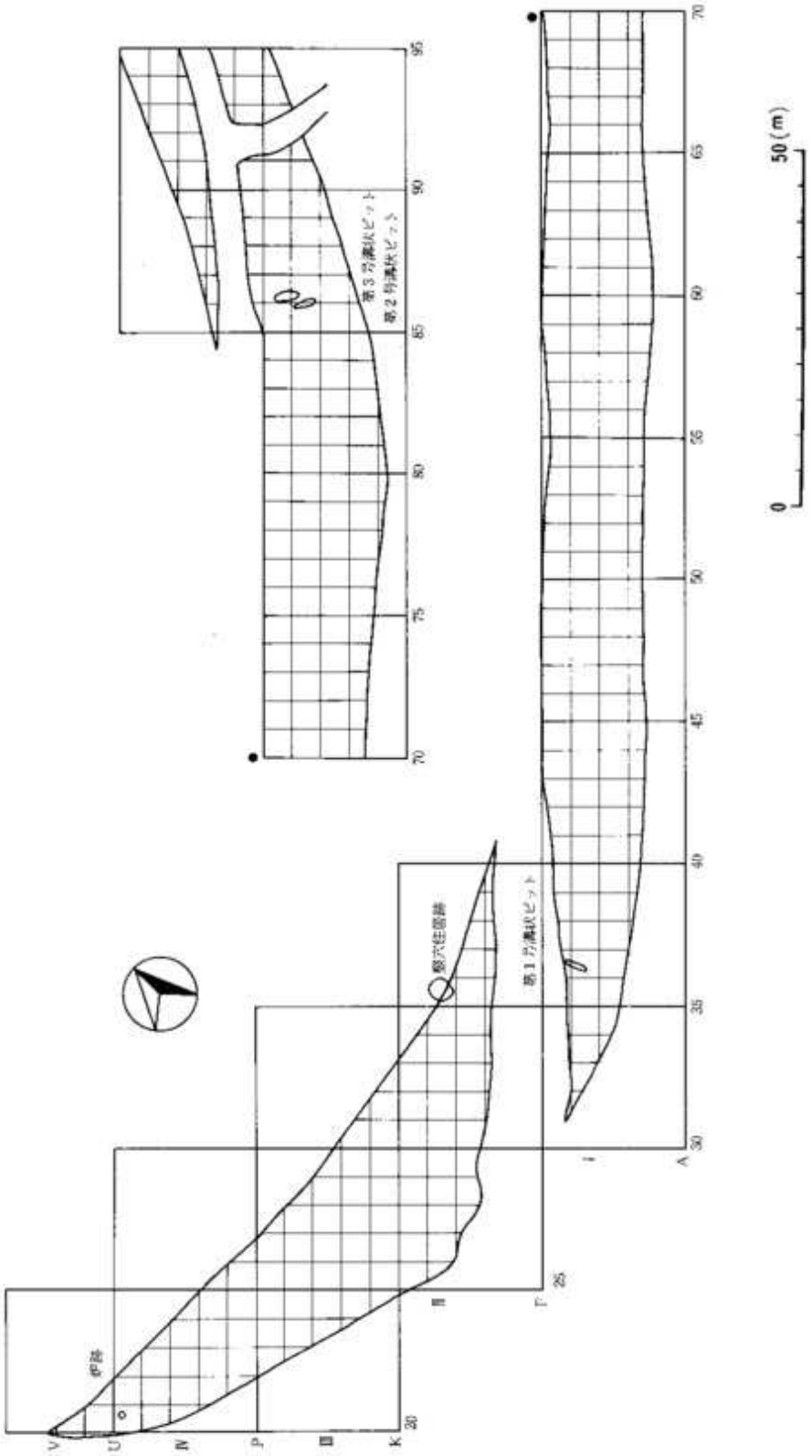
第3節　調査方法

調査区の設定

道路建設用中心杭No150～153を通る線を軸線としてグリッドを設定した。グリッドは20m 20mを 1グリッドとし、更に 4m　4mの小グリッドに分割した。

グリッドの呼称は、小グリッドは東西方向にアルファベットの大文字、南北方向に算用数字を付して、その組み合わせで示した。大グリッドは東西方向にローマ数字・南北方向に 5の倍数の算用数字の組み合わせで示した。

第1図　地形及び遺物散布地区図　（昭和47年度分布試掘調査の資料から作成）



第2図　グリッド・遺構配置図

発掘方法

粗掘り　大グリッドのラインに沿って土層観察用の「あぜ」を残し、小グリッドごとに掘り下げた。標準土層にはローマ数字を付して呼称した。

遺構の調査方法　遺構は各種類ごとに、確認順に番号を付した。また、堆積土の状態を観察するためにセクションベルトを残し、規模の大小や遺構の性格によって四分法・二分法・その他を用いた。

遺構内の堆積土は算用数字を付して呼称した。

遺構実測の縮尺は、基本的には20分の 1とし、規模の大小によって 10分の 1・その他とした。

記録保存のために、適宜、写真撮影を行った。

遺物の取り上げ方法　遺構及び層位ごとに取り上げることを原則とした。遺物の出土地点を記録し、層位・標高と出土状況を台帳に記入した。遺構外出土遺物は大グリッドごとの通し番号とし、小グリッド単位で取り上げた。取り上げに際しては、種類ごとに色分けしたカードを使用した。（土器 - 白・石器 - 青・その他 - 赤）　（白鳥）

第 4節　調 査 概 要

4月 13日、六ヶ所村中央公民館において、大石平遺跡調査チームと合同打合せ会議を行い、調査方法等について共通理解を図った。翌 14日に作業員に対する説明会を行い、 16日にはプレハブを設置して調査の準備を整えた。

4月 18日、器材を運搬し、調査区内のカヤ刈りを行う一方、グリッドの設定に取り掛かった。調査対象区域の踏査の際に、鷹架沼にのぞむ台地縁辺部に多数の遺物が散布していることを確認していた。このため、その散布地に近い大グリッド 20 ～ は、工程的に調査開始直後に取り掛かりたい地区であったが、笹が密集し、杉等が植林されていたため、取りあえずグリッド設定の終了した 50～ 75 から開始することとし、幅 4～ 8 m、長さ 16m前後の東西に長いトレンチを組んで、 4月 20日粗掘りを開始した。

4月 26日の段階で、調査区内では、土師器や縄文時代後期の微細な土器片が若干出土したにすぎなかった。このころ、周辺の地形測量を行った。

5月の連休明けから、台地縁辺部の調査を開始した。 30・ 35 で、若干の縄文時代後期の土器が出土し、更にこの下部に、前期初頭の芦野　群（表館式）に類似する土器が包含されていることを確認した。これとほぼ類似した様相が 20 でも認められたが、ここでは 1 m以上の盛土があり、また、 20 ～ にかけては、近年に土取りされた後、埋め戻された場所であるなどのため排土にやや手間取った。しかしながら、他の地区では遺物・遺構ともほとんど検出され

なかったため、 6月上旬に至り、 8月 19日の終了予定を変更し、 7月 13日終了とした。

20 ・ で、縄文時代前期や後期の復原可能土器を含む 2か所の包含層を確認し、精査したが、遺物の集中する範囲はごく限られていた。 6月の下旬には連日の降雨に悩まされ、調査は難航した。

7月 4日、 35 で、竪穴住居跡の落ち込みの一部を確認したが、その大半が調査区域外であったため、依頼者の青森県土木部及び土地所有者のむつ小川原開発株式会社の了解を得て拡張し、調査を行った。更に 8日には、 85 において溝状ピット 2基を検出した。

7月 12日には、住居跡、溝状ピット等すべての精査を終え、翌 13日、調査を終了した。

（三宅）

第　章　遺跡の環境

山口　義伸

遺跡の位置と地形

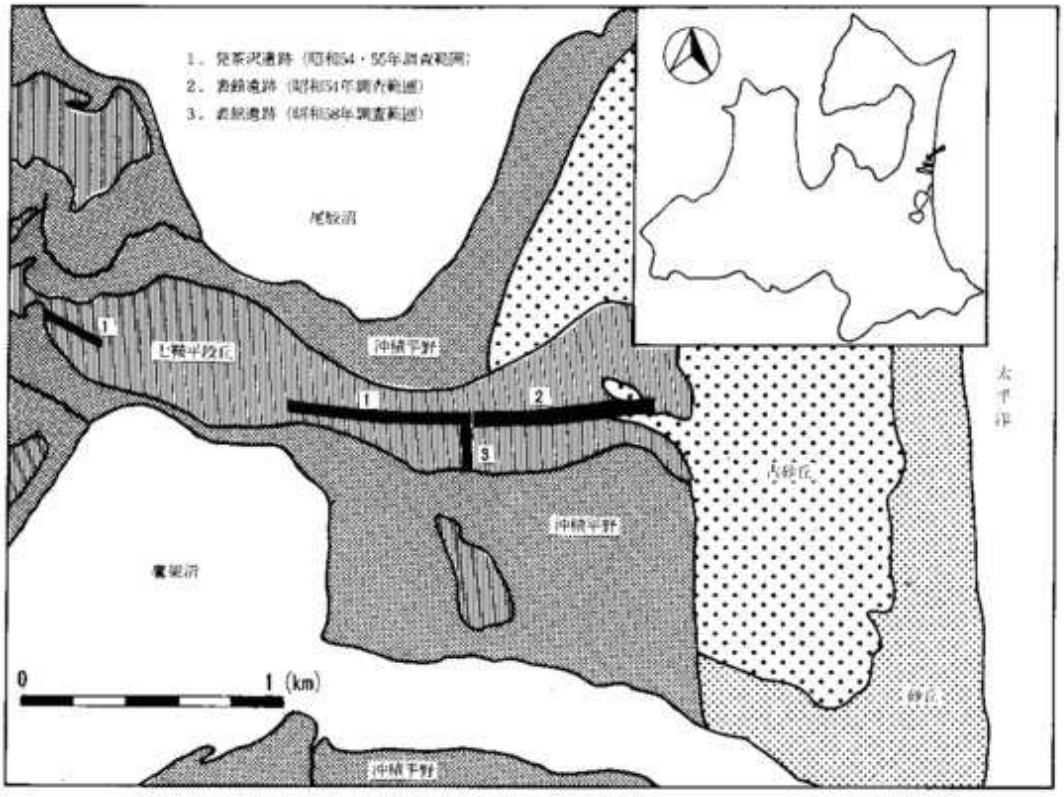
上北郡六ヶ所村は下北半島頸部の太平洋側にあって、この付近には、北方から、尾駮沼、鷹架沼、市柳沼、田面木沼、内沼そして小川原湖の湖沼群がみられる。太平洋沿岸には、これら湖沼群を閉塞するような形で、天ヶ森砂丘が現汀線に沿ってほぼ南北方向に約 200mの幅で分布し、更に、内陸側には標高が約 5～23mにも及ぶ古砂丘が同じく南北方向に約 200～300m、尾駮沼と鷹架沼との間では約 800mの幅で分布している。現在、古砂丘は松林となっていて、防風・防砂林の役割を果たしている。

本遺跡は、尾駮沼と鷹架沼との間に東西方向に舌状に張り出している海岸段丘上にあって、この付近には発茶沢遺跡が立地している。今回の発掘現場は、表館遺跡の西端部にあって、発茶沢遺跡に隣接している。ちょうど、県道尾駮有戸線から鷹架沼に至る、南北方向に走る農道沿いにある。

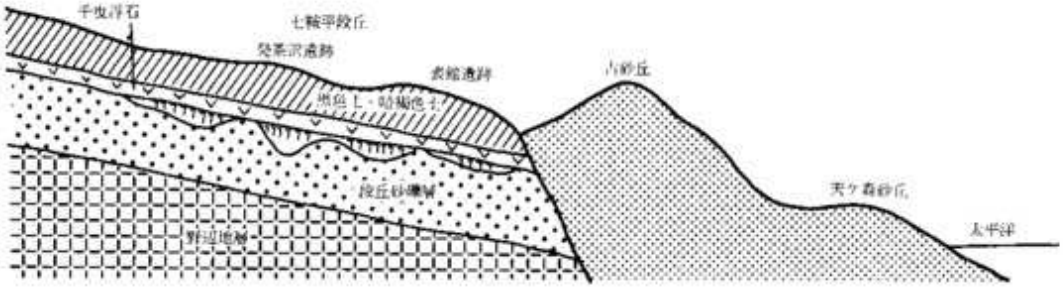
本遺跡の立地するこの海岸段丘は、下北半島頸部に発達する段丘群のうち、最下位の七鞍平段丘であって、標高が約 12～50mである。この七鞍平段丘は、現汀線にほぼ平行に約 4kmをもって南北方向に分布していて、全般的に開析度が小さ、く、起状の少ない平坦な地形をなしている。（第 3図 - 遺跡周辺の地形分類図、第 4図 - 遺跡周辺の地形の模式断面図）

しかし、本遺跡の立地する付近では、標高が約 8～18mで、全体的にやや起状しながら南方に緩傾斜する地形である。遺跡内を走る農道の西側は、標高 15～18mと比較的平坦な地形であり、その南端は約 10mの段丘崖で鷹架沼に臨む沖積平野と接している。東側は標高 8～16mと多少比高差がある。これは南東方に発達する浸食による谷状凹地の存在によって南北方向に波状の起状が構成されたことによるものである。なお、南端は浸食斜面で沖積平野に接している。

七鞍平段丘の基盤をなす地層は、第四系下部洪積統の野辺地層で、下位の新第三系を不整合におおい、遺跡周辺全般にわたってほぼ水平に堆積している。全体的には砂とシルトとの互層から成り立ち、葉理の発達がみられる。野辺地層を不整合におおっているのが七鞍平段丘の段丘構成層であって、段丘砂礫層と火山灰層とから成り立っている。段丘砂礫層は、厚さ 2～3mほどで最下位に褐鉄鉱の酸化帯（厚さ 5cm）を伴い野辺地層と接している。主に中～粗粒砂層で、中に薄層あるいはレンズ状の礫層を伴い、全体的に葉理の発達がみられる。火山灰層は、上北上部火山灰層の基底部に伴う千曳浮石（Cbp）に相当する黄褐色ラピリ質浮石が典型的に分布しているのみであって、本浮石層より上位には火山灰は確認できない。ただ下位には、遺



第３図　遺跡周辺の地形分類図



第４図　遺跡周辺の地形・地質の模式断面図

跡全般にわたって砂質で粘土質火山灰層が確認できるものの、特に、谷状凹地及びその縁辺部で 100cm以上と厚いことから凹地内での二次堆積と考えられる。

なお、この砂質で粘土質火山灰層（　層）及び下位の砂層（　層）上部には、人頭～牛頭大の円礫～亜円礫が含有している。この安山岩礫の含有については、礫を取り囲む基質をみても何ら　層と変化なく、段丘礫層中の礫とも考えにくいことなどから、人為的に運搬されたものと考えられるが断定し得ない。

遺跡の基本層序

盛　土：主に下位の　層、　層で、厚さ 10～ 30cmである。

層：暗褐色砂質土層（ 10～ 20cm）。いわゆる表土である。未分解の草根を多量に混入する。飛砂の混入で砂質となり、全体的に粘性、湿性に欠け、ソフトな感じである。

a 層：暗褐色土層（ 5～ 15cm）。耕作土で、やや腐植質の草根を多量に混入する。湿性があり、　層よりしまりはあるが、まだソフトな感じである。乾燥すると、灰褐色となり、さらさらしてしまりにかける。

b 層：暗黒褐色砂質土層（ 0～ 20cm）。　の層に飛砂が多量に混入したもので、全体的にしまりに欠ける。砂の混入の度合及び色調などから　b 1～ 4層と分層できるが、いずれもレンズ状に分布している。

層：暗褐色砂層（ 0～ 10cm）。細粒～中粒砂の飛砂層で、ソフトで全くしまりに欠ける。

層：明黒褐色砂質土層（ 20～ 30cm）。土壌化しつつある黒褐色土で、粘性・湿性がある。最上部にクラックの発達がみられる。また、乾燥すると層全体に格子状の割れ目が発達する。

層：明黒褐色砂質土層（ 10～ 20cm）。層相は上位の　層と似ているが、表面がなめらかで格子状の割れ目がみられない。なお、本層は　a、　b 層と区分でき、特に、　b 層はしまりがあって、下位の浮石の粒子が混入し、やや色調が明るい。

層：黒褐色浮石混じり土層（ 0～ 20cm）。下位の　層の浮石が粒子状に混入する風成堆積物で、土壌化は進んでいない。

層：暗褐色浮石質土層（ 0～ 20cm）。浮石のブロックからなる集合体で、ブロック同士の結合力はなくもろい。

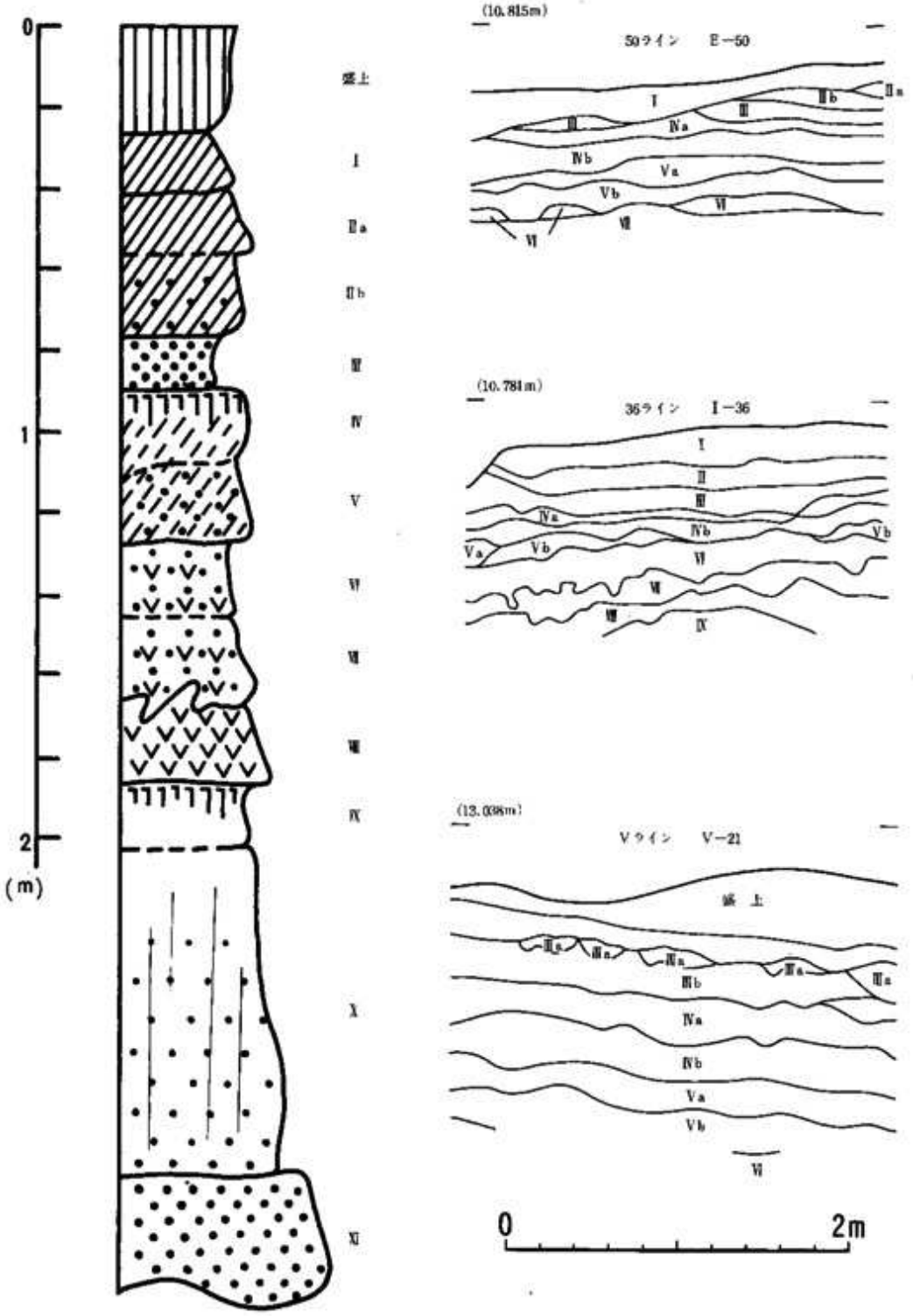
層：黄褐色ラピリ質浮石層（ 20cm）。上北上部火山灰層の千曳浮石（ Cbp) に相当する。ラピリを豊富に含有する浮石の集合体である。

層：淡赤褐色火山灰層（ 20cm）。粘土質火山灰で、最上部に暗色帯としてのクラックの発達がみられる。上位の　層とはシャープな面で接している。

層：黄褐色砂質火山灰層（ 100cm　）。砂質の粘土質火山灰で、特に、遺跡南東方の谷状凹

地内に厚く堆積していることから、二次的堆積物と考えられる。

層：黄褐色砂層（ 100cm＋ ）。段丘砂（細粒ー中粒砂）で、塊状無層理である。



第５図　遺跡の層序

第　章　遺構と遺物

第 1節　遺　　構

1　竪穴住居跡（第 6図）

- 35グリッドに位置し、長軸 3 0m・短軸 2 7mで、平面形はややゆがんだ隅丸長方形である。床面積は 5 2㎡で、長軸方位はN - 40 - E である。壁は、西側部分が東側部分より深いが、各壁とも、ほぼ一様に緩やかな立ち上がりを呈する。床面はほぼ平坦であり、全体的にかたくしまっている。この住居跡内から 19個のピットを検出した。このうち、主柱穴と思われるものが 2個（ 1・ 9）、壁柱穴と思われるものが 5個（ 3・ 7・ 10・ 11・ 13）であるが他のピットも支柱穴の可能性が考えられる。覆土は 12層に細分できた。全体にパミスを混入し、上部は粒径約 1～ 2mm、下部は約 2～ 5mmである。下部の方が混入量が多く、ブロック状に混入する部分も認められた。また、全体的に下部の方がかたくしまっている。色調は、暗褐色がかっているが、壁近くは基本層序の　～　層に類似している。 1層の上面で、縄文時代前期の包含層である　a層が確認できた。

本住居跡の範囲内では、表土から床面まで遺物がほとんど出土せず、覆土上部で土器片が数片出土しただけである。これらの土器片は、竪穴外東側出土の土器（復原土器・第 13図 - 9・表館式）と接合したが、竪穴内の土器片は、竪穴外のものよりやや低い位置からの出土である。

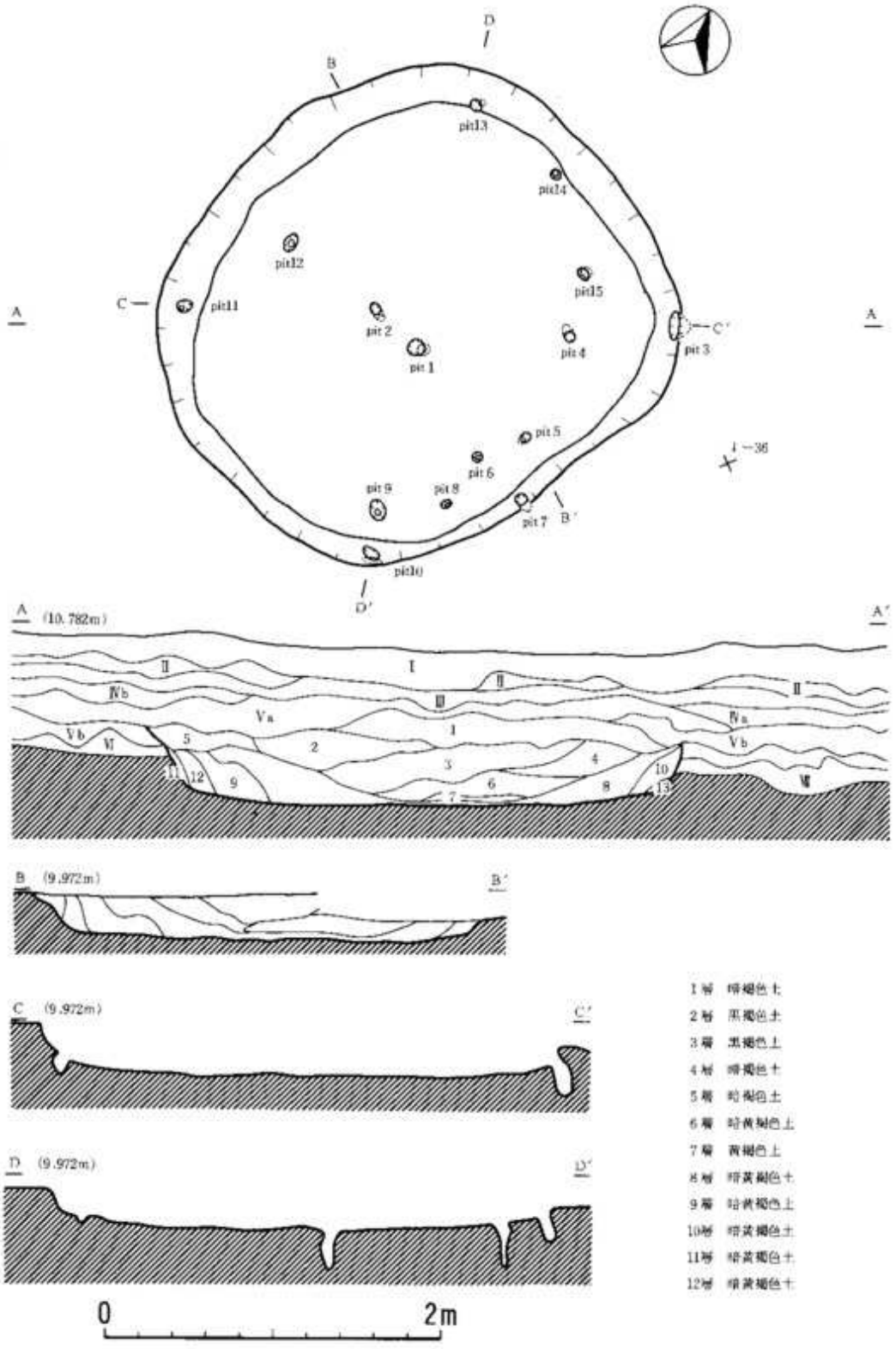
以上のように本住居跡覆土の上面に縄文時代前期（表館式・早稲田 6類）の土器を含む　a層が覆っていること、また、この周辺から出土した前期の土器もほとんどが表館式であることから、本住居跡の構築・使用時期は、表館式期と考えられる。

（佐藤・種市）

第 1表　ピット計測表

No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
大きさ	10×10	8×6	17×6	6×6	7×6	6×6	7×7	6×4	18×9	11×6	10×7	12×7	7×6	6×6	8×6
深　さ	22	5	21	13	11	6	13	6	26	18	12	7	11	8	9

単位　cm


A (10.782m)
B (9.972m)
C (9.972m)
D (9.972m)
0
2m
1層 暗褐色土
2層 黒褐色土
3層 黒褐色土
4層 暗褐色土
5層 暗褐色土
6層 暗黄褐色土
7層 黄褐色土
8層 暗黄褐色土
9層 暗黄褐色土
10層 暗黄褐色土
11層 暗黄褐色土
12層 暗黄褐色土

第6図　竪穴住居跡

2　炉　　跡（第 7図）

20 ・T - 20グリッドで検出した。

直径が 65cmのほぼ円形で、深さ 8cmのごく浅い皿状である。焼土は、若干削られてしまい約 3cmしか残されていなかった。底面は特に焼けて堅いという状況ではない。炉跡西側の上場に接し、第 19図 79のほぼ完形の尖底土器が伏せられた状態で出土した。この炉跡の確認は、ローム層直上面で、土器の口縁部もほぼ同一面であるため、住居跡等の遺構に伴うものとも考えられるが、この上層においては、それらしい土層の変化は認められなかった。　　（三宅）

3　溝状ピット

第 1号溝状ピット（第 8図 - 1）

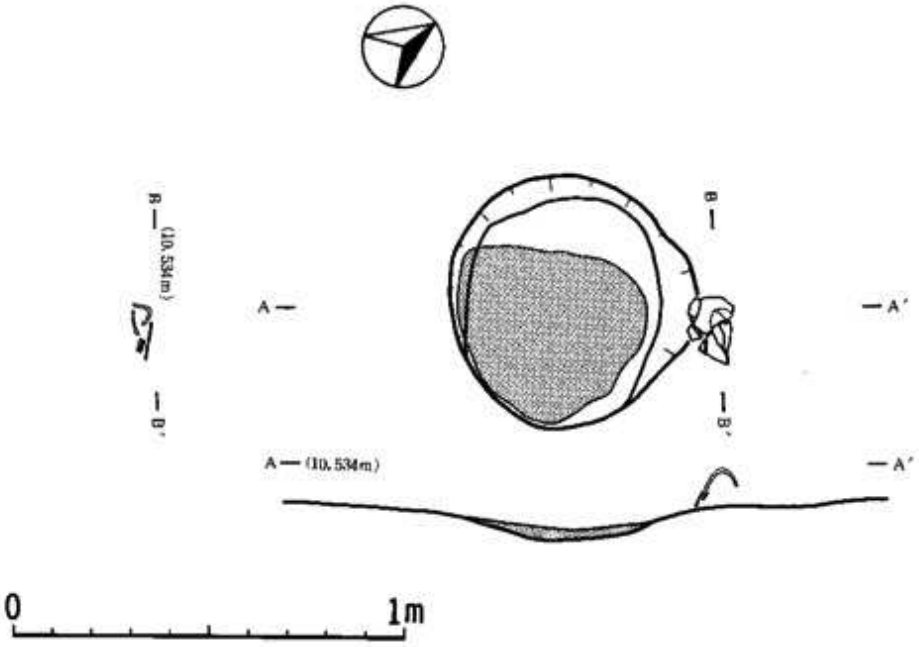
D・E - 36グリッドに位置し、開口部は長さ 369cm・幅 54cmで、底面は長さ 337cm・幅 15cmである。深さは 82～ 111cmで、長軸方向はN - 34 8 - Wである。

第 2号溝状ピット（第 8図 - 2）

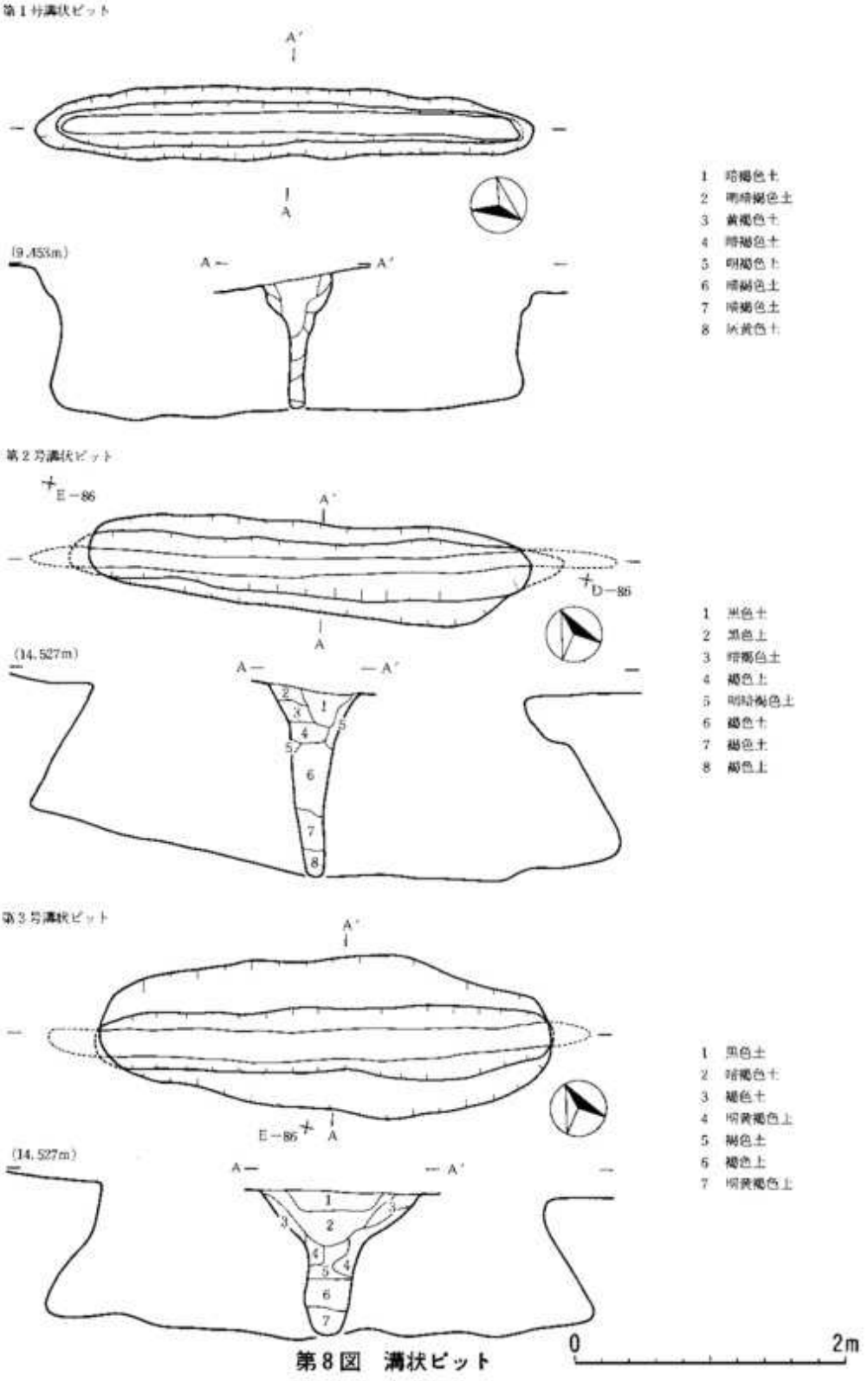
D - 85・86グリッドに位置し、開口部は長さ 323cm、幅 66cmで、底面は長さ 433cm・幅 13cmである。深さは 102～ 139cmで、長軸方向はN - 60 - Wである。

第 3号溝状ピット（第 8図 - 3）

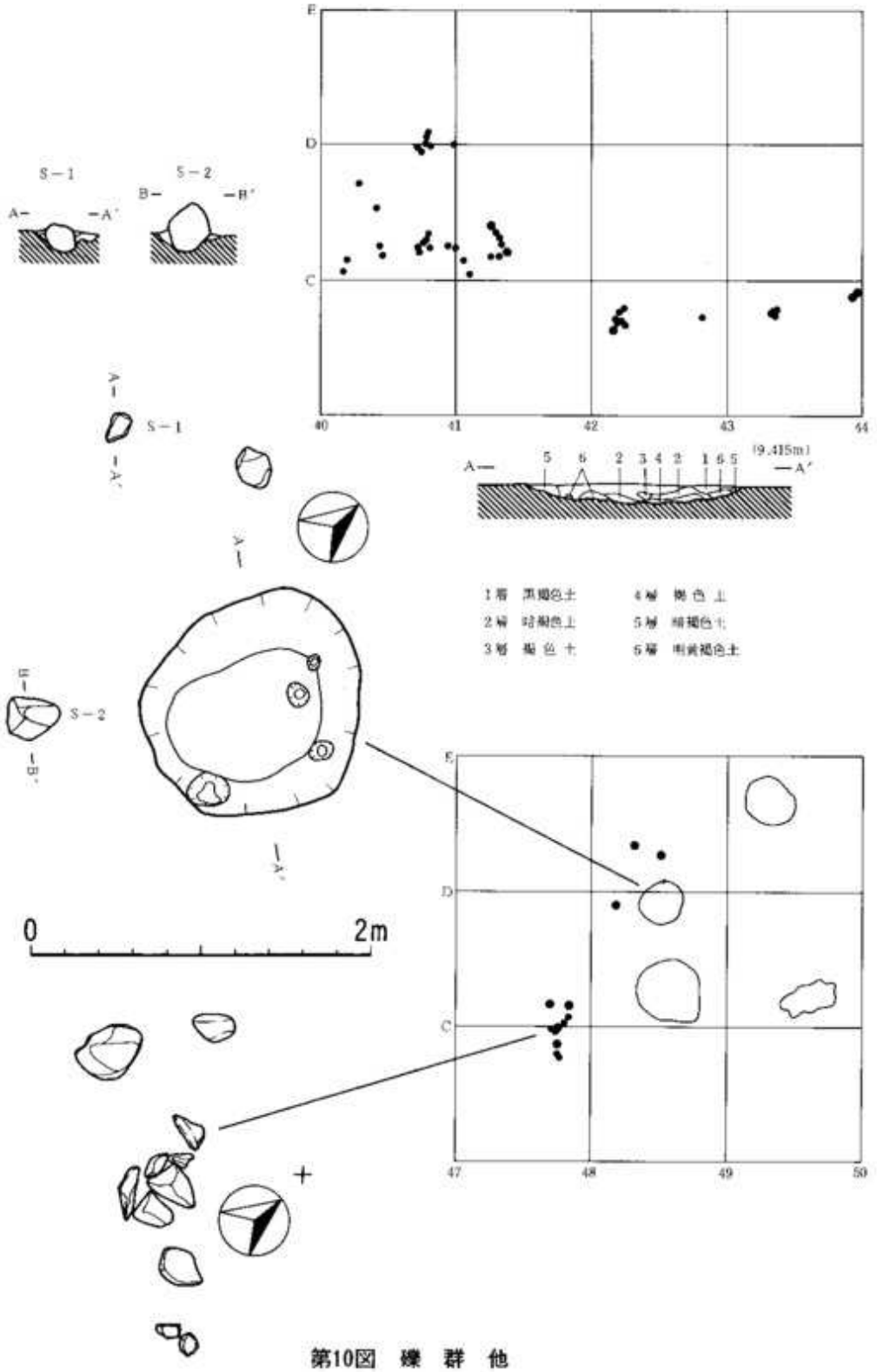
D・E - 86グリッドに位置し、開口部は長さ 333cm・幅 121cmで、底面は長さ 403cm・幅 23cmである。深さは 98～ 105cmで、長軸方向はN - 60 6 - Wである。　　（白鳥）



第 7図　炉　　跡


第1号溝状ピット
A'
A
(9.453m)
A
A'
1 暗褐色土
2 明暗褐色土
3 黄褐色土
4 暗褐色土
5 明褐色土
6 暗褐色土
7 暗褐色土
8 灰黄色土
第2号溝状ピット
E－86
A'
D－86
A
(14.527m)
A
A'
1 黒色土
2 黒色土
3 暗褐色土
4 褐色土
5 明暗褐色土
6 褐色土
7 褐色土
8 褐色土
第3号溝状ピット
A'
E－86
A
(14.527m)
A
A'
1 黒色土
2 暗褐色土
3 褐色土
4 明黄褐色土
5 褐色土
6 褐色土
7 明黄褐色土
0
2m

第8図　溝状ピット


S－1
S－2
A－
－A'
B－
－B'
E
D
C
40
41
42
43
44
(9.415m)
1層 黒褐色土
2層 暗褐色土
3層 褐色土
4層 褐色土
5層 暗褐色土
6層 明黄褐色土
47
48
49
50
0
2m

第10図 礫 群 他

4．そ　の　他

40・45　グリッドにおいて、10cm大～50cm大の礫を数ブロックで確認した。礫は30cm大がもっとも多く、全体的に表面が風化し、数個に割れているものも多い。また、ほとんどの礫が地山にめり込んだ状態であるが、人為的な掘り方や埋め込まれた痕跡は認められない。第　章中で地質学の面から山口調査員が人為的に運搬された可能性を示唆したが、精査の結果からは人為的な所作による痕跡は認められなかった。

45　グリッド北側部分の黄褐色の地山面で、斑状の黒色土のしみを多く確認した。この中で、プランの非常に不明瞭な、径 1～ 2mほどの大形のしみ数基を検出した。いずれも、底面はほぼ鍋底状で起伏に富み、小さな窪みが多く認められたが、掘り方は確認できなかった。形状的には樹木の根跡状の様相を呈し、また、しみの構成土は、黒色土・黒褐色土・暗褐色土で、微細なパミス及び砂粒が混入している。粘性・湿性があり、全体的にやわらかい。人為的なものとは考えられないが、この地区だけに集中して確認されたため、この項で取り上げた。（白鳥）

第 2節　遺　　物

土器

土器の分類

第　群土器

縄文時代早期の土器を一括した。資料はごくわずかである。

第　群土器

縄文時代前期初頭の土器で、本遺跡の主体をなすものの一つである。

第　群土器

縄文時代前期終末から中期初頭の円筒土器を一括した。資料はごくわずかである。

第　群土器

縄文時代後期の土器を一括した。本遺跡の主体をなすものの一つである。

第　群土器

縄文時代晩期の土器を一括した。資料はごくわずかである。

第　群土器

弥生時代の土器を一括した。資料はごくわずかである。

第　群土器

土師器・須恵器等歴史時代のものを一括した。資料はごくわずかである。

遺物分布状況

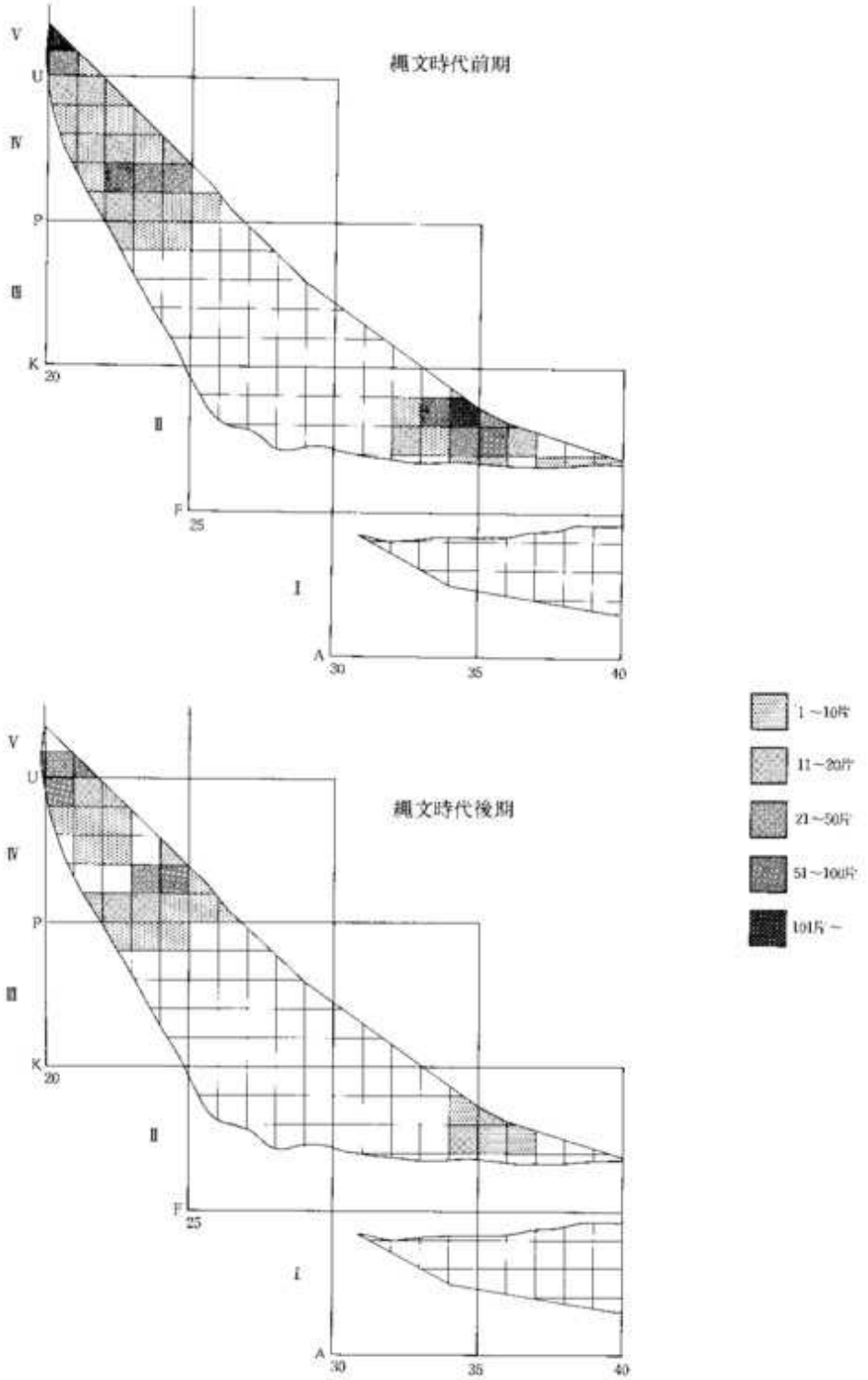
鷹架沼と尾駮沼に挟まれた地域は、一本の農道を境として、便宜的に発茶沢遺跡と表館遺跡に大きく区別されている。しかしながら、これまで行われてきた分布、試掘及び本調査からも明らかなように、実際には、広大な地域に点在する多数の、そして様々な時代の遺跡を包括している。今回の調査は、両遺跡を分ける農道の東側（表館遺跡）と西側（発茶沢遺跡）の両地区にかかることになったが、表館遺跡に該当する面積が70%以上を占めることから、表館の名称を用いることにした。しかしながら、以下に述べるように、遺物が濃密に分布していた範囲は、本来、発茶沢遺跡に含まれる西側の地区であった。

以上のことから、昭和46年に行われた分布調査の成果を参考に地区名を付し、今回の対象区、特に発茶沢遺跡に含まれる部分については、表館遺跡の総称のもとにＨ地区と称することにした。

調査期間中、地形測量とあわせて周辺の遺物採集を行ったが、そのなかで、ある程度の広がりをもって散在した箇所は 2か所で、多くは、微細な破片が点在するだけであった。調査区内の東側は、まさに後者と同様で、様々な時代の土器片が点在していたにすぎない。これに対し、台地縁辺部である西側（Ｈ地区）は、濃密な分布状況を示していた。

Ｈ地区では、大グリッド30・35 、20 、20 の 3箇所に集中し、いずれにも縄文時代前期初頭と後期初頭の遺物が分布し、両者の分布範囲がほぼ重複していた。これを順に、ブロック 1、 2、 3と称することにする。ブロック 1と同 2の間には遺物は分布していなかったが、それは地山露出部分が存在すること、及び土取りされた場所が存在することに起因する面もあろう。しかしその一方で各ブロックは特徴的な出土状況や分布状況を示している。ブロック 1の前期の土器の分布範囲は、地山露出部分や土取り部分にまで及ばず、極めて小範囲である。また、同ブロックにおける後期の土器は、すべて同一個体に属するものと考えられる。ブロック 2における破片の分布は、他の 2者に比べ全体的にまばらであるが、前期・後期の土器とも一個体に近い土器がまとまって出土し、各個体単位で点在する傾向が伺われた。ブロック 3は、そのごく一部が調査範囲にかかったものであるが、前期の土器が、他と比較して最も密に分布し、ほぼ類似した資料が採集された地点（大グリッド25 に相当）まで範囲が広がっている可能性がある。後期の土器は、 1〜数個体の土器が 1〜 2mの小範囲で 3か所存在していた。

以上、各ブロックの遺物出土状況を概観したが、ブロック 1と 3の縄文時代前期の遺物の分布は、ある程度の広がりをみることができるものの、その範囲は極めて小さく限定され、また、各ブロックの後期及びブロック 2における前期の土器は、ほぼ個体単位に点在するなど、一般的な集落に伴う捨場等の様相とは大きく異なっている。（三宅）


縄文時代前期
縄文時代後期
V
U
Ⅳ
P
Ⅲ
K
20
Ⅱ
F
25
Ⅰ
A
30
35
40
1～10片
11～20片
21～50片
51～100片
101片～

第10図　遺物の分布図

第　群土器

縄文時代早期の土器で、これには中葉に位置付けられるもの（Ａ）と、終末に位置付けられるもの（Ｂ）とがある。

Ａ類土器（第1図 1〜 3）

沈線文を貝殻腹縁文で縁取り、文様の交点等に刺突を施した土器である。 3片出土し、うち2点は口縁部破片で、口唇内面に貝殻腹縁による刺突列を施している。物見台式土器である。

Ｂ類土器（第1図 4）

植物性繊維を多量に含む土器で、全面に斜行縄文を施文しているが、節が大きなことや器厚等をも考慮すると早稲田 5類土器に相当しよう。　（三宅）

第　群土器（第 1図 5〜第 2図 165）

縄文時代前期初頭に位置付けられている土器で、芦野　群（名久井 1961[注1]）ないし表館式（佐藤・渡辺 1960[注2]）及び早稲田 6類（二本柳他 1957[注3]）と称されているものを一括した。すべて植物性繊維を含む。

本群土器は、文様等の特徴によって以下のように大別した。

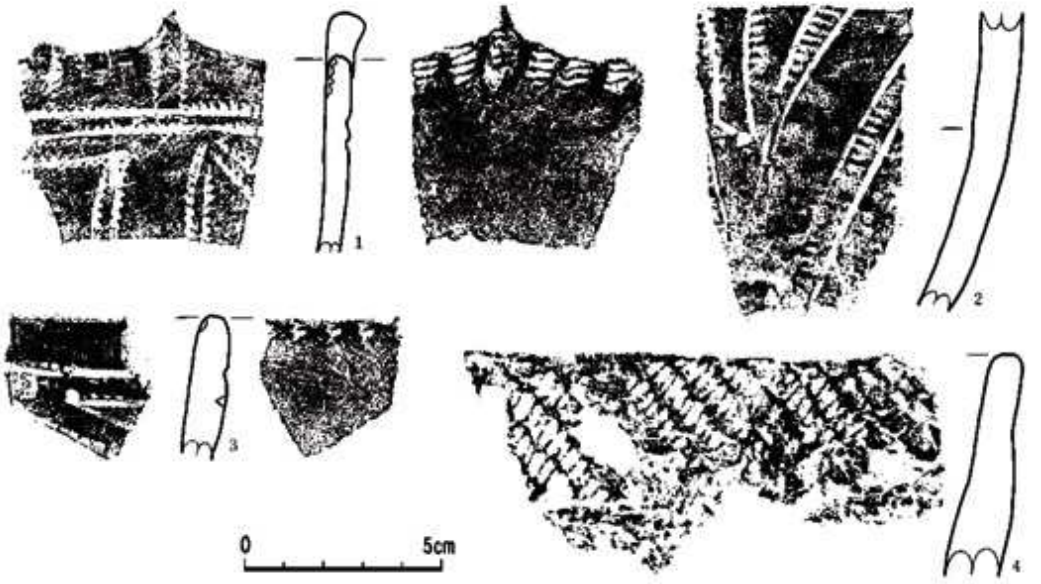
Ａ類　竹管類等を用いた刺突列によって文様を構成したもの

Ｂ類　竹管類を用いた押し引き沈線ないし沈線によって文様を構成したもの

Ｃ類　器面全面に縄文を施文したもの

Ｄ類　押型文を施文したもの

以下、それぞれの特徴について述べるが、これに先立ち、第　群土器の施文具とその手法に



第11図　第Ⅰ群土器

ついて述べておく。

第　群土器、特にＡ・Ｂ類は地文としての縄文を除くならば、刺突文と沈線文の類が特徴的である。その施文具は、竹管の類・ヘラ状工具・棒状工具・貝殻又は爪・縄文原体の末端等が用いられているが、なかでも竹管の類は、種類・施文手法等に多くの変化が認められる。

竹管文の種類と施文手法に関しては、麻生に始まり（麻生 1953）[注4]、佐原（ 1956）[注5]、可児（ 1969）[注6]、西川（ 1983）[注7]等によって研究されている。また、西川によれば、篠原によってもされている。（篠原 1978）[注8]とのことである。特に、可児と篠原は、西川が特殊な竹管と一括した類をも扱っている、本遺跡にみられる竹管類と施文手法を理解する上で重要なものと考えられるが、篠原の論考に接することができなかった。

竹管の種類・施文手法・施文方向

竹管文を観察すると、器面とのなす角度がやや鋭角に施文されたものが多い。このため、麻生が分類したような、 3〜 5截・多截の識別が困難であり、主として西川の呼称にしたがった。

竹管文具は、その断ち割り方によって、　円竹管・　半截竹管・　劣截竹管・　多截竹管の 4種類がみられ、これは更に先端部の加工によって、ａ．加工されず先端が平坦なもの、ｂ．截断面から表皮側に向けてはすにそいだもの、ｃ．先端部が平坦で刻みを入れたものなどに分けられる。ｂとｃは、西川によって特殊なものとして一括されたものである。ｂは、可児におけるＥに相当するが、本遺跡の場合は、単に、はすにそぐばかりではなく、全体的に先端部を丸く整形している。ｃは、篠原によって復元されたもののなかに存在すると考えられるが明確ではない。本遺跡におけるｃは、多截竹管を用い、また、大石平（ 1）[注9]遺跡の場合も多截竹管ないし、ヘラ状工具であって、半截・劣截によるものは観察されなかった。

以上の施文具のうち、Ａ類では円竹管を除くすべてが使用されていると考えられるのに対し、Ｂ類では　〜　のａに限定される。ただし、Ａ類では半截竹管と断定し得るものはなく、また、Ｂ類では　多截竹管と考えられるものは少ない。

文様との関係において、施文角度と手法は重要な役割りを果たしている。可児は施文角度を、 1 - 90 前後、 2 - 60〜70、 2 - 45 前後、 4 - 20〜30、 5 - 10〜15 の 5段階に分けて観察した。本遺跡においても、これを参考として施文実験を行い、土器面の観察を試みたが、識別の困難なものも多く、取りあえず西川同様、 1 - 90 前後、 2 - 表皮面と器面とのなす角度が鋭角なもの、 3 - 截断面と器面のなす角度が鋭角なもの、 4 - 半載以下の弧の一端を器面にあてたもの、の 4種類に分けておく。

施文手法には、イ - 刺突、ロ - 引きずり刺突、ハ - 押し引き、ニ - 引きずり、ホ - 交互に支点を変えての引きずり、の 5種が認められた。

以上の観察を、本遺跡出土のものに限定してまとめたものが第 2表である。

第２表　竹管の種類と施文手法

竹管名				器面との角度		手法		文様	
Ⅰ 円竹管				1	直角	イ	刺突	円形竹管文	B
				3	表皮面側	イ	刺突	刺突文	B
						ハ	押し引き	押し引き沈線文	(B)
						ニ	引きずり	沈線文	(B)
Ⅳ 多截竹管	Ⅲ 劣截竹管	Ⅱ 半截竹管	a 先端平坦	1	直角	イ	刺突	刺突文	A・B
				2	截断面側（内側）	イ	刺突	刺突文	A
						ロ	引きずり刺突	引きずり刺突文	A
						ニ	引きずり	平行沈線(沈線)	A・(B)
						ホ	支点替え	コンパス文	A
				3	表皮面側（外側）	イ	刺突	刺突文	A・B
						ロ	引きずり刺突	引きずり刺突文	A・B
						ハ	押し引き	押し引き沈線文	B
						ニ	引きずり	沈線文	A・B
				4	弧の一端	イ	刺突	刺突	A
			b 先端丸	1	直角	イ	刺突	刺突	A
						ロ	引きずり刺突	引きずり刺突文	A
				2	截断面側（内側）	イ	刺突	刺突文	A
						ロ	引きずり刺突	引きずり刺突文	A
				3	表皮面側（外側）	イ	刺突	刺突文	A
						ロ	引きずり刺突	引きずり刺突文	A
			c 先刻端口	1	直角	イ	刺突	刺突文	A
				2	截断面側	ロ	押し引き	押し引き文	A

※
- ａ２の引きずり手法のうち(　)内は多截竹管による場合。
- ａ２の支点を替えての引きずり施文は多截竹管を除く。
- ｂは円竹管からも製作可能。
- 刺突文と押し引き刺突文等は、竹管の種類、角度により様々な変化がある。佐原のいう「内側竹管」・「外側竹管」の名称を付して呼ぶほうが、イメージ的に理解しやすいと思われるが、一方、関東・中部地方の中期の土器等の文様呼称として「キャタピラ文」、「角押文」など独得な名称を用いているようであり、その辺の事情に疎いため、単純に施文手法に「文」を付したもので、他意はない。

施文方向は、横位の場合、「時計回り」と「逆時計回り」の両者ともみられるが、口縁部や胴部等では「逆時計回り」のものが多く、波状・鋸歯状に施文する場合は、その形状に沿って「逆時計回り」、縦位に施文の場合は、口縁部側から底部側へ向けて移動施文されている。これに対し底部近くでは、平底であるA類の場合は「時計回り」尖底であるB類の場合は、尖底部側から口縁部に向けて移動施文したものが多い。このことについて、製作者の利き手と施文具との関係、また、施文の行い易さという点から考えると、口縁部や胴部を施文する際と底部近くを施文する際とでは、その対象となる土器の位置を逆転させて行うことが多かったと推察される。

A類（第12・14・15・17・18図）

竹管類等を用いた刺突文列によって文様を構成するものである。

円竹管を除く各種の竹管・ヘラ状工具・棒状工具・貝殻・縄文原体の末端等を、截断面と器面のなす角度が直角ないし鋭角に用い、主として刺突することによって文様を構成しているものである。竹管類は、半截竹管と断定し得るものはなく、劣截竹管と多截竹管が考えられる。また、竹管の先端部は、加工しない平坦なものとはすにそいだものが多く、平坦な先端部に刻みを付したものは 2例だけである。文様は、口唇上端や底面にも施文される。

器形　口縁は、平縁と考えられるものが多く、波状をなすものは 1例（ 127）しかない。

口唇部形状は、丸みを帯びるもの・平坦なもの・やや尖るもの・内削ぎのもの等があるが、量的にはさほど多くないものの、内削ぎのものが特徴的である。

底部は、ほぼ平底といえようが、底部周縁よりも中心が若干凸になった丸底風のものが多いようである。また、底径はかなり小さいものが多い。

全体的形態は、口径に比べ底径の小さな深鉢形土器であるが、胴部の途中から段をもってすぼまるものが 1例（ 77・78の同一個体）存在する。

上述の特徴をもつものには、縄文地文をもたないもの（ 1種）と縄文地文をもつもの（ 2種）とがある。

1種（第12図 5～ 7・51、第14図11～25、第17図51～第18図76）

縄文地文をもたないものは、その文様によって、更に、a - 刺突文とコンパス文を併せ施文したもの、b - 刺突文等によって鋸歯状等の文様構成をしたもの、c - 器面全体に横位に巡る刺突列が多段に施文されたもの、の 3種に細分される。

a（ 51・54～57、59～61）

コンパス文を併せ施文したものは 5個体で、すべて20 からの出土である。刺突列による波状文を施文したものは 1例（ 51）だけである。他は、ごく一部の破片であるため断定し得ないが、恐らく、数条を単位として、幾段かに分けて施文された刺突列の間に、コンパス文を横位に巡らせただけであろうと思われる。

51は、口縁と平行な刺突列を、上位から 5段・ 3段・ 5段以上と間隔をあけて施文し、上位の空白部には 2条の刺突列による波状文を、また、下位の狭い空白部にはコンパス文を横位に巡らしている。各刺突列は、劣截と考えられる竹管による平行沈線の割り付けにしたがって施文され、コンパス文の施文は刺突文の施文後である。なお、口唇部は内削ぎされている。

59は、 4段の刺突文列のうち中位 2段は、 51と同様劣截による平行沈線施文後になされている。口唇部は内削ぎされている。

57、 59～61は同一個体で、底部及びこれに近い部分の破片である。 59ではコンパス文の上位にＲＬの縄文が施文されているが、 60では刺突文が 1段施文されている。施文方向は、底部近くでは「時計回り」、底面では「逆時計回り」である。

竹管の種類は、すべて劣截竹管と考えられる。施文角度は 30～60 の間であるが、施文された各段で若干異なるようである。 57等は 30 前後で、引きずり刺突的な施文部分が多い。竹管の表皮面を器面に対し鋭角に施文したものは、 55、 56と 58、 57と 59～61の 3個体である。

ｂ（ 5・ 6・ 11～18、 20・ 21・ 25・ 52・ 53)

刺突文によって鋸歯状等の文様構成をしたものは、 10個体であり、 6がその典型的なものである。 20 出土の 2個体（ 52、 53) 以外は、 30・ 35 からの出土である。

竹管の表皮面を器面に対し鋭角に施文したものは、 6、 14及び 16・ 17の同一個体の 3個体である。刺突の施文具は、 18が多截ａ竹管と多截ｂ竹管、又は先端の丸い棒状工具及び縄文原体の末端を用いて複合施文したもので、他は竹管類である。多截ｃ竹管を用いたものは、 11～13と 14・ 25の 2個体で、前者の角度は 60 前後、後者は 30～45 である。 16・ 17の同一個体及び 20・ 21は劣截ａ竹管で、特に、後 2者は弧の一端を 30 前後で施文したものであろう。 52は劣截、 53は多截のａ管を用い、 30～45 の角度で引きずり刺突している。

5は、器形の概略を知り得る数少ないものの一つである。底部は接合しない。口径 17 4cm、底径 4 8cm、器高 20cmと推定され、口径のわりに底径の小さな深鉢形土器である。多截に近い劣截ａ竹管を用い、約 60 前後の角度で施文している。文様は、横位に施文された多段の刺突文列によって文様帯を 3分し、上位には、頂部をずらした鋸歯状の引きずり刺突によって菱形を構成し、その中に貝殻（爪？）による刺突列を横位に施文している。下位には、竹管の表皮面による大きな波状文を描き、その中間部に貝殻（爪）による刺突列を一周させている。

6は、劣截ないし多截ｂ竹管の表皮面側を、器面に対し鋭角に用いた多段の刺突ないし引きずり刺突によって文様帯を分割し、この間に、 3条を 1単位とする鋸歯状文を引きずり刺突によって描いている。施文角度は 30～90 の間で、かなりのばらつきがある。施文方向は、底部近くの 4段のみが時計回りである。

11～13は、口縁部文様は渦巻状（恐らくはワラビ状）と木葉形の文様を構成し、胴部下半と考えられる部分には、ヘラ状工具によって格子目状の沈線文を描いている。

53は、すべて引きずり刺突によって構成されているが、その文様は、多段の横位列の下位に「逆U字」形の施文があり、この中を「U字」形の施文で埋めている。全体的には、波状をなす引きずり刺突と、これを相対する引きずり刺突列との文様が構成されたものと考えられるが、この種の文様構成は主としてBにみられるものである。

c（6、22～24、62～76）

器面全面が多段の刺突文列によるもので、13個体である。小破片が多いが、本来的には何らかの文様構成をなしているものも含まれていよう。6・22～24が30・35出土で、62・64が20のU－20出土である。

竹管の表皮面側を、器面に対し鋭角に施文したものは1個体（73）だけである。刺突文等の施文具は23・68～72の同一個体が貝殻を用い、他は竹管類である。7は劣截a竹管、23と69は多截ないし劣截のa竹管で、特に69は、弧の一端を施文したもの、66は多截b竹管を用いて30～45の角度で押し引きしたもの、22・64は多截b竹管、63は劣截b竹管、19は多截a竹管を用い、45～60で刺突を多段に加えているが、底部近くは、口縁部に向かって30～45の角度で施文した引きずり刺突である。24・62・67・70・74は、多截a竹管又はヘラ状工具と考えられ、その施文角度は60～90である。また、79は、劣截b竹管による30～45の刺突と同一工具を、ほぼ90にして若干引きずりを加えた刺突ないしは棒状工具による刺突を併用し、63は60～45の刺突と30～45の引きずり刺突（下段）を併用している。

施文方向が時計回りであるものは63・66・73・75で、口縁部の63を除くと底部ないし底部に近い破片である。75の底面にも同心円状の刺突文が施文されているが、この施文方向は「逆時計回り」である。

2種（第12図8．第15図26～37、第18図77～78、第25図127）

縄文地文をもつものは、刺突文等の施文される位置によって、a－口唇部上端に施文したもの、b－口唇部直下に施文したもの、c－胴部等の一部に施文したもの、の3種に細分した。77と78の同一個体、及び127以外は30・35からの出土である。

a（8、26～29、127）

口唇部上端に施文したものは6個体で、波状口縁のものが1例（127）である。

8は、先端の尖った棒状工具による刺突と、多截a竹管による刺突の2種類が施文されている。28・29は多截a竹管の刺突、他は多截a竹管又はヘラ状工具による刻みであろう。

地文として、ループ文を施文したもの（27～29）と斜行縄文を施文したもの（8・26・127）がある。8はRLの縄文であるが、その施文はかなり乱雑である。26はR、127はLRである。

b（30・31・77・78）

口唇部直下に施文したものは2個体である。

30・31は同一個体で、口唇部直下の狭い無文部に縄文原体の末端によると考えられる刺突を巡らしている。以下、ループ文を帯状に多段に施文している。

77・78も同一個体である。口縁と平行な沈線を3本巡らし、多截a竹管の表皮側を器面に約30前後の角度で浅く引きずり刺突したものである。地文はLRの斜行縄文である。

c（32～37）

胴部の一部に施文したものは5個体で、すべて30・35からの出土である。

地文上に直接施文したもの（32・36）と無文帯を設けて施文したものとがあり、33・36・37の地文はループ文である。

37は胴部下半のもので、1類b種同様の構成をなしている。施文具が、縄文原体末端の可能性もあるが断定し得ない。34～36の刺突は先の尖った棒状工具であろう。

B類（第19図29～第23図124）

竹管類を用いた押し引き沈線、又は沈線によって文様を構成するものである。20（特に-20グリッド）に集中的に分布していたが、30・35では全く出土していない。

竹管は、先端部を加工しない平坦なもので、円竹管から多截竹管にいたる各種の竹管が用いられているようであるが、そのいずれであるかは判別し難い。

器形は、口縁が平縁ないし4波状口縁をなす尖底の深鉢形土器である。尖底部は、鋭角で鋭く尖るものと、やや鈍角で丸みを帯びるものとがある。

口唇部形状は、丸みを帯びるもの、平坦なもの、やや尖るものがあり、A類でみられた内削ぎのものはない。

施文部位は、器面全面のもの、口縁部のみのもの、口縁部と底部のものがあり、他に、底部のみのものもあると考えられる。

上述の特徴をもつものを、主として口縁部等の文様を無文面上に施文するもの（1種）と縄文地文の上に施文するもの（2種）、そして尖底部（3種）に分けた。

1種（第19図79、第21図85～第22図109）

無文面上に施文するものは、更に、a-押し引き沈線ないし沈線の終起点や交叉する部分等に刺突文を施文したもの、b-押し引き沈線文間に刺突列を施文したもの、c-押し引き沈線ないし沈線のみのものに細分した。

a（85～91）

押し引き沈線ないしは、沈線の終起点や交叉する部分等に刺突文を施文したものは7個体である。86・87は、口縁部文様帯に限定されているが、他は不明である。

85と87が沈線文、89は部分的に沈線化しており、86は最上位のみ沈線である。ただし、86の沈線は特に細く角張り、半截ないし劣截竹管の一端を用いて施文した可能性が強い。他はすべて押し引き沈線文で文様が構成されている。施文方向は、88と90が「時計回り」、他は「逆時計回り」である。

刺突文は、86が半截竹管、89が劣截竹管、他は円竹管と考えられる。その施文角度は、例えば80の場合でみると、30～90の間で様々に施文されているため、各刺突によってその印象は異っている。

文様は、2～3条の押し引き沈線等によって大きな波状ないし鋸歯状文を巡らし、これによって分割された各文様帯に、その波形に沿った、又は口縁と平行な短沈線を施文した例（85～88）と、すべて口縁と平行なもの（89～91）があるが、後者の場合小破片であるため断定し得ない。

b（79・92～94・96・97）

押し引き沈線文間に刺突文列を施文したものは5個体である。押し引き沈線が一部沈線化したものや、沈線のものはみられない。aに比べ、押し引き沈線文の間隔は狭く密に施文されている。

79は、口縁部の一部を欠失するものの、ほぼ完全に近く遺存していた。底部を除く器面は、口縁に平行する押し引き沈線と、半截竹管による刺突列が交互に施され、底部付近は斜位の押し引き沈線文を施文している。刺突文の施文は押し引き沈線施文後で、表皮面を器面に対し60の角度で行っている。施文方向は、底部では口縁部に向かって右上がりに、他はすべて「逆時計回り」である。

94の文様構成は、大きな波状を1条描き、これによって生じた区画内を、一方では口縁と平行な、他方では大きな波状文と相反する弧状の波線で充てんしているものと考えられ、基本的には92・96・97等小破片のため文様構成の明確でないものも、類似した構成であろう。

97は小さな円竹管、他は劣截竹管による刺突で、その施文角度は97が70前後、他は30前後である。

なお、94の胴部は撚り戻しによって作られたループで、ループ部分のみを多段に施文している。

c（95・98～109）

押し引き沈線ないし沈線のみのものは10個体である。なお、101は89と、109は81と、100は122と同一個体である可能性が強い。

94は上位2条を除き沈線、99は沈線、101は沈線と沈線化した部分がある。

文様は、口縁と平行なもの（98、100等）と何らかの文様構成をしたもの（99、102、105等）があるが、小破片のため明らかではない。ただし、99は94とほぼ類似した構成で、押し引き沈

線の間隔は密であり、この点においてｂに類似する。

2種（第19図80、第20図82・83、第22図112～第23図119）

縄文地文の上に施文するものを、更に、ａ－刺突文を施文したもの、ｂ－引きずり刺突文を施文したもの、ｃ－押し引き文ないし沈線のみのもの、に細分した。全般的に各沈線等の間隔は広く開き、Ｂ類 1種ａに類似する。

地文の縄文には、結束第 1種の羽状縄文と斜行縄文とがある。

ａ（80）

刺突文を施文したものは 1個体だけである。底部近辺を欠失するが、他はほぼ一周する。 4波状口縁をなし、鋭角的な尖底部をもつと考えられる深鉢形土器である。口縁に沿って 4本の沈線（一部に押し引きがみられ、施文後にこれをなぞって単なる沈線とした部分もある）を巡らし、波頂部下の最下段に山形の短沈線を描き、その終起点に円竹管文を施文している。施文方向は「時計回り」である。地文は結束第 1種の羽状縄文である。

ｂ（82）

引きずり刺突文を施文したものは 1個体で、大形破片から模式図的に図上復原したものである。口縁の 4か所に小突起をもち、緩やかな波状をなすと考えられる。器表面が荒れ、剥落が激しい。ＬＲの斜行縄文を地文としている。半截ないし劣截のａ竹管を用い、表皮面を器面と15～30の角度で引きずり刺突したものである。施文方法は、Ａ類に近似する。

ｃ（83、112～119）

押し引き文ないし沈線のみのものは 8個体である。すべて小破片のため文様構成等は明らかではないが、おおよそ 4波状ないし平縁の口縁に沿った押し引き沈線文等を数条巡らしたものと考えられる。地文の縄文には、結束第 1種羽状縄文（83・114・115・117）と斜行縄文とがみられる。

83は、多截竹管の裁断面側又はヘラ状工具による押し引き文である。114は、竹管類の表皮面を用いた沈線文であるが、一部にやはり多截竹管の裁断面を用いたと考えられる部分がある。113・117・118は、押し引き沈線施文後にこれをなぞって消し、若干の痕跡は残るものの、単なる沈線文としている。112と同様の可能性がある。116は押し引き沈線、119は沈線である。

3種（81、110、111、120～124）

底部は 7個体であるが、122は100と、また、81は109と同一個体の可能性がある。120・121はかなり鋭角な尖底部である。

尖底部の施文はすべて無文面上に、横位に巡らした例（122）を除き、縦位ないし斜位に押し引き沈線等が施文されている。横位の押し引き文を巡らせ胴部文様帯を区別したものが 3例（110、111の同一個体、120、123）ある。

120は劣截竹管による。123の押し引き沈線は、先端の丸い棒状工具と考えられる。

C類（第13図 9、10、第16図 38～50、第24図 125～第26図 159）

器面全面に縄文のみが施文されたと推定し得るものは、口縁部分を含む破片にほぼ限られ、その個体数はあまり多くない。使用される原体は、単節斜縄文（ 9、38、40、127～141）、複節斜縄文（10、126、142～144、147）、結束第 1種羽状縄文（145、146、148～153）、ループ文（39、41～50、155～158）、単軸絡条体第 1類の撚糸文（159）などがあり、更に、単節斜縄文と前々段合撚の縄文を併用したもの（126）がある。これは口唇部形状によって、 1種 - 口唇部が平坦なもの、 2種 - 口唇部が内削ぎ状のもの、 3種 - 丸みを帯びるもの、等認められるが、ここでは、各ブロックごとに、また、他に分類されたものも含めて縄文の種類と傾向について述べる。

ブロック 1出土のもの（第13図 9、10、第16図 39～50）

器面全面に縄文のみを施文したと推定されるものは、 9・10・39・40の 4個体で、他はA類 2種のいずれかに含まれる可能性がある。

縄文の種類はループ文が圧倒的に多く、他に無節（26）、単節（ 8・ 9・40）、複節（10）、直前段反撚（撚り戻し - 32）があるが、少ない。

器形の全容を知り得るものはなく、また、底部破片も出土していないため、 1類と同様の平底とは断言し得ない。復原ないし図上復原された 9・10では、口縁部から胴部上半は直立、又はやや外傾し、以下底部に向けて強くすぼまり、おおよそ 5・ 6に類似した器形といえよう。このため、一応平底の底部をもつものと考えておく。

口唇部形状は、 9・10が平坦で第 1種、39が丸みを帯び第 3種に相当するが、39は口唇部直下に幅の狭い無文帯を設けており、A類 2種 a、 bに共通する。

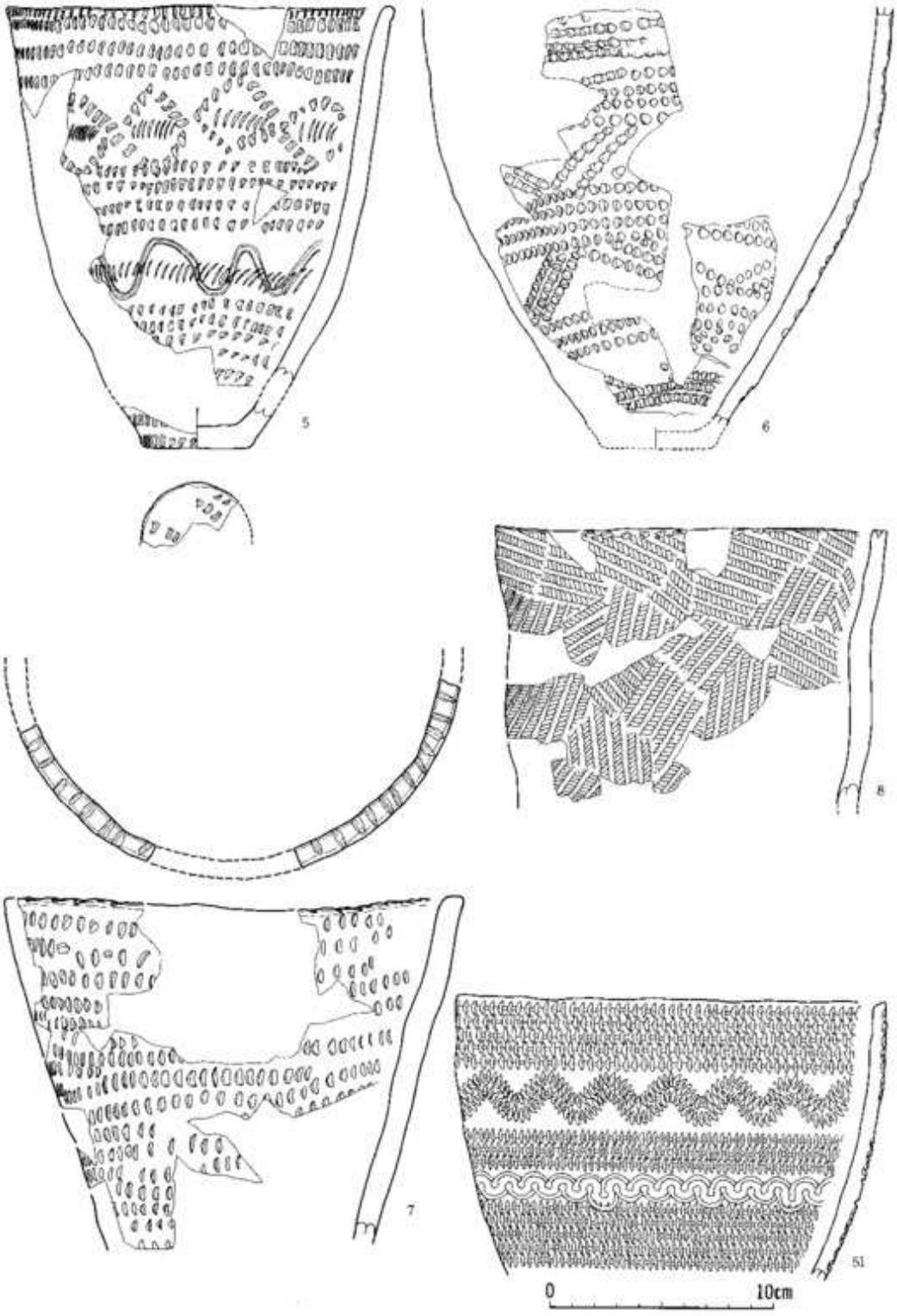
なお、31と48、36と42、39と41、44と50は同一個体、ないしはその可能性が強い。また、38は本ブロックからやや離れた35（E - 39）出土のもので、ヘラ状工具類による器面調整痕を顕著に残すが、口唇部形状は第 1種である。

ブロック 2出土のもの（125、126、128、129、132～144、153、154、156～159）

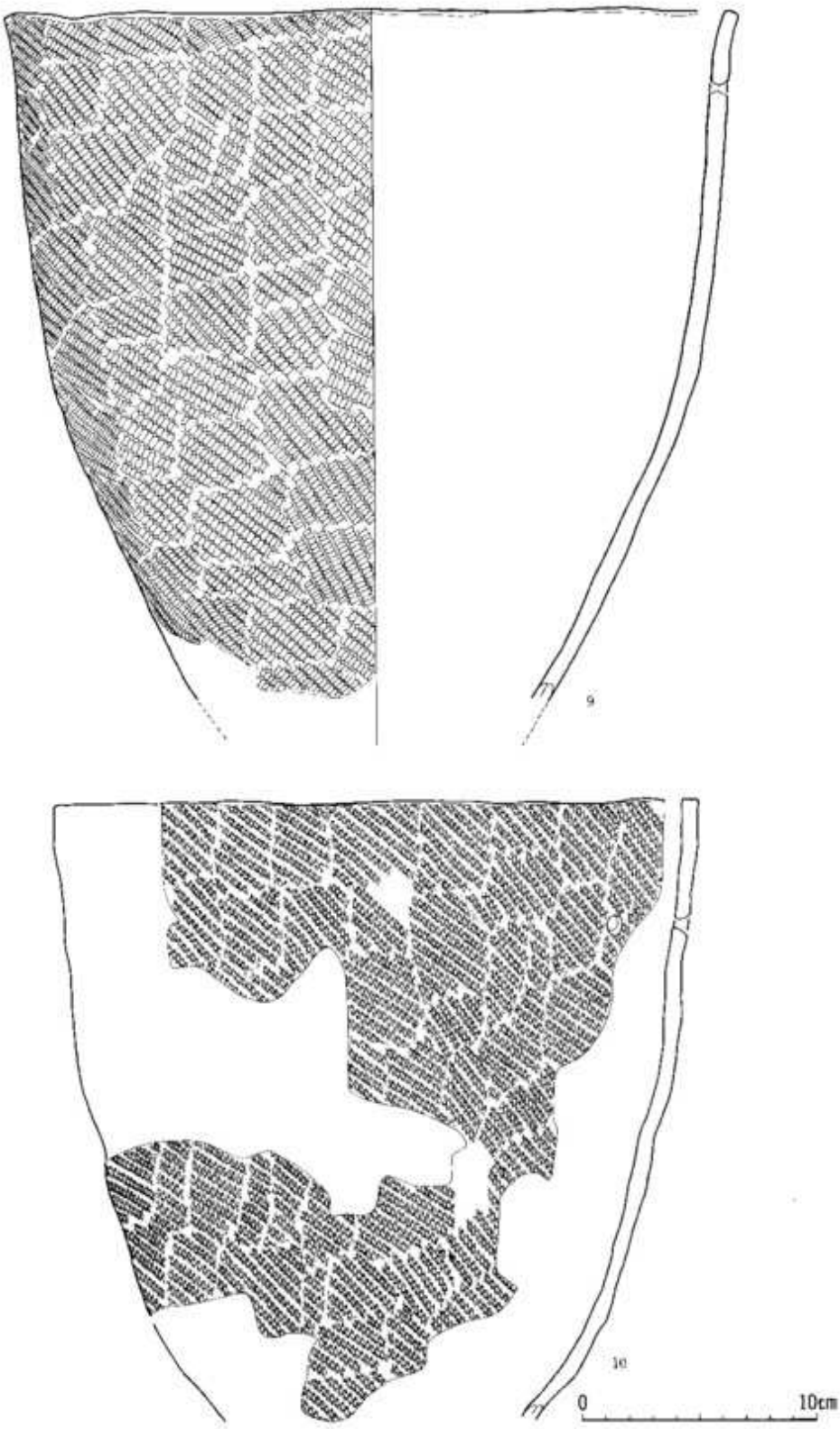
このブロックからはA類、B類の両者が出土し、縄文のみを施文したものも、このいずれかに含まれるものと考えられる。上記のなかで153、154、156～158は、竹管による何らかの文様が施文されている可能性を有している。

縄文の種類は単節斜縄文が多く、復節斜縄文（125、142～144）、結束第 1種羽状縄文（153）、ループ文（154、156～158）、撚糸文は少ない。

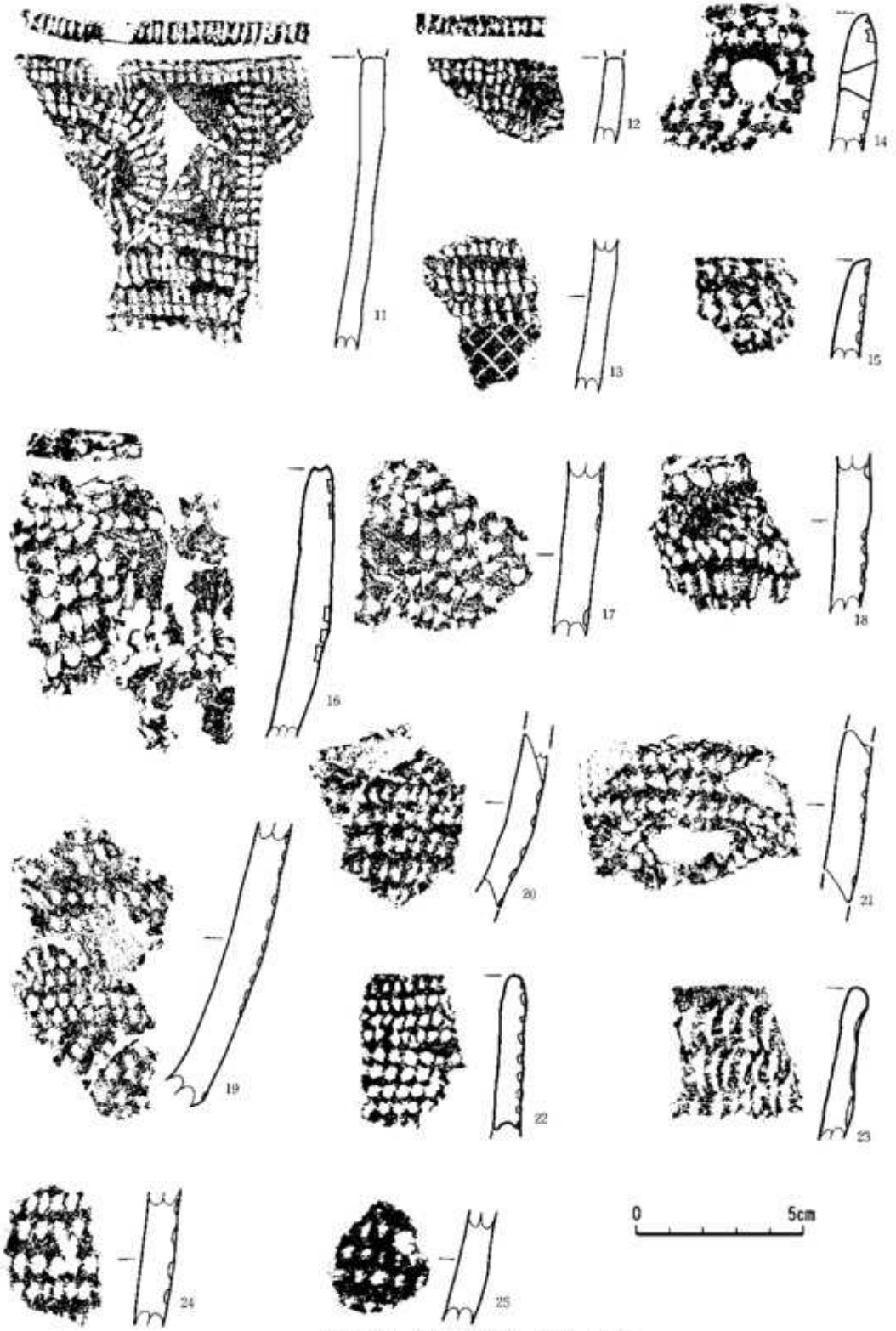
口唇部形状は、第 1種のもの（125、126、128、129、136、139～141、143、144、157）と、第 2種のもの（132、142、156）、第 3種のもの（130、133、138、145、146、150、155）があ



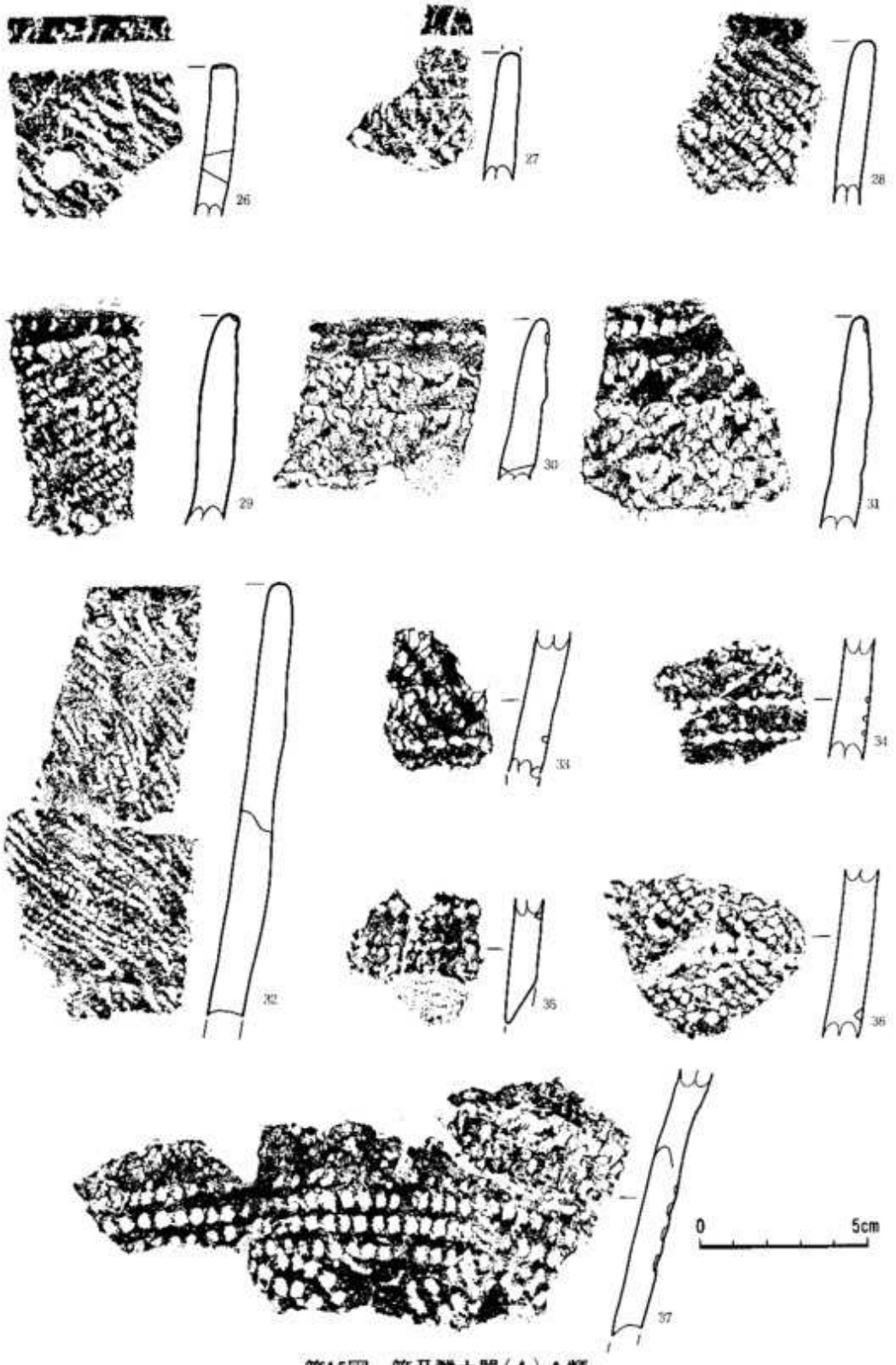
第12図　第Ⅱ群土器（Ⅰ）A類



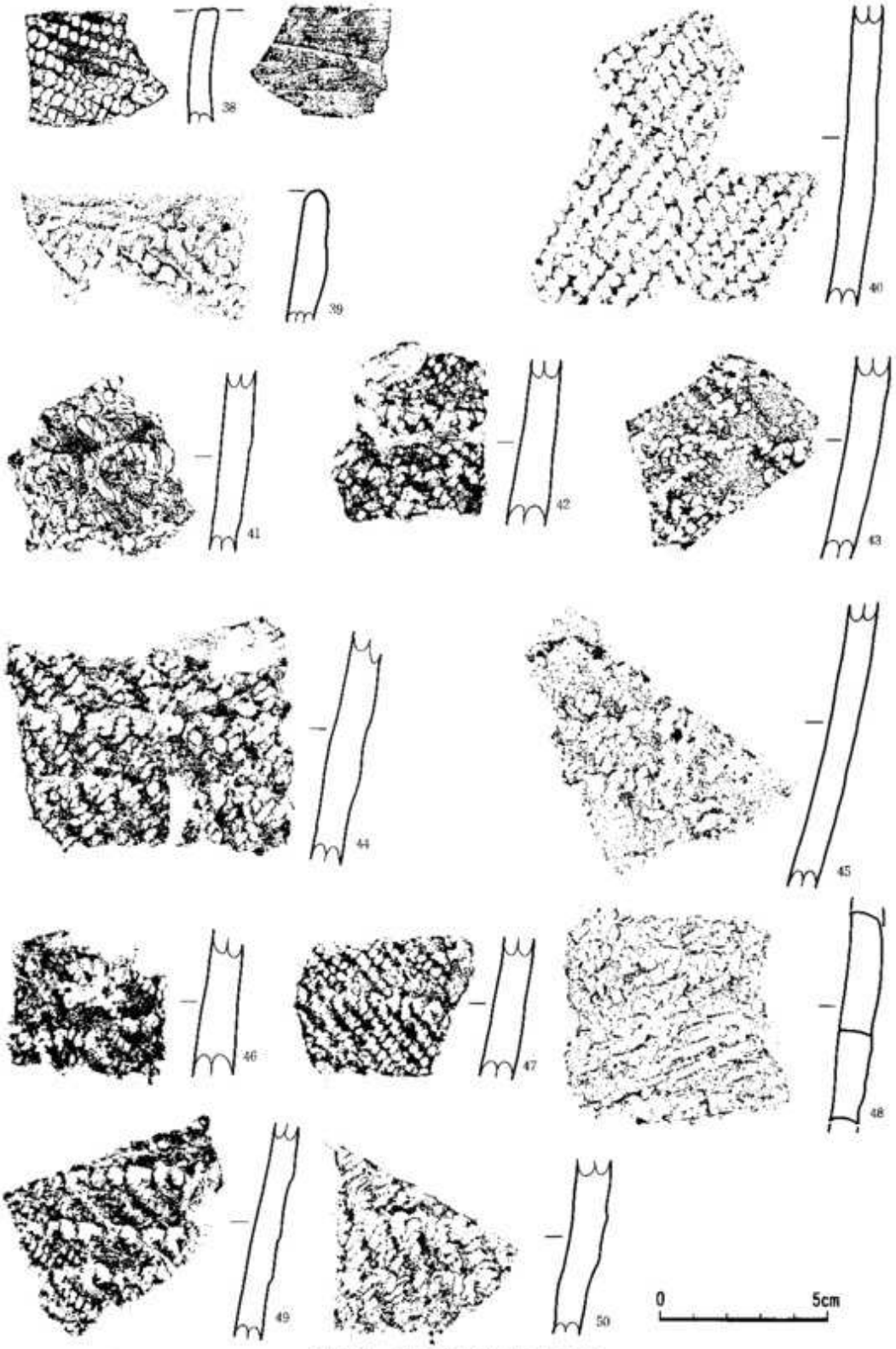
第13図　第Ⅱ群土器（2）C類



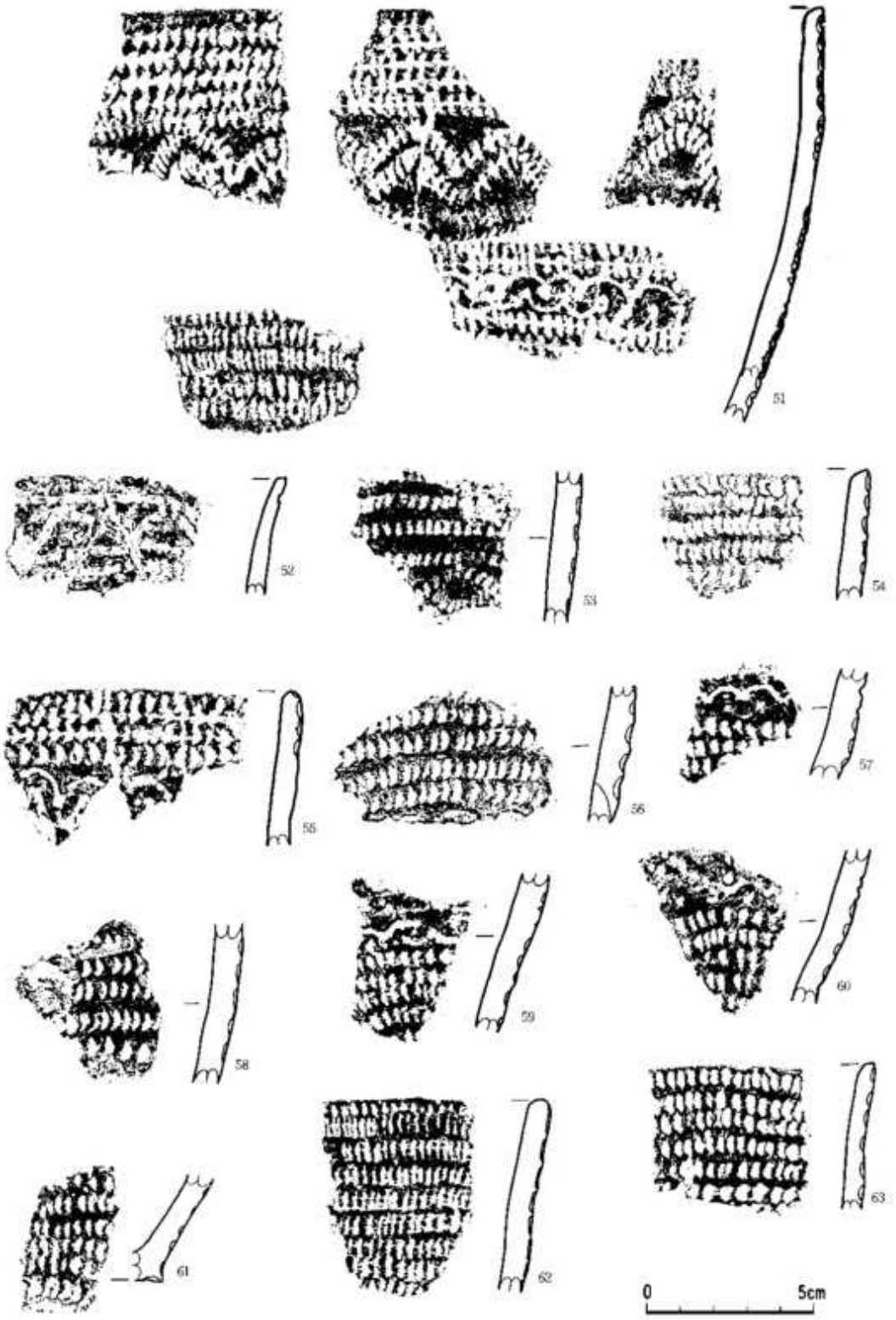
第14図　第Ⅱ群土器（3）A類



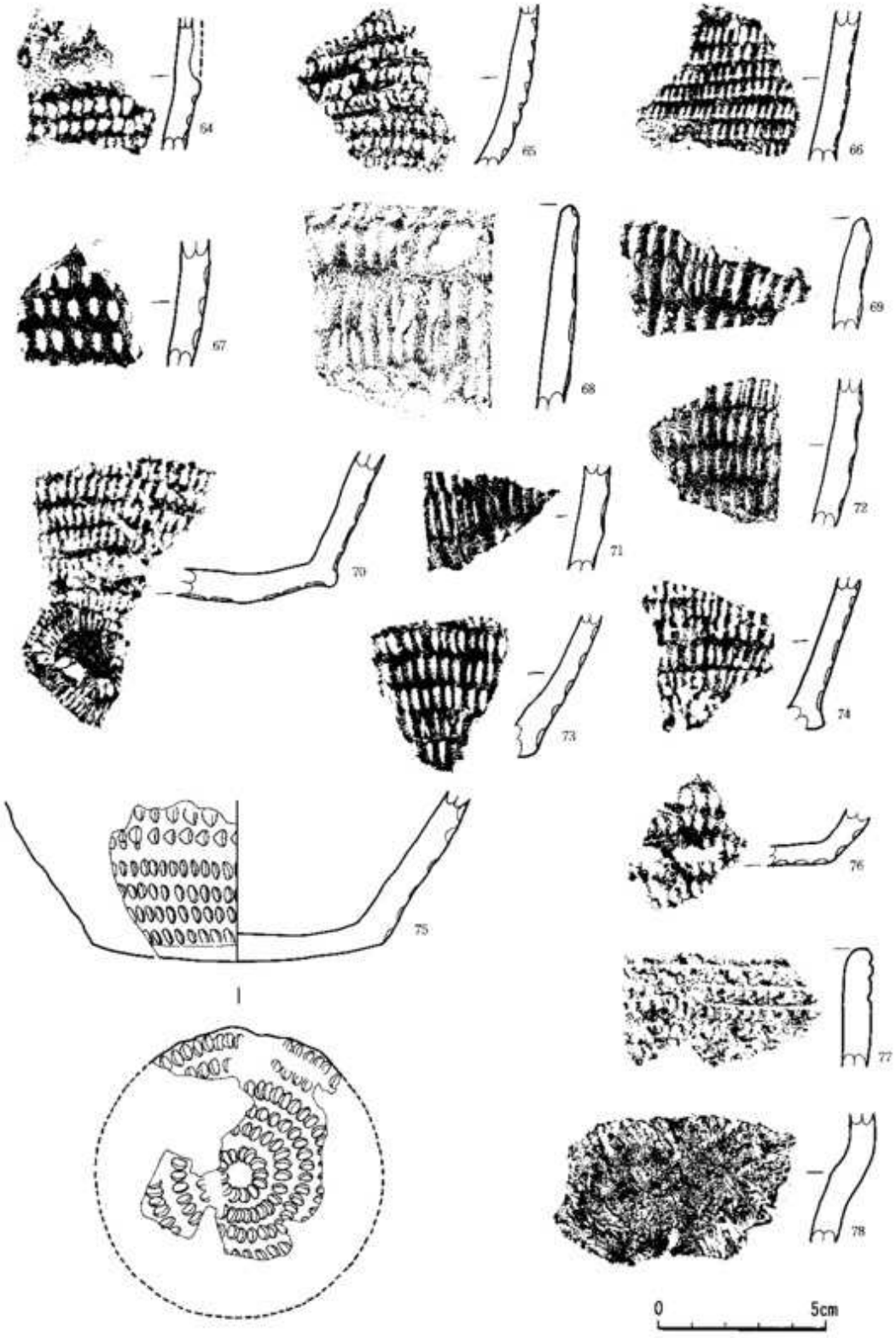
第15図　第Ⅱ群土器（4）A類



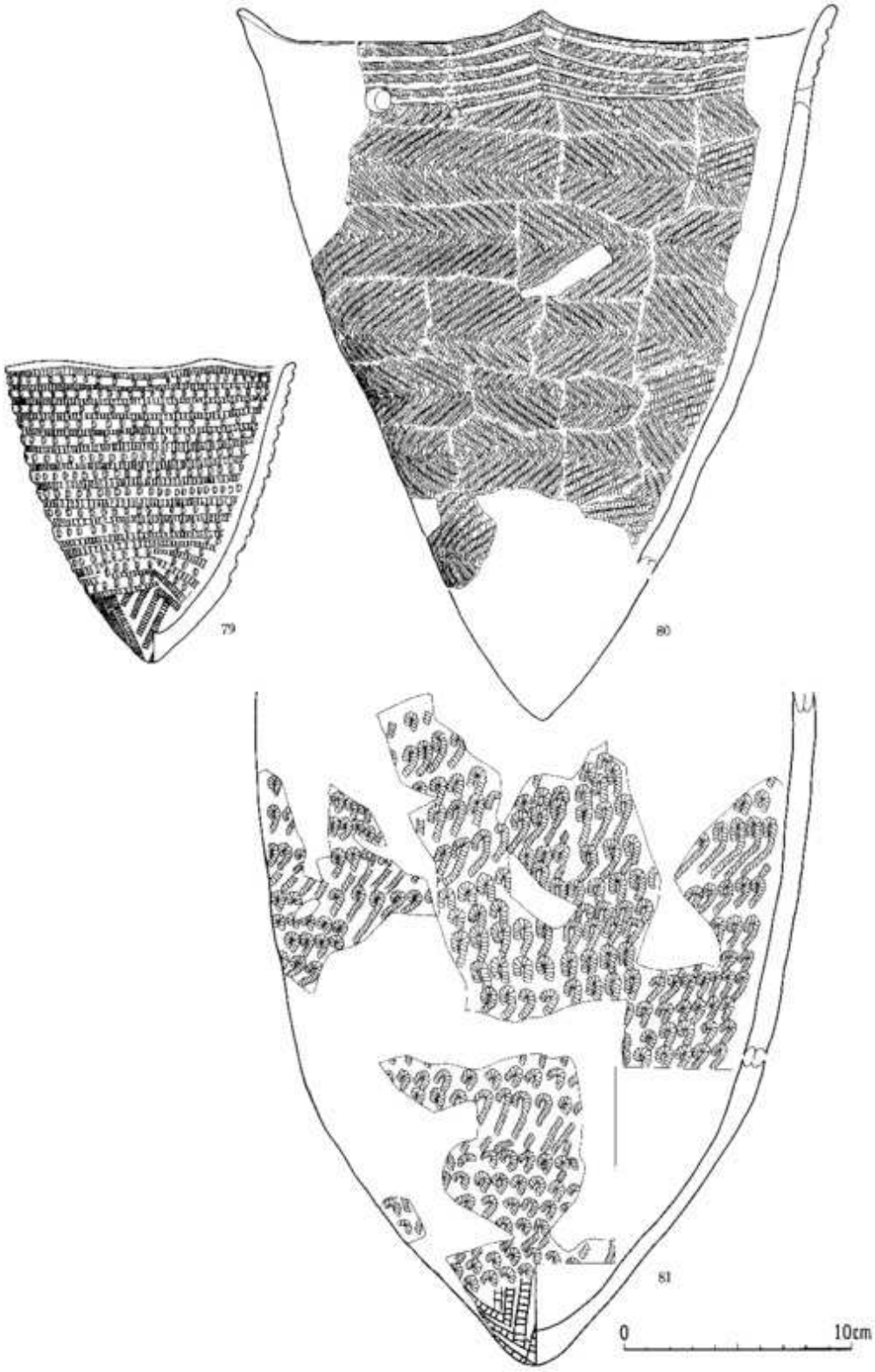
第16図　第Ⅱ群土器(5)C類



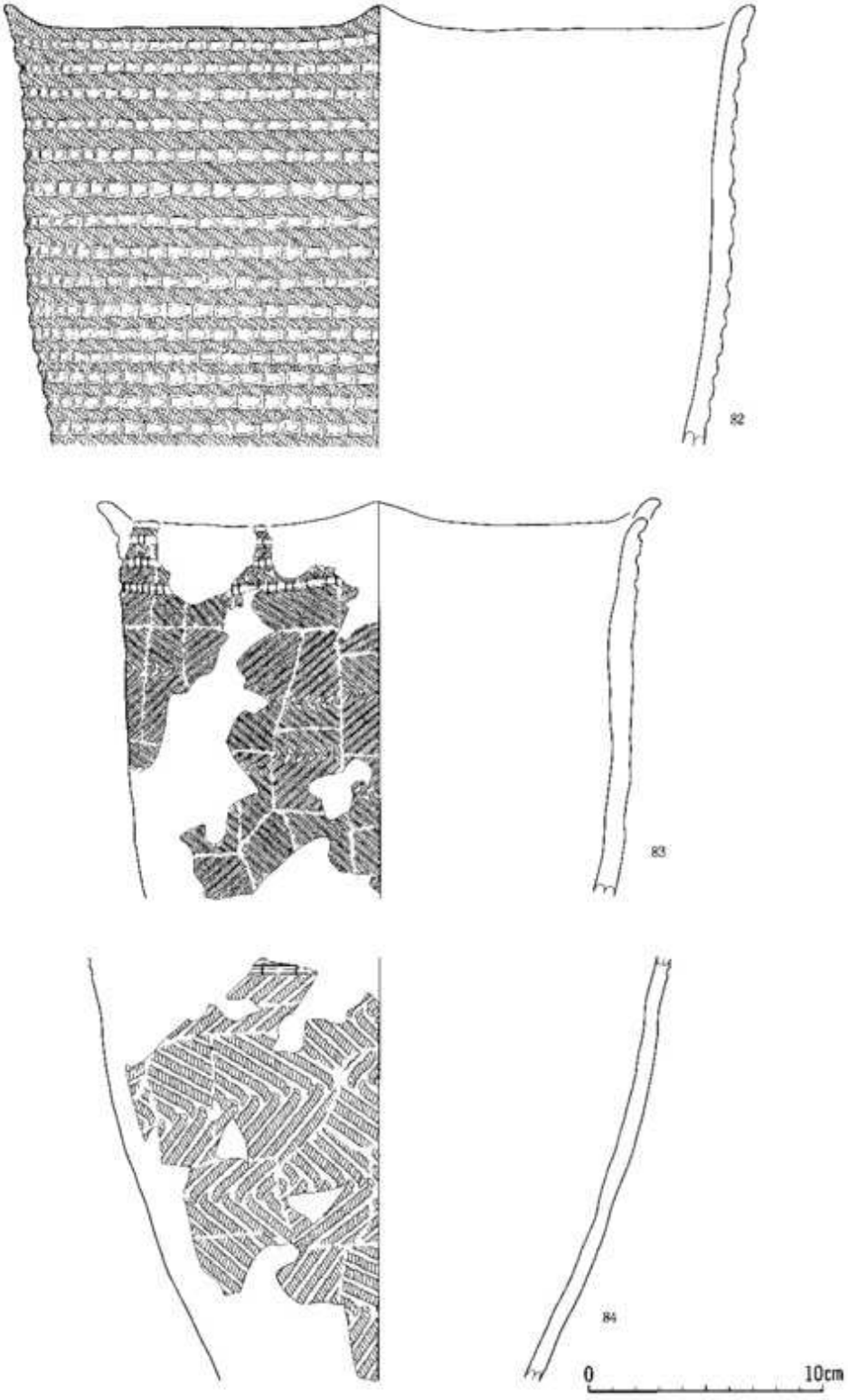
第17図　第Ⅱ群土器（6）A類



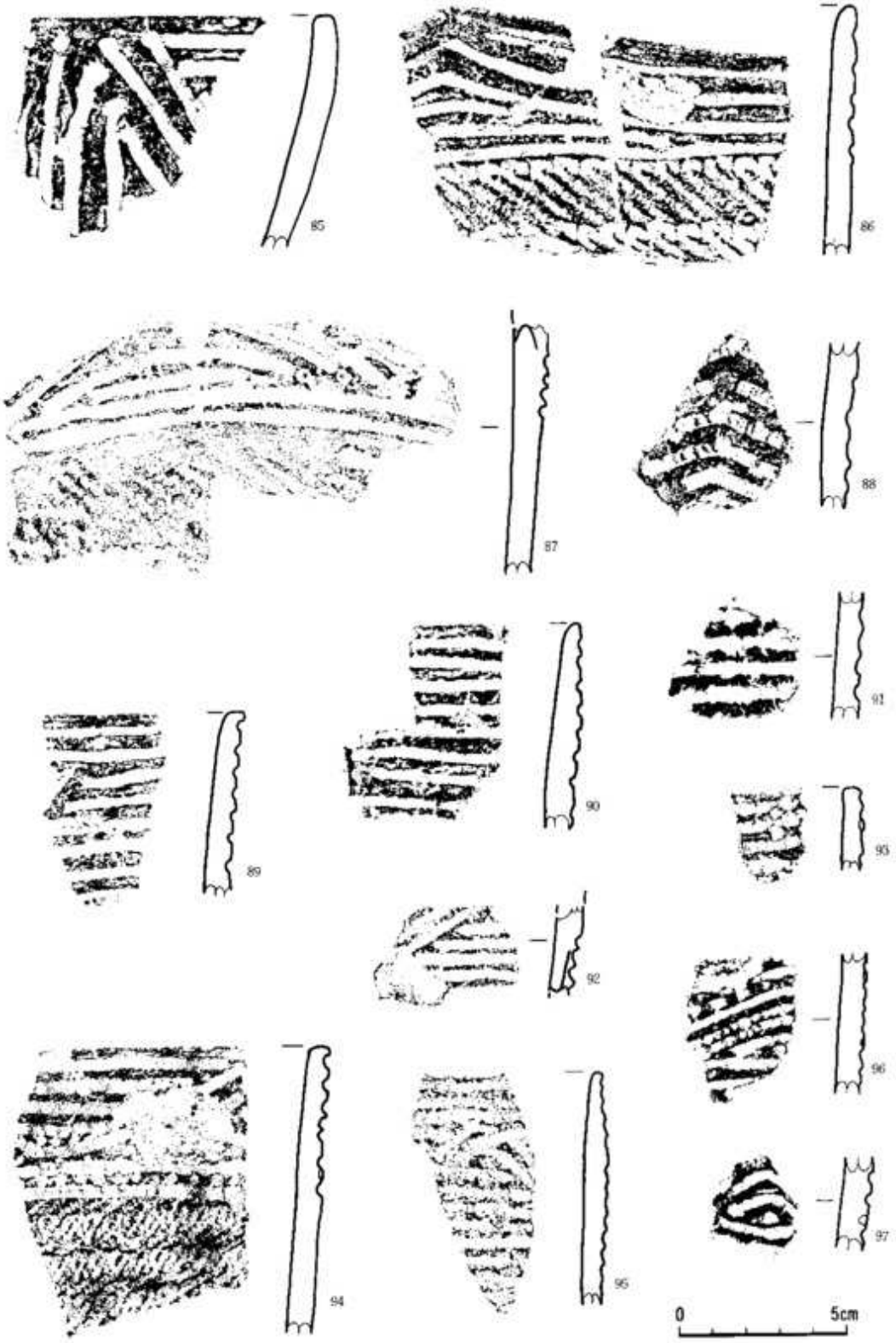
第18図　第Ⅱ群土器（7）A類



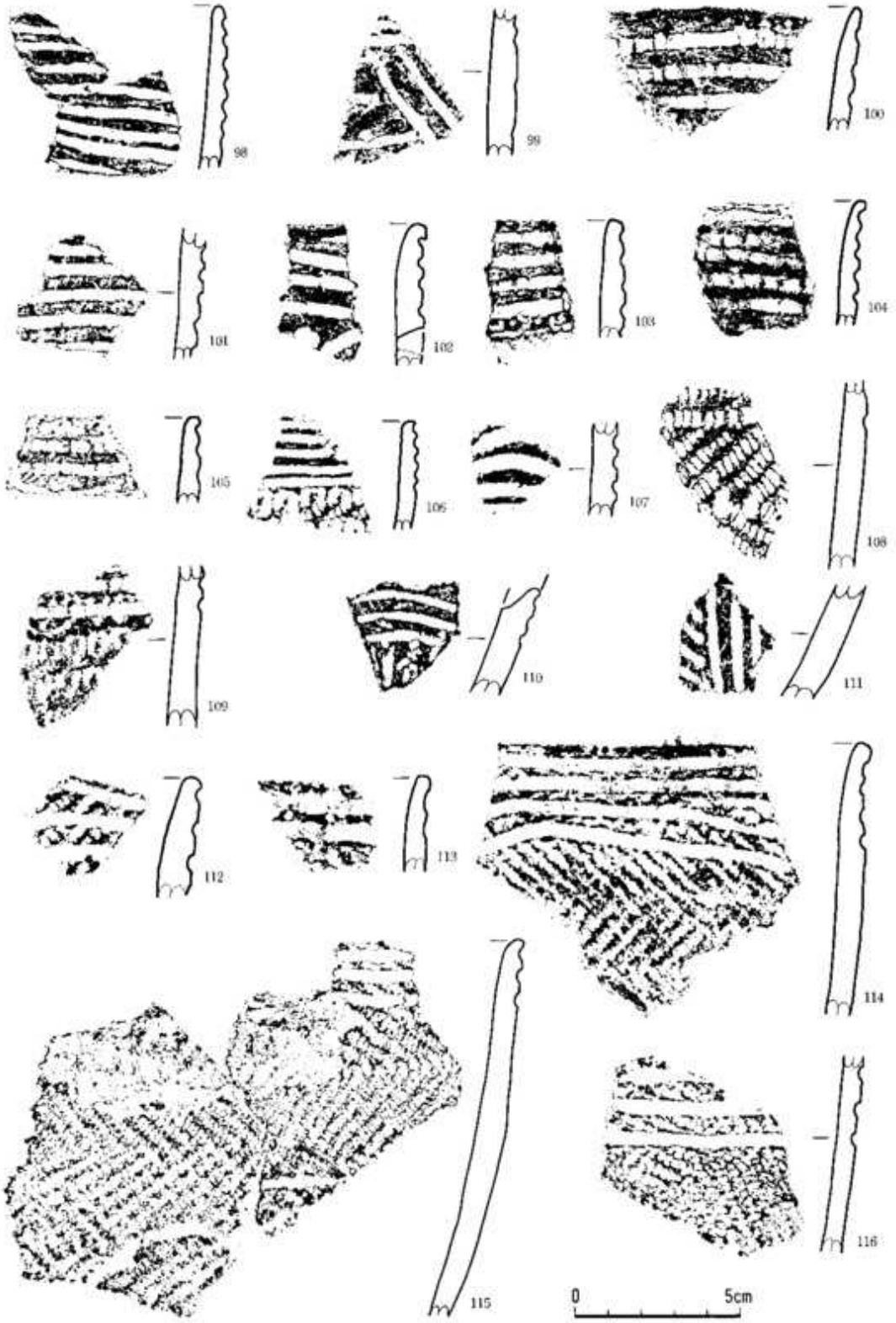
第19図　第Ⅱ群土器（8）B類



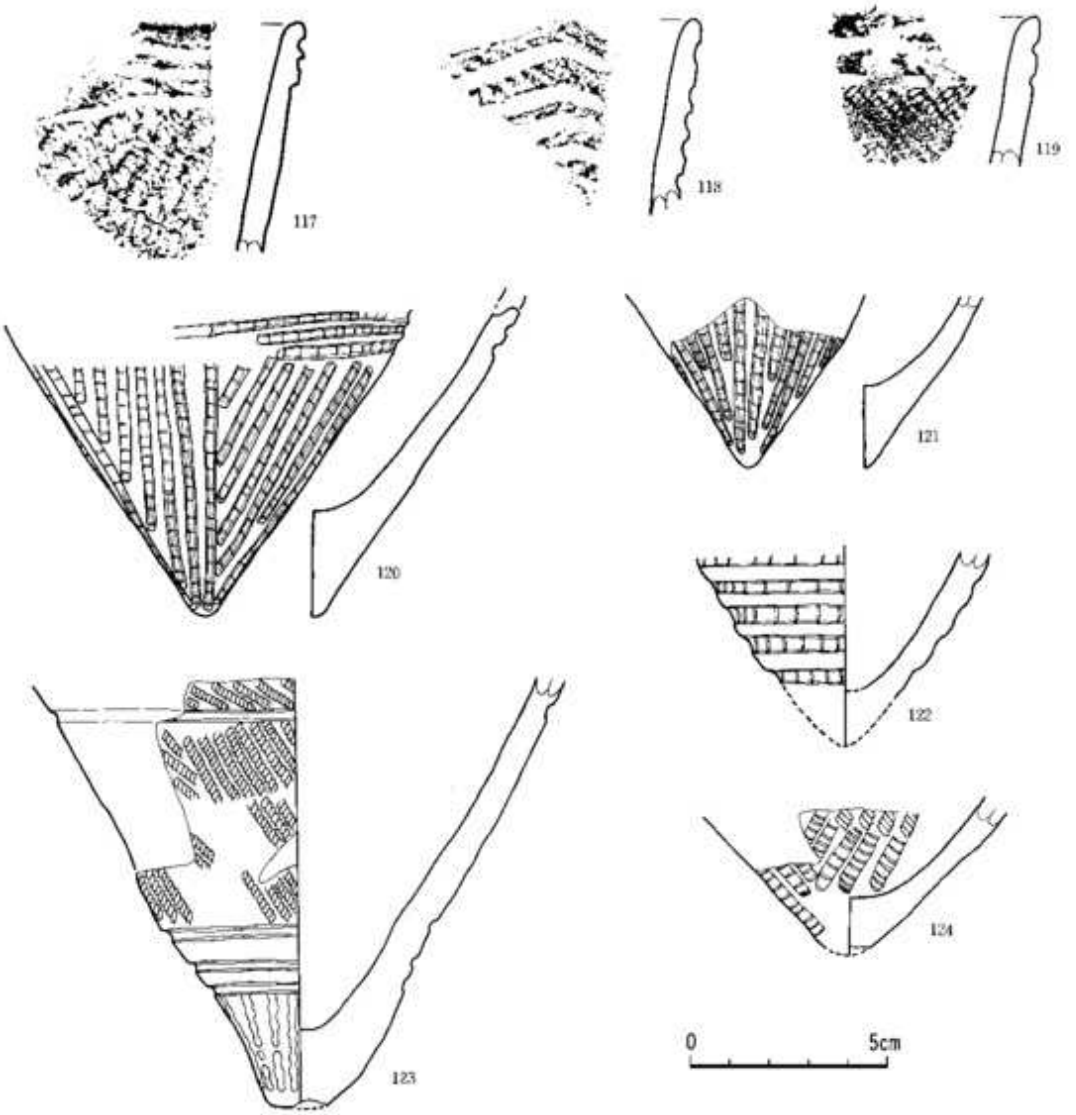
第20図　第Ⅱ群土器（9）B類



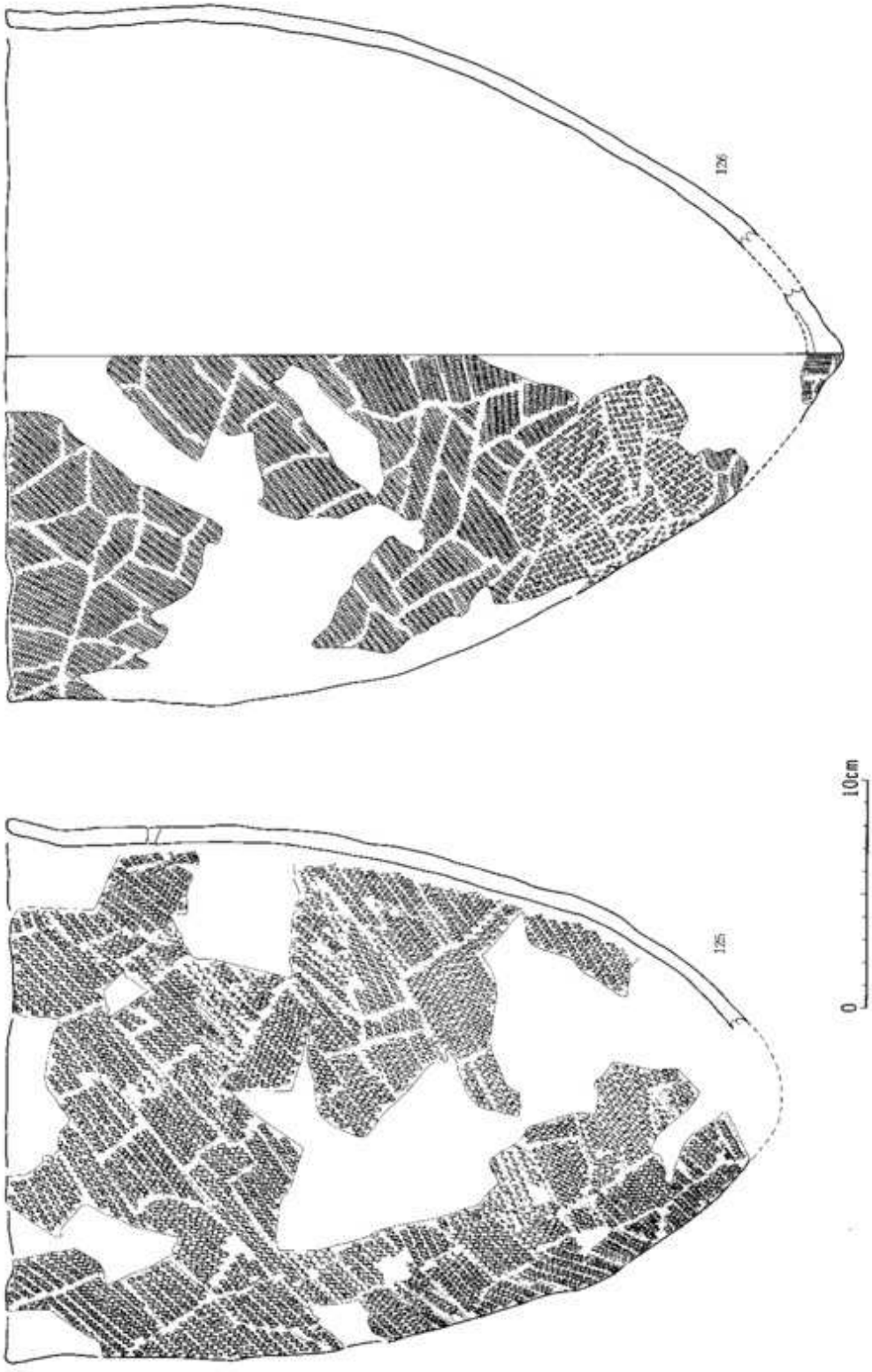
第21図　第Ⅱ群土器(10) B類



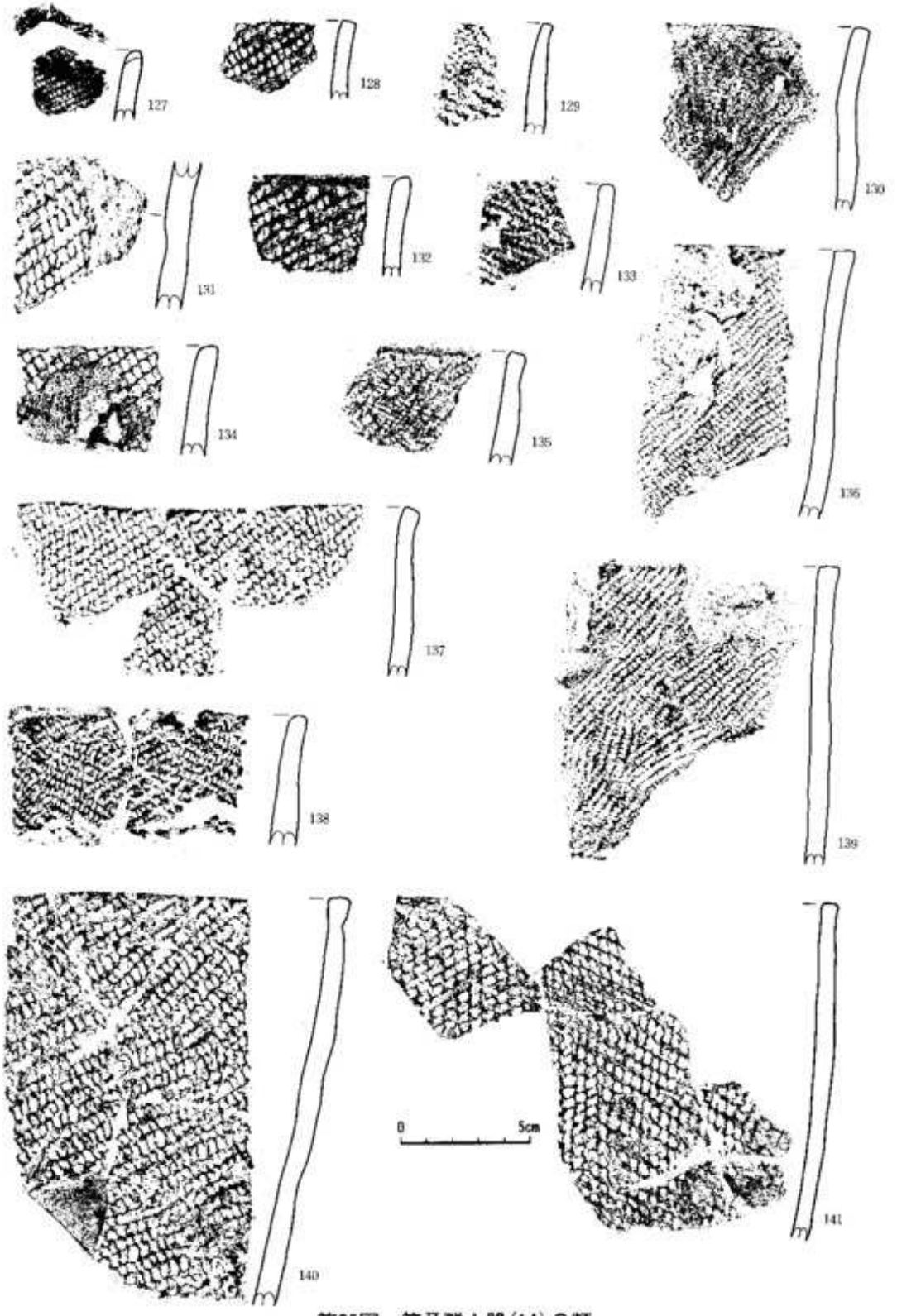
第22図　第Ⅱ群土器(11) B類



第23図　第Ⅱ群土器(12) B類



第24図　第Ⅱ群土器(13) C類



第25図　第Ⅱ群土器(14) C類

第26図　第Ⅱ群土器(15) C類

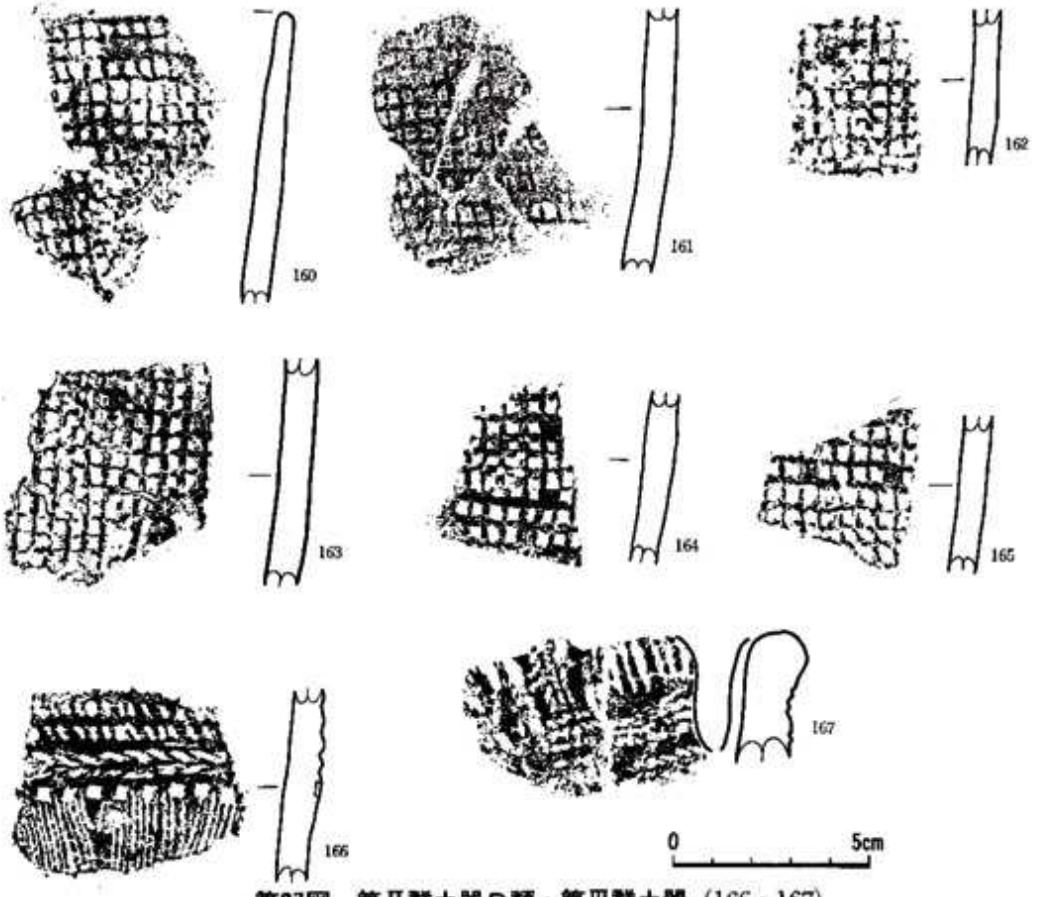
る。口唇部形状第 2種のものは、Ａ類 1種ａ、ｃの口唇部形状に、第 3種のものはＢ類の口唇部に共通し、各々に伴出するものと考えられよう。口唇部形状第 1種のものは、ブロック 1出土のものに類似するが、器形は尖底ないし丸底をなすと考えられ、同一視し得ない面がある。

なお 126は、口唇部から胴部のやや下半までと底部に単節斜縄文を、また、この間に前々段合撚の縄文を施文している。ただし、 1段ＬとＲの縄の撚り合せは不完全である。

154と 157のループ文は、末端の撚りを大きく戻して作られたと考えられるもので、そのループ部分だけを多段に施文している。

ブロック 3出土のもの

口唇部破片は 5個体で、このうち 3個体が結束第 1種羽状縄文、他の 2点は単節斜縄文（ 130）とループ文（ 155）である。Ｂ類としたもののなかで、このブロックから出土したものをみると、やはり結束第 1種羽状縄文が多く、次いで単節斜縄文が多く、ループ文は少ない。これは、ブロック 1と対照的な様相を示しているといえよう。



第27図　第Ⅱ群土器Ｄ類・第Ⅲ群土器（166・167）

口唇部形状は第 1種で、口唇部が厚みをもつものと、薄く若干外反するもの（ 145、 150）があり、Ｂ類の口唇部形状に共通する。

器形を復原し得たものはないが、Ｂ類と同様、平縁ないし小さな波状口縁（ 145、 150、 155）の尖底土器であろう。

なお、胴部破片に複節斜縄文のもの（ 147）が 1点存在する。

Ｄ類（第 27図 160～ 165）

押型文を施文したものは 9点出土したが、 3～ 4個体と考えられ、 20 ・ から出土した。

文様は、すべて方形ないし長方形気味のもので、その大きさは、 4㎜ 3㎜～ 2㎜角である。

口唇部破片は 1点で、その口唇部形状は丸みを帯びる。小破片のため、器形及び回転施文されたものであるかどうかは不明である。

第 群土器について

この土器は、竹管類による文様施文を特徴とするもの、及びこれに関連するものを当てたが、これらは前期初頭に位置付けられている芦野 群ないし表館式と称されるものと、早稲田 6類を包括している。この中で、Ａ類は刺突文を主体とすることから前者に、また、Ｂ類は押し引き文を主体とすることから後者に相当する。

Ａ類（芦野 群・表館式）

刺突文のみのもの（ 1種）と、縄文を主体とし刺突文を併せ施文したもの（ 2種）とに分け、更に各々 3細分した。この結果、 1種では、コンパス文を施文したもの（ａ）はすべてブロック 2、刺突文のみで鋸歯状等の文様構成をなしたもの（ｂ）はブロック 1の大半のものが該当しブロック 2にごく少数、多段に施文された刺突文のみのもの（ｃ）はブロック 2に多くブロック 1・ 3にごく少数みられ、また 2種では、ブロック 2出土の 1点を除くすべてがブロック 1の出土であった。ブロックによって文様構成が異なっているが、これが本来的なものであるか、各ブロックの個体数の少なさに起因するものであるかは即断し得ないが、若干装飾性に欠ける 2種がブロック 2では 1点より出土しないことから、後者である可能性を考えることができよう。つまりブロック 1・ 2出土のすべてのＡ類土器を同一型式と把握することである。しかし、ブロック 1と 2は、芦野 群ないし表館式が細分し得る可能性を示すと考えることも可能である。それは、これまで蓄積された資料は少ないが遺跡により各々様相が異なっていると考えられるからである。

第 3表は、青森県内における該当型式のなかで、刺突文を施文した土器についてごく簡単にまとめたものである。遺跡数は少なく、また各遺跡とも個体数も少ないのであるが、その中で、個体数の多い芦野遺跡にあっては鋸歯状文のものが少なく、ワラビ状文のものは全くみられない。また、コンパス文は多段に施文されていないようである。これに対し、発茶沢遺跡では少

第3表　各遺跡における文様対比表

		注11 表　館	注12 芦　野	注13 発茶沢	注14 永　野	注15 大　面	注16 砂沢平	注17 前坂下B	注18 山崎D	注19 清水頭	表館H
a	刺突＋コンパス文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	刺突＋コンパス文＋縄文	○	○						○	○	
b	鋸歯状文		○	○							○
	ワラビ状文			○		○					○
c	多数の刺突	○	○	○		○			○		○

ないながらも鋸歯状文とワラビ状文がみられ、また、コンパス文は多段に施文されている。更に、大石平（　1）遺跡では、当該資料が多数出土し、そこではワラビ状文・鋸歯状文・多段の刺突文が多く、コンパス文を施文したものは極端に少ないようである。

コンパス文は、関山　・　式及び黒浜式にみられるが、仙台湾周辺では現在のところ大木　2ａ式にみられる[注20]。また、山形県下では松原遺跡[注21]、青森県の上記諸遺跡、北海道南部の石川野遺跡[注22]、道央部の吉井の沢遺跡[注23]、美々　4遺跡[注24]、美々　5遺跡[注25]で検出され、各々関山式に対比されている。このコンパス文を施文したもののなかには、石川野遺跡のように刺突列によって山形を構成してこの間の空白部にコンパス文を充填させたものもあるが、類例は砂沢平遺跡にみられるだけである。

鋸歯状の刺突列を施文したものは、福島県宮田貝塚　群[注26]、宮城県金山貝塚[注27]ｂ、ｃ、山形県松原遺跡　3群にみられるが、大半は口縁部文様帯にほぼ限られている。また、ループ文の回転によっても同様の構成のなすものも多く、これには上述の遺跡のほか岩手県の松倉遺跡[注28]、小堀内遺跡[注29]など東北南部の遺跡及び埼玉県打越遺跡[注30]など関東地方の関山式にみられる。

また、本遺跡では、鋸歯状文に含めたワラビ状の文様構成をなすものは類例が少ない。美々　4遺跡の例（図138-　13）、宮田貝塚の例（　12図25）、金山貝塚の例（　16図77）などが、あるいは関連するものと思われるが、東北地方では現在のところ松原遺跡の例（　8図11）に代表されるように、むしろ花積下層式に対比し得る上川名　2式に特徴的にみられる。一方、関東では花積下層式、関山　1式等の基本的文様の一つのようである。

以上のことを勘案すると、芦野　群・表館式と称されるものは、コンパス文を主体として文様構成するものと、鋸歯状文・ワラビ状文を構成するものに分離し得るようであり、更に、前者はコンパス文を口縁部の一部に施文するものと多段に施文するものに、また、後者は鋸歯状文のものとワラビ状文を構成するものに分離し得る可能性があり、今後更に分析する必要があろう。また、上述のように細分し得た場合、その編年が問題となるが、関山式土器の細分とも

関連する。つまり、関山式に関しては幾つかの細分案[注31]が提示されているが、その概略にしたがって単純に比較するならば、コンパス文は 1式の途中で採用され、当初の用い方は石川野遺跡や砂沢平遺跡に類似するが、後に多段に施文される。鋸歯状の文様や鋸歯状のループは関山式に、また宮田貝塚　群や松原遺跡 4群にみられる組紐は同じく　式に、ワラビ状の文様構成は同　式に対比されることになろう。むろん、このような単純で、荒っぽい論は成り立つもののではなく、また、現時点では芦野　群、表館式の細分に有効な手段を見い出せないため、今後の課題としておきたい。

Ｂ類（早稲田 6類）

押し引き沈線文を特徴とするＢ類のうち、押し引き沈線とその終起点に円形竹管文の類を施文したもの（ 1種ａ）と、縄文を地文として押し引き沈線を施文したもの（ 2種）及び押し引き沈線のみのもの（ 1種ｃ）の一部は、鷹架Ａ　群[注32]に相当し、また、押し引き沈線文の各間に刺突列を加えたもの（ 1種ｂ）と 1種ｃの一部は和野前山第 8群[注33]に相当する。

和野前山遺跡の報告において、早稲田 6類と芦野　群・表館式の編年的関係は逆転するとの大沼や熊谷[注34]の見解とは別に、従来の編年観に基づいた早稲田 6類の細分とその編年について言及した。早稲田 6類が、少なくとも鷹架Ａ　群と和野前山 8群に細分されることは明白であり、変更の必要はないと考える。しかし、その編年に関しては、前述した芦野　群・表館式の細分、つまり関山式の細分や、これらに先行する長七谷地　群、花積下層式とも深くかかわることであり、再検討する必要があると思われる。

Ｃ類

縄文のみを施文したＣ群は、Ａ群ないしＢ群のいずれかに伴うべきものである。

本遺跡の場合、Ａ群に関連する結束第 1種羽状縄文は存在しないが、芦野遺跡ではかなりの個体数が得られ、特に片翼状のものが多く特徴的である。他に、結束されない 2種類の原体によるものがある。また、前坂下（ 13）遺跡においても片翼状の羽状縄文が出土している。

口唇部形状が平坦なものは、ブロック 1と同 2で出土した。前者の器形を平底と推定したが、後者は丸底ないし尖底である。和野前山第 8群にはこの種の尖底土器が伴出し、芦野遺跡では平底と推測されている。早稲田 6類のなかで和野前山第 8群に伴出するものは尖底土器であるが、芦野　群・表館式に相当するもののなかには断定し得るものはないように思われる。これらに対比される東北南部の諸遺跡では平底（上げ底）であるが、発茶沢遺跡ではＡ群関係資料が多いにもかかわらず、これに関すると思われる第　群 1・ 2類は尖底ないし丸底で平底はない。したがって、縄文のみを施文したもののなかで口唇上端が平坦なものは、和野前山第 8群と同様、Ａ群にあっても丸底ないし尖底土器が製作されていた可能性も考慮に入れる必要があると考えられる。

Ｄ類

北海道東部地域の押型文土器に関連すると思われる。

青森県内では、これまで源常平遺跡[注35]・長七谷地貝塚[注36]の発掘資料、昭和54年の表館遺跡[注37]、昭和48年の下田代納屋Ｂ遺跡[注38]近くでの採集資料等がある、下田代納屋Ｂ遺跡近くでは早稲田 6類土器とともに採集されていることから、本遺跡資料もその出土地点から早稲田 6類に伴うものと考えて大過ないであろう。（三宅）

第　群土器

円筒土器に含まれるもので、前期終末の下層式土器（Ａ類）と中期初頭の上層式土器（Ｂ類）がある。

Ａ類（ 166）

植物性繊維を少量含み、胴部は木目状撚糸文で、口唇部文様帯との境に劣截竹管の截断面側を器面に対し45前後で施文した刺突列を巡らしている。口唇部の文様帯は、上位が絡条体圧痕文、下位がＬＲとＲＬの押圧文である。口唇文様帯は幅広と考えられることから、下層Ｄ式であろう。

Ｂ類（ 167）

「Ｍ字」状をなす波頂部の一方の破片である。微量の植物性繊維を含み、肥厚した口唇部をＬＲの縄で刻み込み口唇部文様帯ではＬＲ 2本、ＲＬ 1本を 1組として横位に押圧施文している。上層Ａ式であろう。（三宅）

第　群土器

縄文時代後期の土器を一括した。本群は、第　群土器とともに本遺跡の主体となる遺物で、第　層に包含され、第　層に包含される第　群土器と層位的に画されている。

遺跡南西部では盛土から出土したものもある。また、　・　層の区分が明確でない地点もあるが、おおむね第　層出土の土器は本群土器で、第　・　層には包含されないものと思われる。

文様構成及び時期的な面から 4類に細分した。

1類　後期前半の土器で、十腰内　群以前に相当するもの。

2類　十腰内　群に相当する土器。

3類　十腰内　群に相当する土器。

4類　縄文を主文様とする土器及び小破片。この類には 1～ 3類に相当するものも含まれるが、明確な型式的特徴を有しないために一括した。

1類

文様構成において隆帯を有するもの（Ａ種）と有しないもの（Ｂ種）に大別される。また、各個体には、それぞれ異なる特徴が観察される。

器形　深鉢形を基本とする。Ｂ種はほとんど小形である。

口唇部　Ａ種は鋭利な突起を有する波状口縁及び小波状口縁で、いずれも内湾ぎみに開く。170・171は同一個体で中央を大きく抉った二又状突起を有する。Ｂ種は平口縁と小波状口縁で1点173を除いてすべて折り返し口縁である。177～179は同一個体で山形突起の頂部から器表面に向けて貫通孔が観察された。

文様構成　前述のとおり隆帯の有無で大別され、Ａ種は、隆帯が口頸部に限定されるものと、口頸部外に用いられるものとに細分される。口頸部に限定されるものは168（第28図－１）1点で、他は細部にも隆帯を有する。胴部に隆帯をもつものは、口頸部と接合したものがないために口頸部から胴部まで隆帯を用いているか否かは不明である。しかし、これまでの出土例から、おおむね連続して用いられたものと考えられる。

隆帯には、貼り付け後に縄文が施文され、更に円竹管による刺突がみられるもの180がある。

隆帯とともに沈線で区画された文様帯も多用されている。Ａ種では、山形及びうず巻き文様等がみられ、Ｂ種ではコの字状に区画された文様がみられる。183～187は隆帯と隆帯直下の沈線による施文である。

磨消縄文には、磨消及び充填の両手法が用いられている。188～192は磨消手法によるが、ごく一部分で沈線内の縄文の施文方向に、小単位での変化が観察されることから、縄文が部分的に施文された可能性も考えられる。

縄文原体は、単節のＲＬ・ＬＲの両者が使用されるが、ほとんどがＲＬである。施文方向は、横位回転によるものは少なく、ほとんどが縦位及び斜位回転によるものである。同一個体上では、おおむね異種の原体は用いられていないようであるが、172は単節ＲＬとＯ段多条のＲＬの両者が観察された。

胴部下半は、おおむね縦位回転による縄文である。

胎土　砂粒を多く混入し、器表面がややざらついた感じを受けるものが多い。Ｂ種はＡ種に比して研磨が良く施され、光沢がある。

焼成　良好なものが多い。

色調　黄橙色のものと、灰色がかったもの及び黒ずんでいるものとがみられ、黒っぽいものが多い傾向を示す。

168は深鉢形土器である。鋭利な4波状口縁で、山形突起の中間に小突起を有する。口縁は内湾ぎみに大きく開く。胴部は中央がやや膨らみ、底部に向かってすぼむ。底部は欠失している。文様は、口頸部は隆帯により、胴部上半は沈線と磨消縄文による山形及びうず巻き文様である。磨消縄文は充填手法による。胴部下半は地文縄文である。使用された原体は単節ＲＬで、隆帯上は横位回転を基本に、胴部上半は横位及び縦位回転を基本に、共に文様に沿った回転で施文

されている。胴部下半は縦位方向に回転施文されている。

188～192は深鉢形土器の胴部破片で、同一個体である。隆帯及び磨消縄文による文様構成で、隆帯によって基本となる文様構成を行い、更に沈線による文様区画と磨消が施されている。ボタン状貼り付け文も観察された。磨消縄文は磨消手法によるが、文様構成の項で述べたように、地文となる縄文は全体に及んでない可能性がある。同一個体と推定される底部は、二次加熱により器面が荒れ、非常にもろい。二又状突起を有する170等と同一個体の可能性も考えられる。

169は小形の深鉢で、折り返し口縁で平口縁を呈する。沈線によりコの字状に区画された文様が連続する。充填手法による磨消縄文であるが、一部縄文施文後に沈線を入れたのが観察された。口縁直下に補修孔がうがたれている。

173は厚手の口縁部破片で、平口縁を呈し、深く幅の沈線を施文している。182と同一個体と思われる。ＲＬの縦位回転による縄文で、沈線による文様施文後は無調整である。

2類　十腰内　群に相当する土器である

器形　深鉢形を基本とするが、小形のものが多い。甕棺の破片が 5片出土した207～211。

口縁部　ほとんどが波状口縁で外反するものが多く、口唇部は折り返し口縁ぎみに肥厚するものも多い。甕棺の口唇部は折り返し口縁で平口縁である。

文様構成　稚拙な沈線による文様であり、入り組み文・うず巻き文及び円形・三角形の文様の組み合わせにより構成される。器面は、表裏面とも研磨されて光沢がある。

胎土には砂粒を多く混入する。焼成は良好で堅緻である。色調は褐色を基調とするが、黒っぽいものが多い。

198は小形の深鉢形土器である。やや外反する 4波状口縁で、口唇部は肉厚である。文様構成は、口頸部は薄い隆帯状を呈し、三角形及び台形状の文様が展開する。胴部から底部までは 3条の沈線を基本とする縦位の入り組み状うず巻き文を施文している。胎土・焼成は良好である。

197は深鉢形土器である。ゆるやかな波状を呈し、口唇部に台形状の突起を有する。口縁部から胴部中央に沈線による文様が施文され、胴部下半は無文である。器面は良く研磨され、光沢がある。文様帯上に赤色顔料が塗付されているのが観察された。無文部分は二次加熱により器面が荒れていて顔料は確認されなかった。

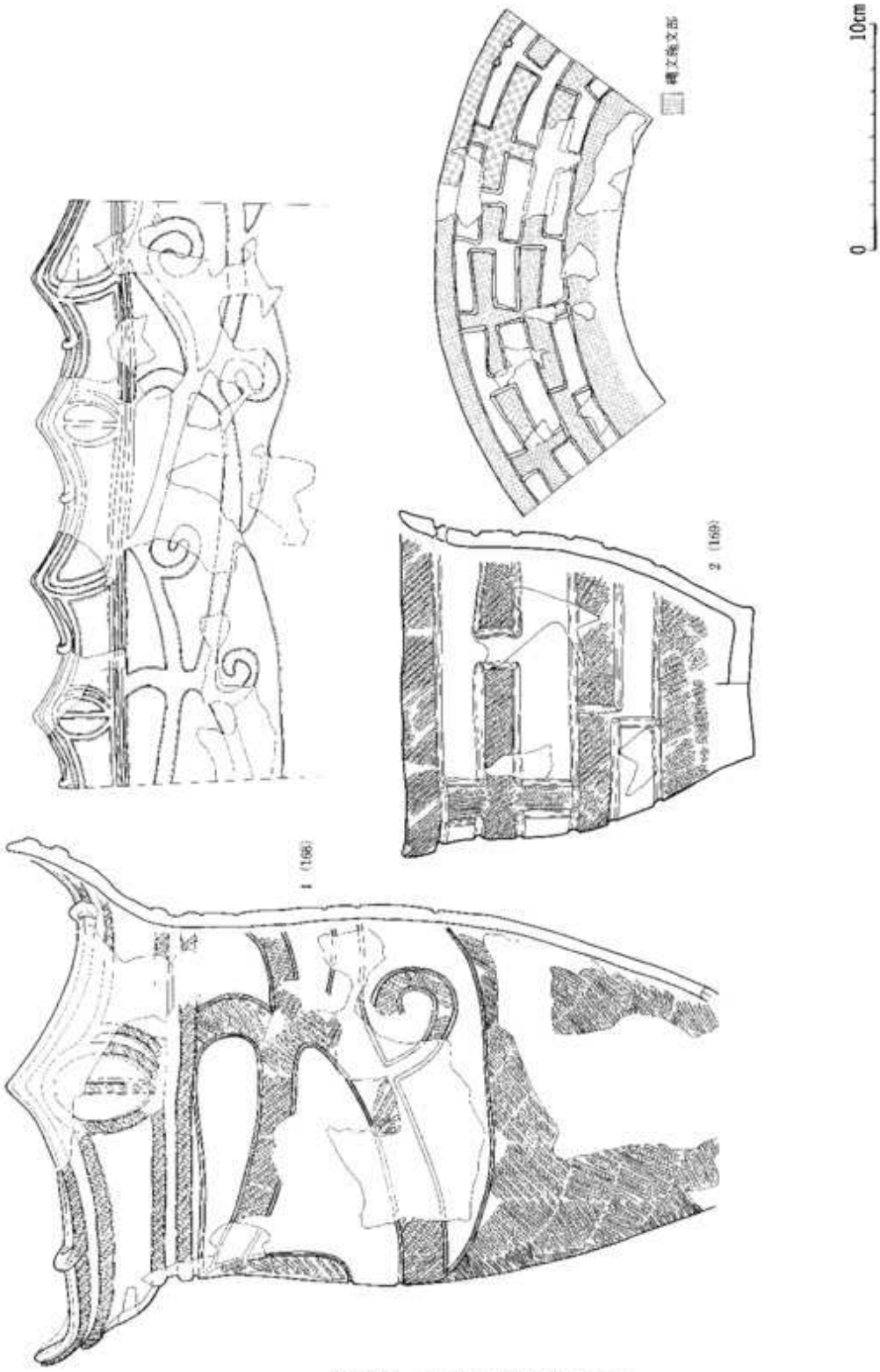
224は器形不明である。底部からやや内傾ぎみに立ち上がる。底部直上まで沈線文が施文されている。

221は台部の破片である。

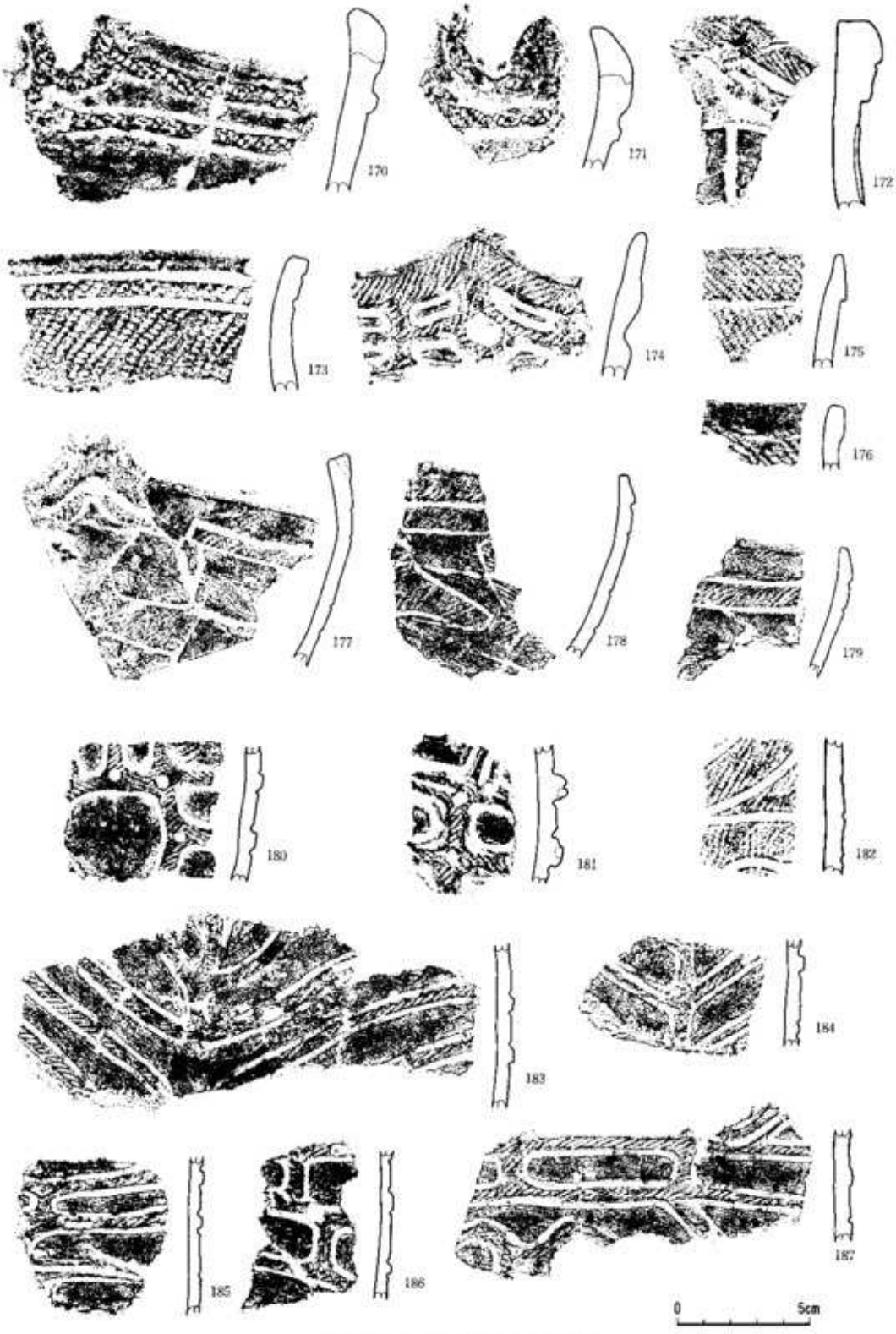
205・206は同一個体で平口縁である。口頸部に格子目状撚糸文が施文されている。

225～229は沈線による格子目状の文様を構成する。230はひっかき条痕文を構成する。

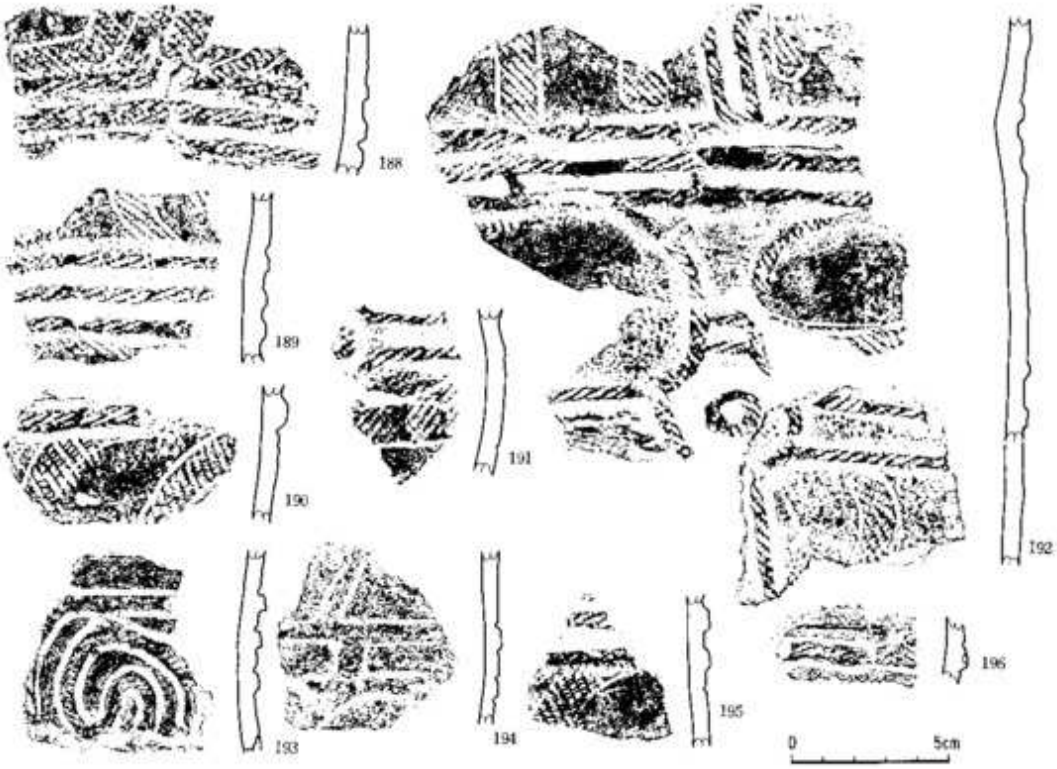
3類　十腰内　群に相当する土器であるが、すべて破片資料のため、器形及び文様構成を把

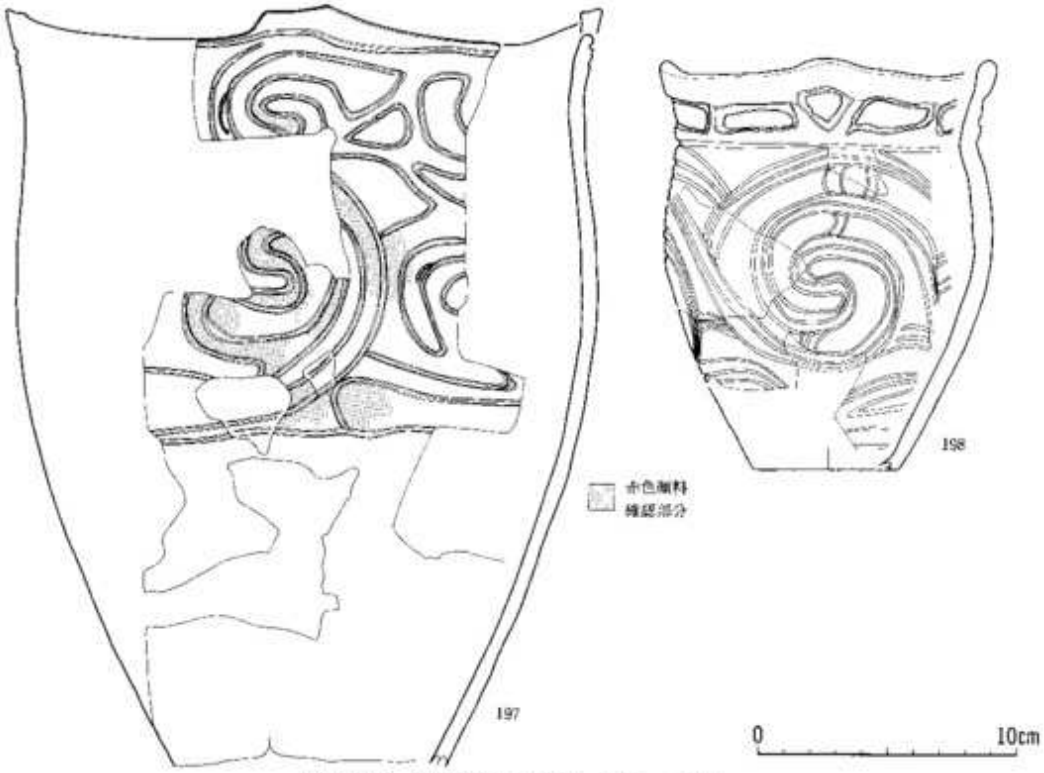


第28図　第Ⅳ群土器（1）1類

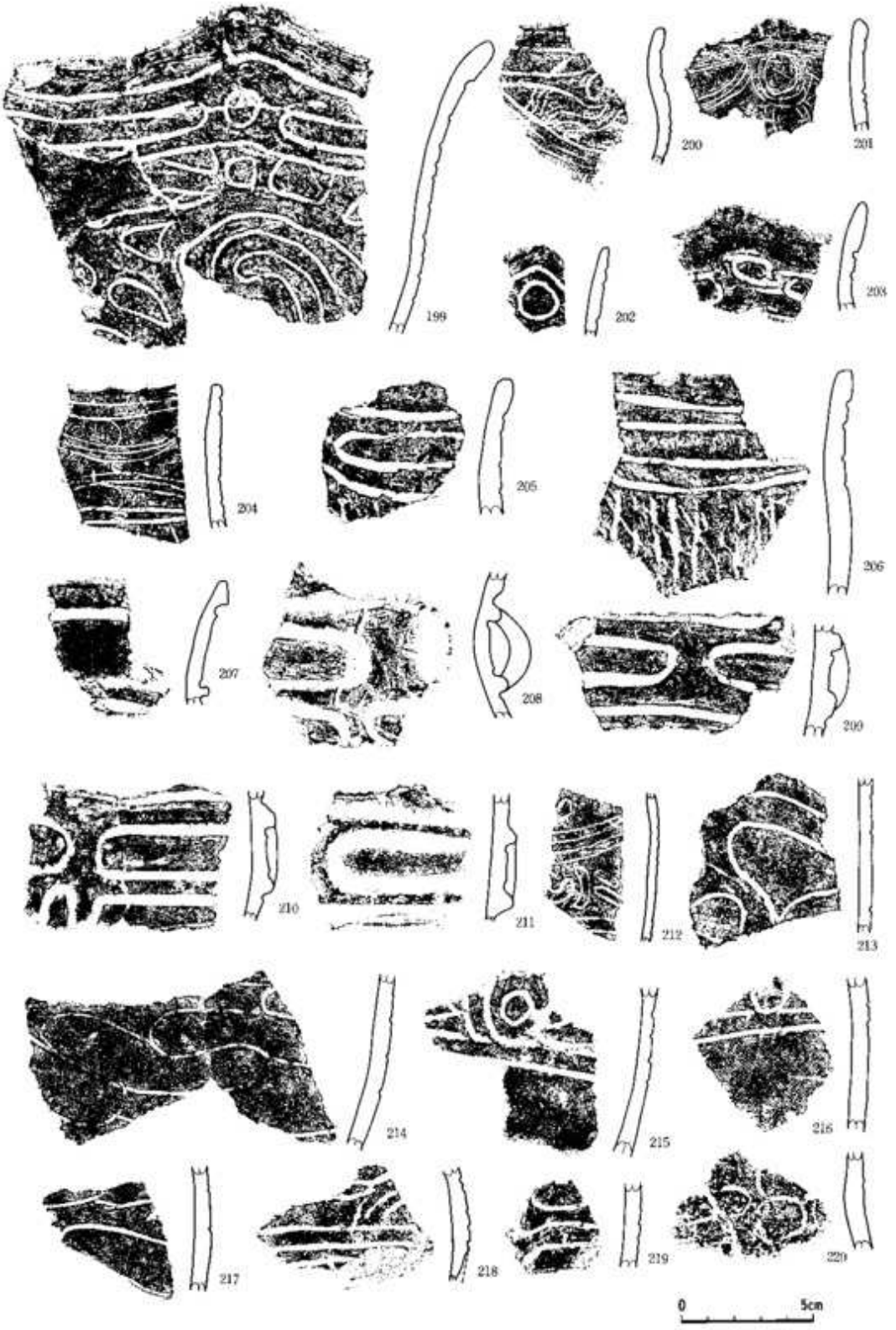


第29図　第Ⅳ群土器（2）1類





第30図　第Ⅳ群土器（3）1類・2類



第31図　第Ⅳ群土器（4）2類

握するには至らない。

口縁部は、平口縁及び鋭利な突起を有する波状口縁で、他の部分より肥厚し、縄文が施文されている。

236(第32図)は、大形の口頸部破片である。波状口縁で鋭利な突起と貼瘤を有し、これらの頂部には内面に向かって 1条の沈線が施文されている。口縁部は肥厚し、内面は稜を構成している。

外面は、隆帯状の縄文帯を構成する。縄文帯は、突起部分に異種原体による羽状縄文、その下部及び口唇直下にはＲＬの縄文を施文した後、山形様に沈線で区画し、内部の縄文を磨消、更に縄文が浮き出るように接する部分を深く削ったものである。縄文帯の下部は無文である。突起中央部に剥落痕が観察された。

235(第32図)は、突起部の破片である。異種原体による羽状縄文が施文され、下部の強いナデにより縄文帯を浮き上がらせている。突起の上部２３は縄文を磨消している。縄文帯の下部は無文である。

234(第32図)は、平口縁で、口唇部は平坦である。肉厚で、口唇部直下に沈線を施文後単節ＲＬの横位回転による縄文を施文している。口縁部中位及び頸部に、太く深い沈線が各 1条施文されている。

胴部文様は、磨消縄文を基調とし、縄文は、異種原体による羽状縄文である。

239～243は同一個体と思われる。縄文を施文後、沈線で区画し磨消したもので、器面全体、特に無文部分に光沢がある。沈線は、太さが一様でなく、全体的に浅い。

237・238は、上下 2単位の羽状を構成している。

胎土は、砂粒を多く混入し、研磨による砂粒の移動が観察される。

色調は、やや灰色がかった橙色である。

4類　縄文を主文様とする土器・無文の土器及び小破片資料で、 1～ 3類に明確に区分されなかったものである。

口縁部　すべての平口縁で、ほとんどが外反するが、内傾するもの244・249も見られる。

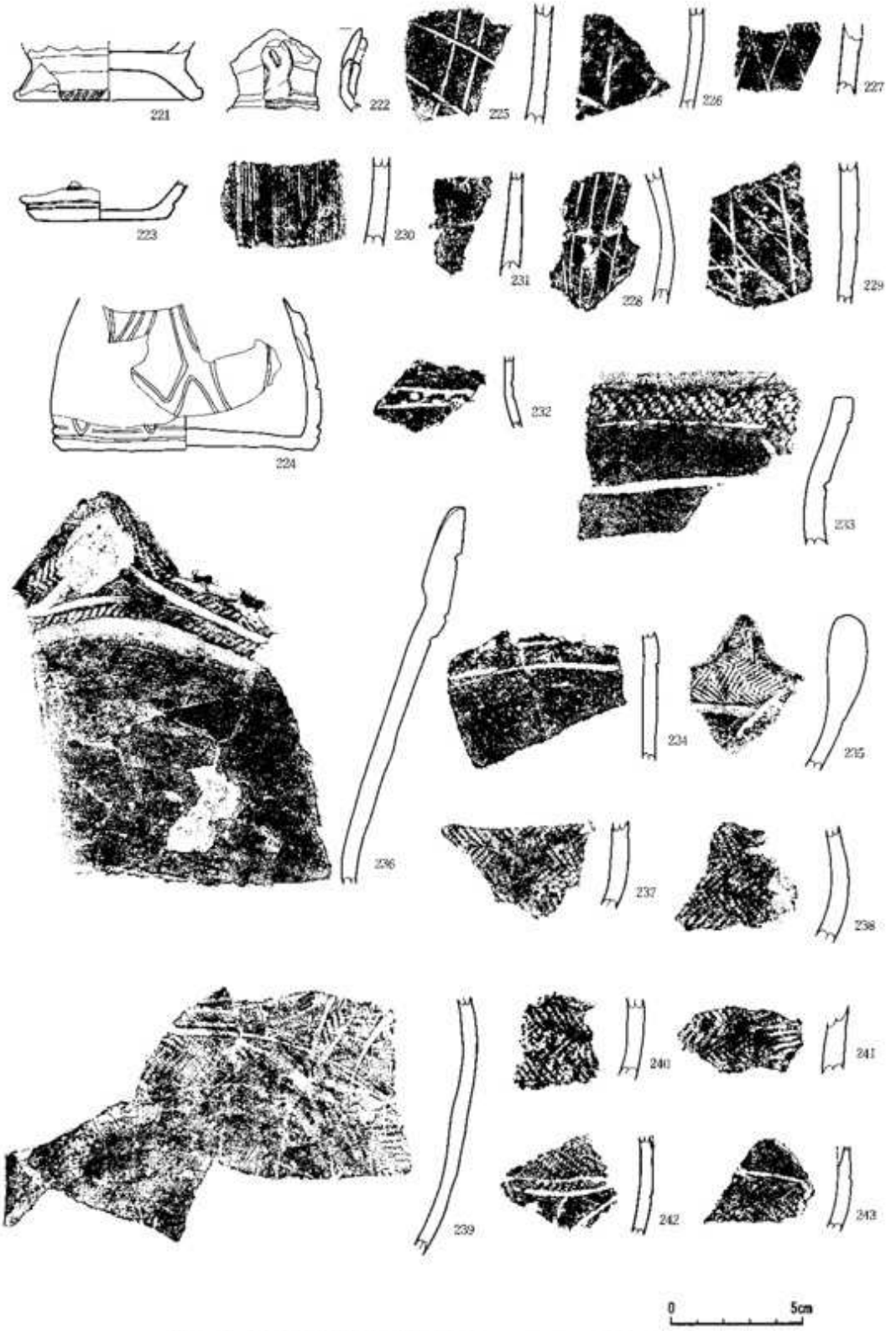
使用原体　単節ＲＬが圧倒的に多いが、ＬＲ及びＯ段多条のＲＬも使用している。回転方向は、斜位及び縦位回転が多く、特に胴部下半には、ほぼ縦走する縄文がみられる。

244は縄文施文後に、無節の原体による結節部を縦位に回転施文している。

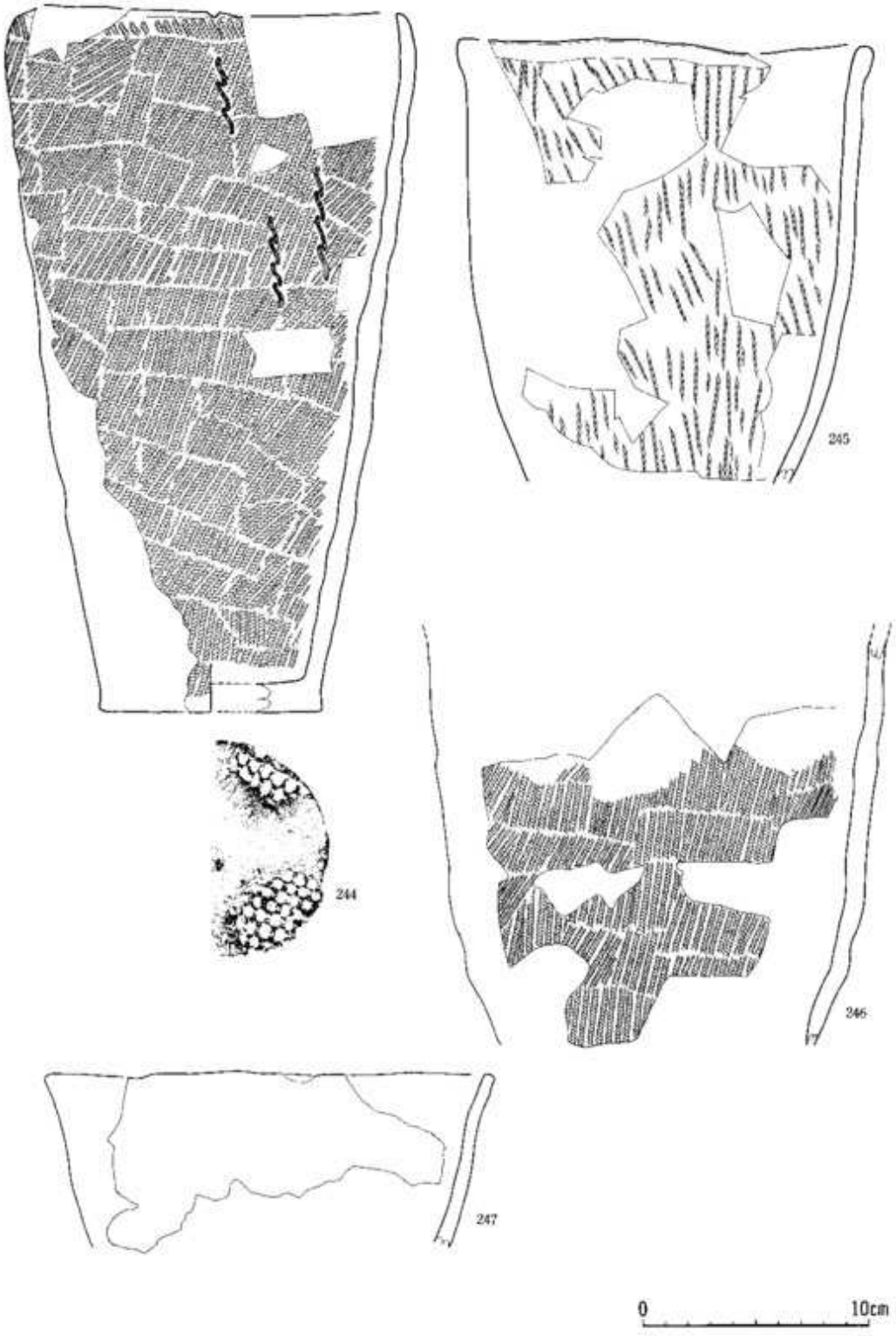
縄文以外には撚糸文の施文がみられるが、これらはすべて撚糸を回転施文した後に器面をなでている。 250は文様がほとんど消されている部分がある。

無文の土器も器面は研磨されている。全般にスス状炭化物の付着がみられる。

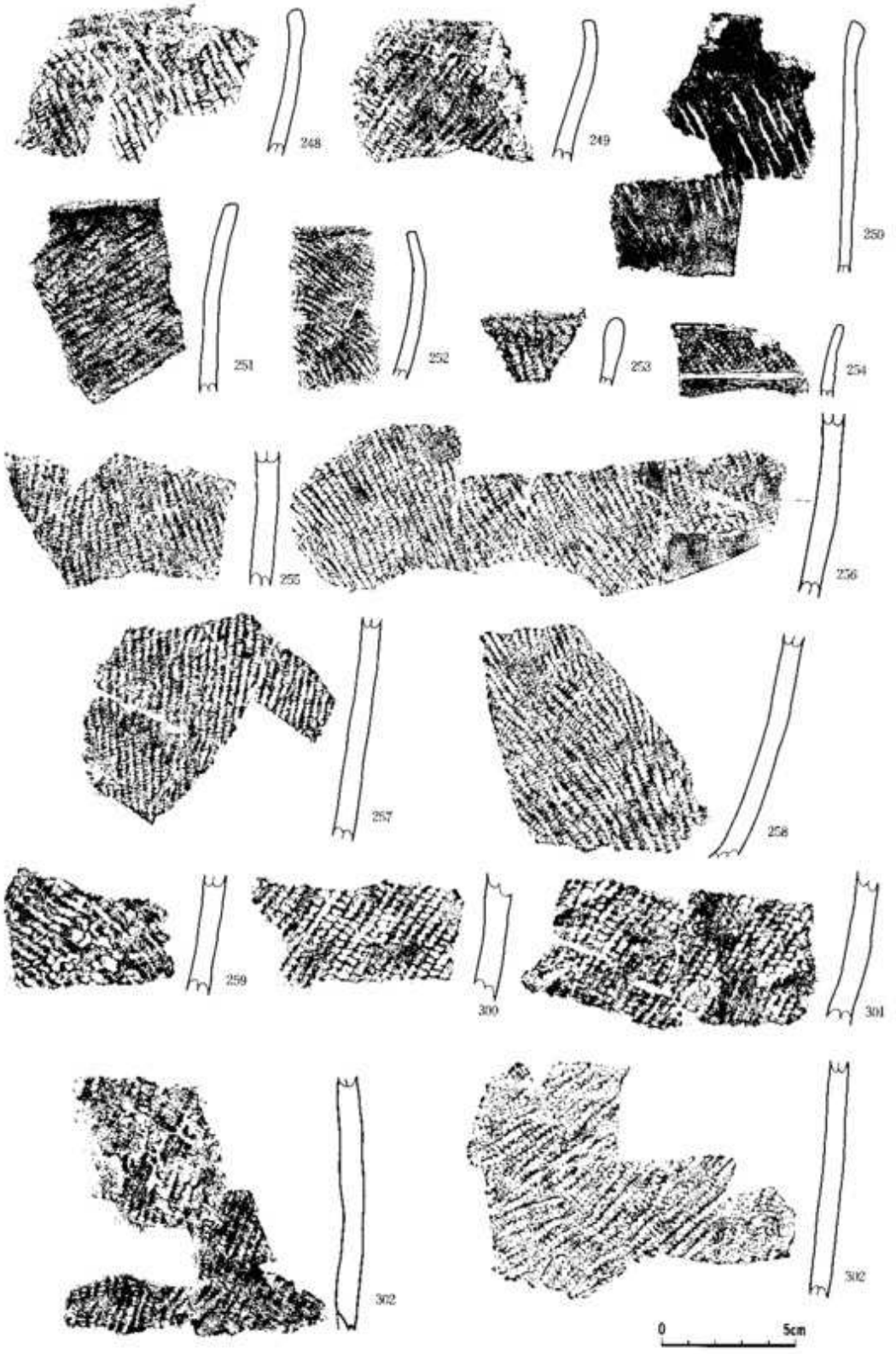
第　群土器について



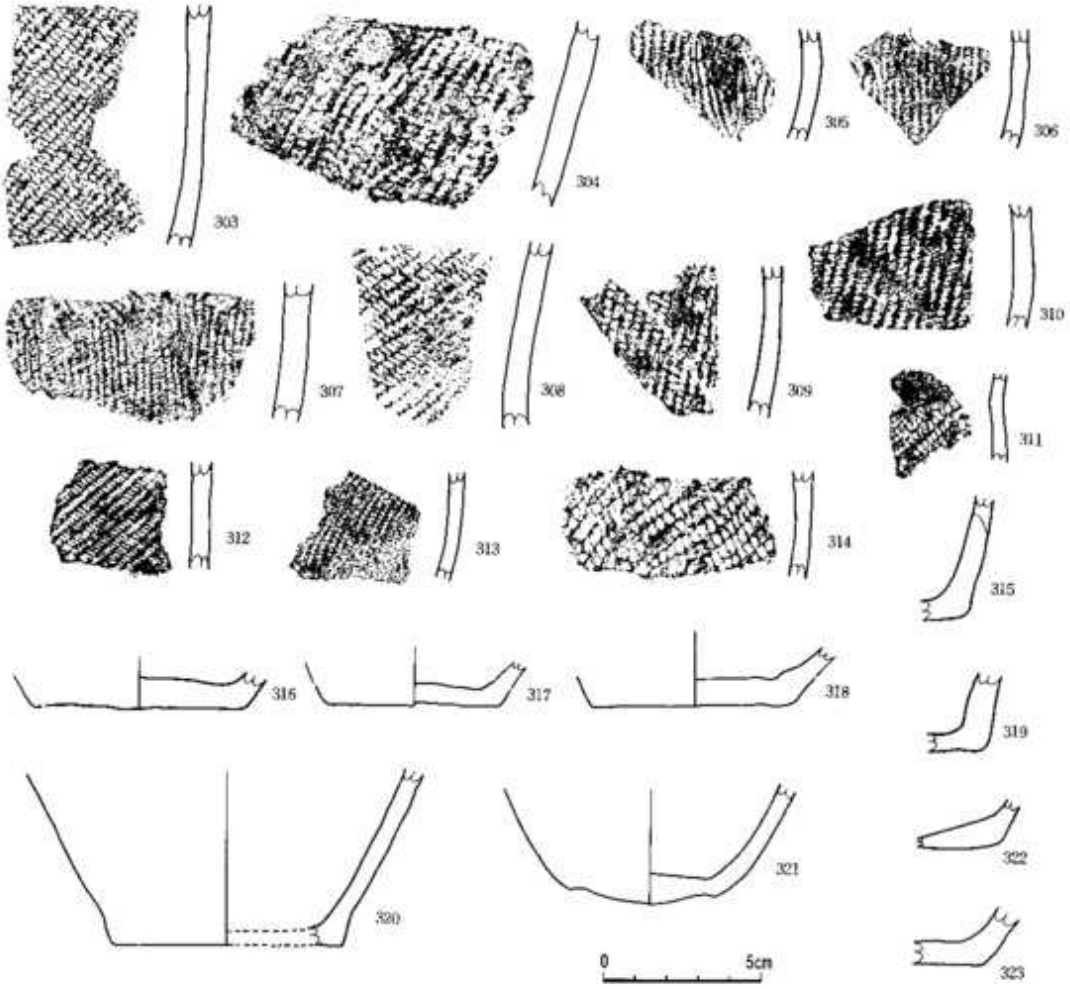
第32図　第Ⅳ群土器（5）2類（221～232）・3類（233～243）



第33図　第Ⅳ群土器（6）4類



第34図　第Ⅳ群土器（7）4類



第35図　第Ⅳ群土器（8）4類

本群土器の出土地点は20 ・ 及び35 を中心とした部分にある程度限定される。同一個体の破片が多く、また、時期的にも大きな幅が認められる。

1類の168は、胴部文様のパターンが、弥栄平遺跡（[注39] 2）の第 群B類に酷似している。しかし、本遺跡出土のものが文様帯内に充填手法による磨消縄文を施文しているというのに対し、弥栄平出土のものは、地文となる縄文上に沈線を施し、文様帯内の磨消しているというところに差異が認められる。また、口頸部の形状は大きく異なる。

この器形及び文様施文の特徴の違いは、本遺跡と該遺跡が距離的にも近いことから、地域差によるものとは考えられず、むしろ時期的な要因によるものと思われる。しかし、現段階においては、該当資料数が僅少であることなどから言及できない。

折り返し口縁の土器は、文様帯の特徴などから蛍沢式[注40]（仮称）に比定される。

4類の土器は、明確な分類はできないが、おおむね十腰内 群に相当するものと思われる。破片数は本群土器中においても最も多い。

本群土器は、外面にスス状の炭化物が付着するものが多く、二次加熱により底辺部がもろくなっているものも多い。（白鳥）

第 群土器

縄文時代晩期の土器を一括した。いずれも破片資料で、ごく少量の出土であるが、 3個体が図上復原できた。

324（第36図－ 1）D－50グリッドの第 a層から出土した鉢形土器である。口縁部は、平口縁で外反し、肩部はなだらかである。口頸部及び胴部上半は、三叉文を基調とする文様帯を構成し、下半は単節ＲＬの原体を横位方向に回転施文している。底辺部は磨滅していて縄文は不明瞭である。大洞Ｂ式に比定される。

325（第36図－ 2）D－50グリッドの第 a層から出土した。鉢形土器である口縁は、内傾ぎみに直立する。口唇部に、Ｂ字状突起を 3個 1単位で有し、中央の突起が他の 2個より大きい。口縁部は、やや変形させた唐草文の文様帯を構成し、頸部から肩部までは、平行沈線によって区画された入り組み状の文様帯を構成している。胴部は、単節ＬＲの原体を横位方向に回転施文している。大洞Ｂ式に比定される。

326（第36図－ 3）20 大グリッドで出土した浅鉢形土器である。口唇部にＢ字状突起を有し、直下に 1条の沈線が施文されている。その他は無文である。底部の外面中央が窪んでいる。大洞Ｃ式に比定される。

第 群土器

弥生時代の土器を一括した。

327（第36図－ 4）は、底部直上から、やや内湾ぎみに大きく開く鉢形土器で、台付の可能性

が考えられる。口唇部は、そいだように直線的で鋭利である。地文は、単節ＲＬの斜位回転による縦走縄文で、縄文施文後に沈線・磨り消し・みがきが施されている。みがき及び回転押圧時の施文状態（軽く押圧する等）によって、部分的に撚糸文的な様相を呈する。文様帯は全体の２3まで及んでいる。口唇部外面に、同一原体による斜縄文が施され、直下に 5条の沈線が巡る。沈線下は、磨り消しによる無文帯を構成する。更に、無文帯直下の肩部に 4条．胴部中央に 5条の沈線があり、それぞれの沈線下に、 3条の沈線による下垂する連弧文が施文されている。連弧文と、それぞれその上位の沈線との接点には、 1条の結節沈線が施文されている。上下の連弧文は、半単位ずつずれている。最下位の連弧文に 1巡する沈線が構成されていないが、この結節沈線及び半単位ずれた連弧文は、変形工字文のなごりと考えられる。この土器は、器形及びこれらの特徴から、本県の編年上では二枚橋式以降で、田舎館式からやや下る時期の間に位置するものと考えられる。

328～331　O段多条ＲＬの斜位回転による縦走縄文を施文した土器である。

328は、横位の沈線を施文した土器である。施文後、上部に交互刺突・下部に連続刺突を施し、更に縄文施文を行ったものである。沈線間の縄文は、O段多条ＲＬの縦走縄文で、 2～ 3cmの間隔を置いて深い条が認められ、撚糸文状の文様を構成する。これは、回転押圧が弱く（軽く）行われたためか、また、意図的に強弱をつけたものかは不明であるが、深く施文された条間にも、回転に伴う節の移動痕跡が確認される。上位の交互刺突部分は、横位回転による施文である。

331は、上部に 2条の沈線が施文されている。

330は、撚糸文で、無節Ｌの縄を用いている。一部の条の深部において赤色顔料の付着が観察された。

これらは、天王山式に比定されると思われる。

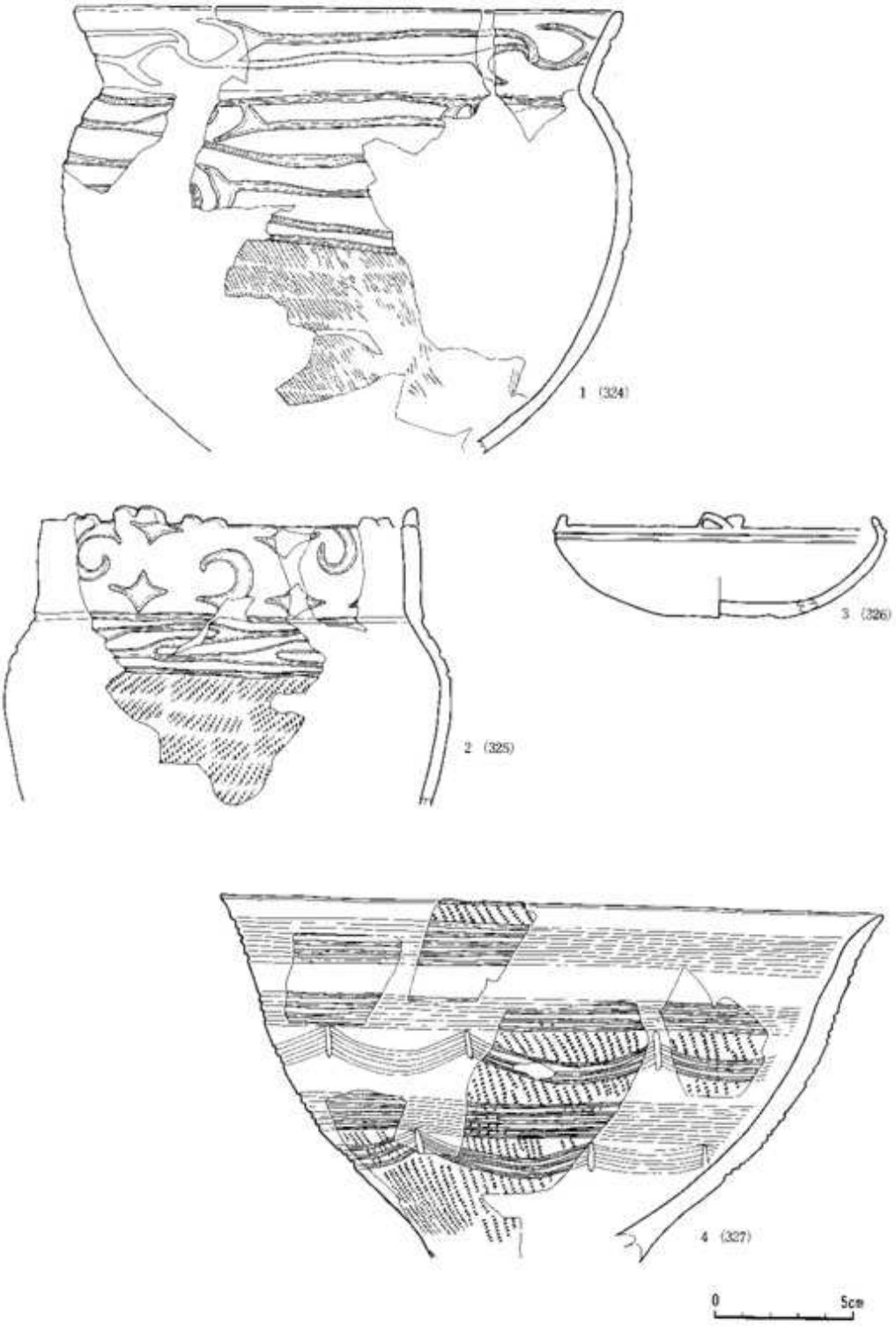
333・334は同一個体の破片である。334は口縁部片で、外面に沈線と横走する縄文が施文されている。内面は 2条の沈線が横走する。333は胴部片で、連子文状の文様構成と思われる。施文原体はＬＲである。

念仏間式に相当すると思われる。

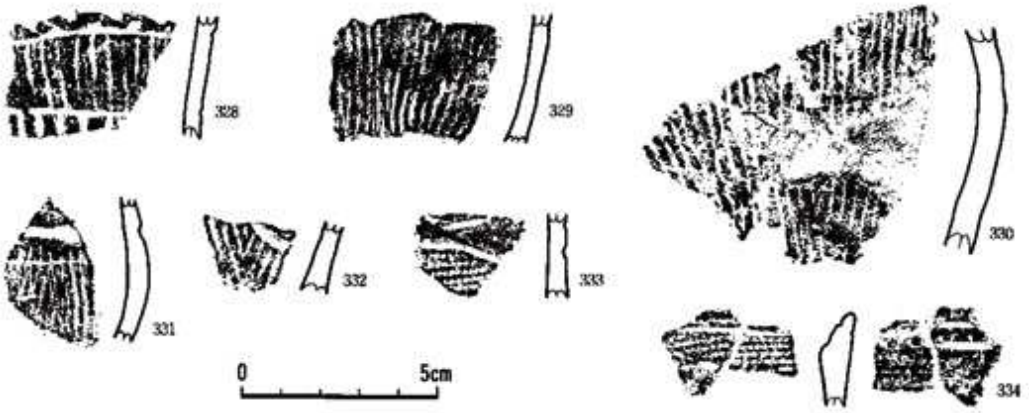
第　群土器

35　及び 50　において数片の土師器・須恵器片が出土したが、いずれも小破片である。

土師器は甕の胴部片で、出土層位は第　層及び第　層である。　　（白鳥）



第36図　第Ⅴ群（1～3）・第Ⅵ群（4）土器



第37図　第Ⅵ群土器

土器片錘

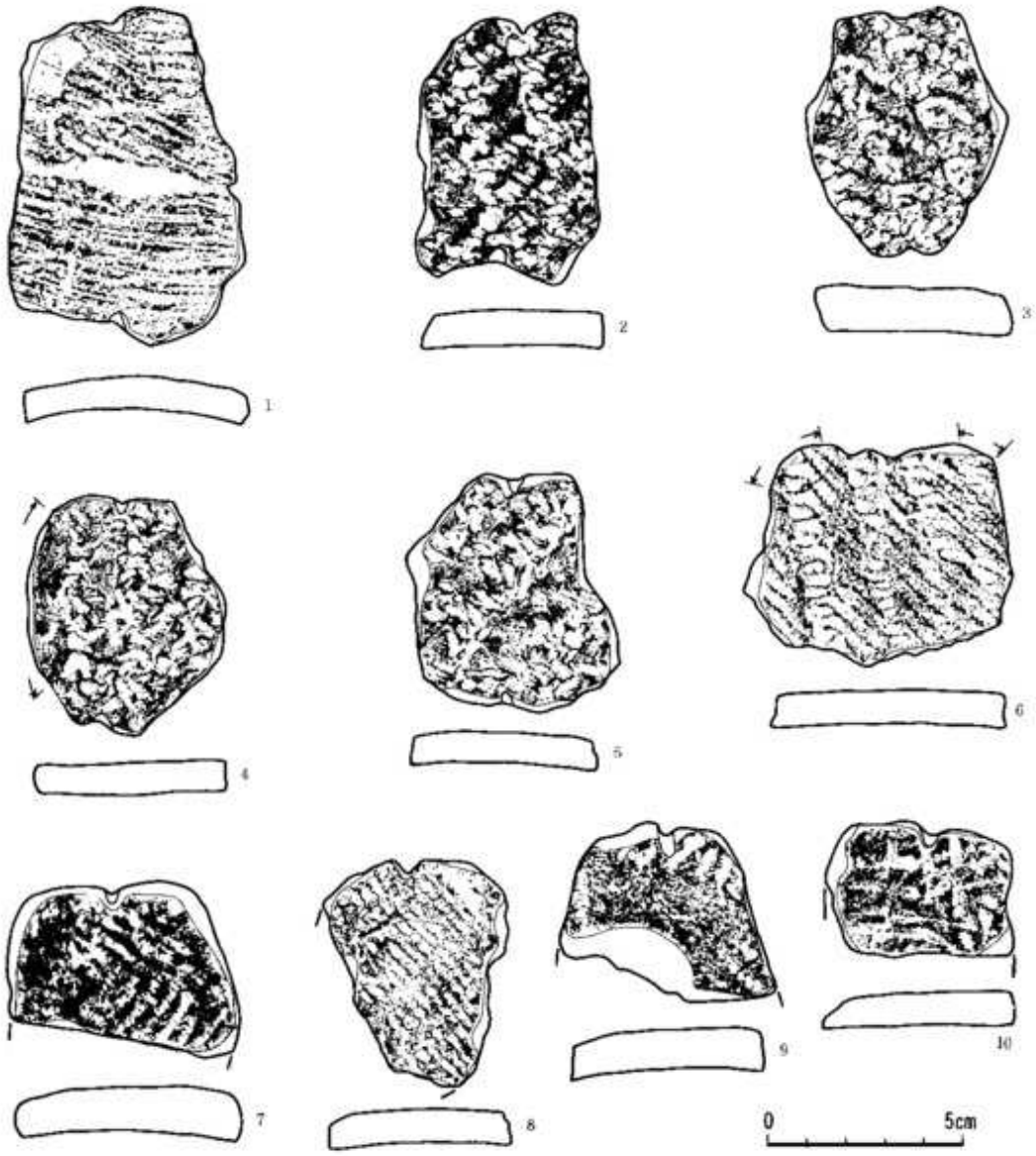
10点出土したブロック 1から 5点（ 2～ 5、 9）、ブロック 2から 2点（ 1、 9）、ブロック 3から 2点（ 6、 7）、不明 1点（ 10）である。

すべて、胎土に多量の植物性繊維を含み、施文された縄文等から第　群土器を利用している。ブロック 1のものはＡ群に、ブロック 3のものはＢ群に、また、不明の 1点はその施文具からみてＡ群に伴出したものであることは間違いない。しかし、ブロック 2から出土のものは、そのいずれとも判定し難い。特に、 1は器表面を貝殻条痕文的な調整で行っているが、Ａ～Ｄ群には例がない。

縄掛け用の切り込みは、長軸上においてなされるが、 6は短軸上でなされている。また、ほぼ全周を擦って調整したと考えられるもの（ 7）、一側縁を擦ったもの（ 4）、コーナーを擦ったもの（ 6）もあるが、他は単に打ち欠きによる調整である。　（三宅）

第４表　土器片錘計測表

No.	出土区	層位	計測値				備考
			長 mm	幅 cm	厚 mm	重 g	
1		Ⅳb	8.7	6.7	9.1	60.1	
2	J－35	Ⅳa	7.1	4.6	9.6	35.6	
3	I－34	Ⅳa	6.3	5.2	11.8	35.5	
4	I－34	Ⅴ	6.2	5.1	8.3	29.4	
5	I－35	Ⅴ	6.1	5.3	9.0	30.5	
6	U－20	Ⅴb	5.5	6.8	8.3	32.2	上部コーナー２ヵ所スリ
7	V－20	Ⅴb	(4.5)	5.9	10.2	(27.3)	周縁スリ
8	P－22	Ⅴa	(5.8)	(4.8)	8.5	(24.4)	
9	I－34	Ⅴa	(4.5)	(5.2)	9.6	(21.6)	
10	表採		(3.5)	4.8	9.0	(13.3)	



第38図　土器片錘

石器

剥片石器（第40、41図）

剥片を素材とした石器は、そのごく一部に加工を施したものも含めて27点である。その種類は、石鏃、石槍、石匙、箆状石器と不定形石器である。

石鏃（第40図 1～10）

有茎鏃の 1と柳葉形鏃の 8は、調査区外での表採資料であるが、したがって、調査で出土した石鏃は 8点で、その形態は柳葉形が 1点（ 7）、他は無茎の三角形鏃である。三角形鏃は、ほぼ正三角形のものが 1点（ 4）、他は、長幅比が1.5前後の二等辺三角形を呈する。

5、 6、 7は、主要剥離面に対し背面に若干の調整を加えたもの、他は両面のほぼ全面を調整している。

6、 9、 10は、基部形態が各々若干異なるものの、全体的形状及び出土地点、層位等から第 群Aに伴うものであろう。

9、 10は大形の鏃であるが、 2点とも欠損後に若干の調整を加えている。 9は、図左のほぼ中央を、基部から先端部側へ抜ける剥離を施した際に折れたものであるが、その後も先端側及び基部側に若干の調整を施している。 10は製作後の欠損品と思われ、その後、微細な調整を加えている。

2、 5、 7の石鏃は第 群Bに、 3、 4は第 群A、Bいずれかに属するものと考えられる。

石槍（ 11）

長さ13.3cm、幅3.4cmの大形の石槍である。両側縁がほぼ平行し、基部は丸みを帯びる。

全体的に平坦な剥離によって丁寧な調整がなされ、薄いレンズ状の断面に仕上げている。尖頭部は特に入念に調整され、断面が菱形に近い部厚い尖頭部を作り出している。層位的には、第 群土器に伴うものと考えられる。

なお、 17は片面加工の石槍とも考えられる。

石匙（ 12～14）

3点出土し、いずれも縦形石匙である。

12と14の主要剥離面側に、背面調整用の打面が設けられている。 13は部厚い剥片を素材とし右側縁に急峻な調整を加えて、刃部角70をなす部厚い刃部を作り出している。刃部は若干内湾している。 12の刃部角は60、 14は45前後で薄く鋭利な刃部である。

箆状石器（ 15、 16）

15は、長さ11.2cm、幅4.5cmの大形のもので、横長の大きな剥片を素材としている。

この剥片の打面部側と末端側に、背面から加撃して石器の形態をほぼ決定し、この調整面を打面として背面調整を行っている。剥離の末端の多くはヒンジをなしている。刃部は平坦で、

その主要剥離面側には何ら調整が施されていない。刃部角は65で厚みはない。

16は、ほぼ二等辺三角形で、背面のほぼ全面に調整が及んでいるが、主要剥離面では刃部を除く面の一部に施されている。刃部角は60である。

不定形石器（17～27）

11点出土し、このうち19、26の2点は、調整が比較的丁寧で表裏両面に及び、23は背面のみほぼ全面に及んでいる。他は、側縁の一部に若干の微細な調整を加えて刃部としたものである。

27は小さな部厚い剥片を素材としたものと考えられる。下端から上方に向けて調整が加えられ、下端は鋭利な刃部状を形成している。その刃部を正面からみると丸ノミ状を呈し、石核石器の一種といえよう。[注41]（三宅）

石斧

磨製石斧2点・打製石斧3点の計5点が出土した。

28は、全面研磨によって整形され、刃縁が一方に片寄っている偏刃である。29は、両面を研磨しているが、明確な刃部を作出するまでには至っていない。30は、頁岩製で、片面全面と1側縁を剥離によって成形している。片面及び頭頂部に自然面を残す。31は、頭頂部に自然面を残す。器面が荒れていて成形痕は不明瞭である。32は、基部片であり、両面に擦痕が観察される。

石錘

6点出土した。すべて抉りは2箇所で、長軸線上に作出されている。33は、重量31gで、非常に小型のものである。

磨石・凹石類

12点出土した。三角柱状磨石は完形品3点、欠損品3点の計6点である。39、41は、機能面の中央に両面から剥離が加えられている。43は、機能面に片減りが認められる。

45・46は、円礫を素材とした磨石である。1側縁を機能面とし、長軸・短軸両断面とも曲面を構成している。46は、素材の1/3ほど使用している。

46は、器面全体に使用痕跡が認められる。両面とも軽くすられているが、中央部に器面の荒れが観察され、表面中央に浅い凹みが認められる。側縁は、角の部分を除いて、擦り及び敲打による機面の荒れが観察され、4側縁の中央部に凹みが認められる。48は、破損品であるが、表裏面とも擦られ、側縁を約半周した擦り及び敲打による横面の荒れが認められる。49は、断面が三角形の破損品で、1稜と3面に擦りによる痕跡、端部に敲打痕が認められる。

敲石

2点出土した。50は、一端に剥離と敲打の痕跡が観察されるが、剥離が敲打の結果によるものか、意図的に加えられたものかは不明である。51は、両端に敲打痕が認められる。

台石

3点出土した。すべて板状の破片である。

その他

59は、棒状の石器で、湾曲する 2側縁に擦り痕と 1端に敲打によるささくれが認められる。

58は、板状の小礫で、側縁を全周する擦り痕が認められる。

礫

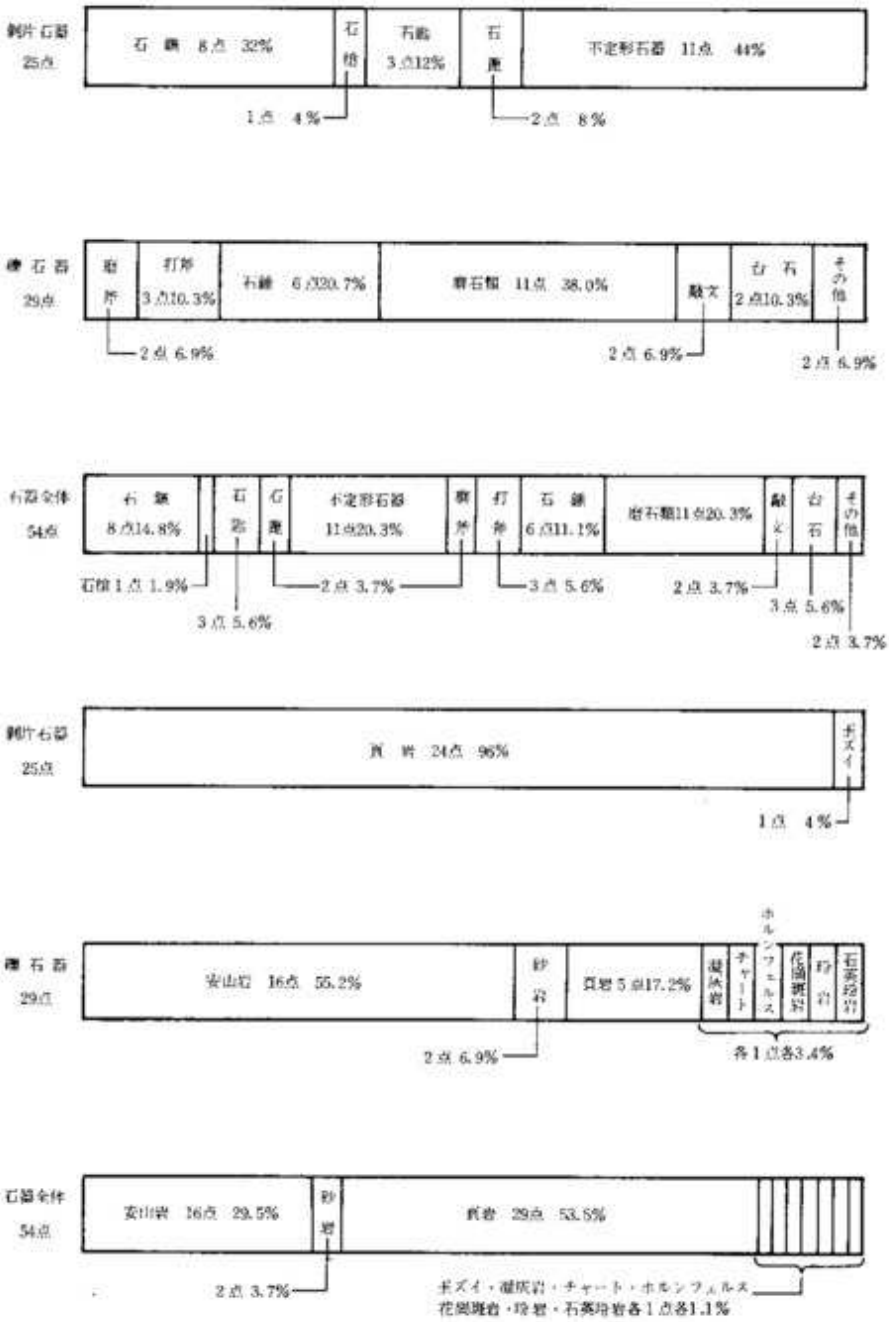
400点余の小礫が出土し、土器片の出土する地点に集中していた。　（白鳥）

第5表　剥片石器計測表

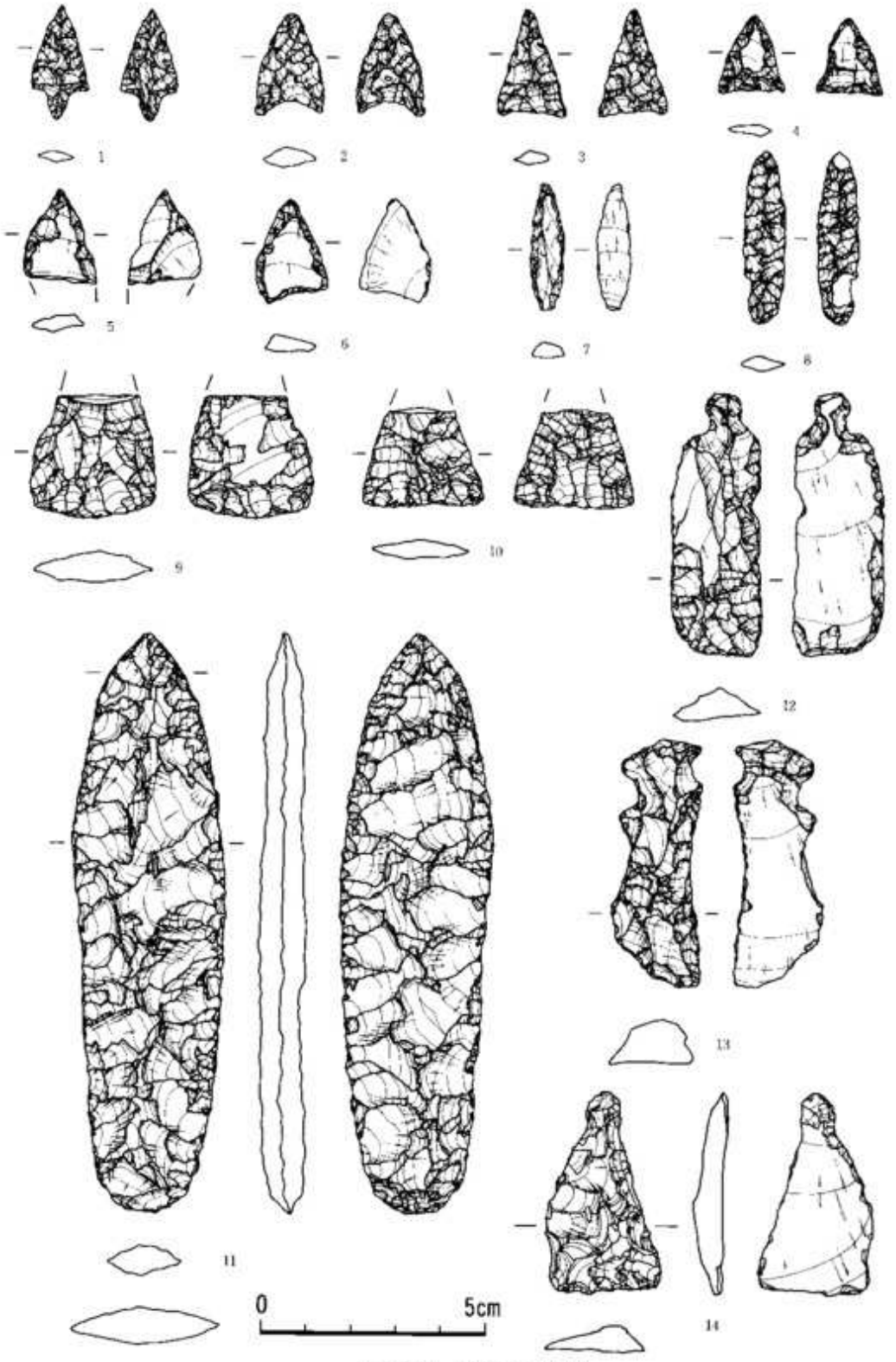
実測図	器種	グリッド	層位	計測値				石質	長幅比	備考
				長 cm	幅 cm	厚 cm	重 g			
1	石鏃	表採		2.6	1.3	0.3	0.6	赤へき玉	2.0	
7	〃	V−20	Vb	2.9	0.8	0.4	0.8	頁岩	3.6	
2	〃	V−20	Vb	2.3	1.6	0.5	1.3	〃	1.4	
3	〃	P−22	Va	2.4	1.5	0.3	0.8	〃	1.6	
5	〃	V−20	Vb	(2.1)	1.6	0.4	(1.0)	〃		
6	〃	H−33	V	2.3	1.6	0.4	1.3	〃	1.4	
10	〃	I−33	V	(2.2)	2.7	(0.5)	(2.8)	玉ズイ		
9	〃	I−33	Ⅲ	(2.8)	2.8	(0.7)	(6.7)	頁岩		
4	〃	S−22	Ⅳb	1.7	1.5	0.4	0.7	〃	1.1	
8	〃	表7		(3.9)	0.9	0.3	(1.2)	〃		
11	石槍	U−21	Vb	13.0	3.4	1.1	50.0	〃	3.8	
12	石匙	I−33	Ⅱ	5.9	2.0	0.8	9.9	〃		
13	〃	V−20	Vb	5.6	2.0	1.1	(10.9)	〃		
14	〃	R−23	Va	4.5	2.5	0.6	5.4	〃		
16	篦状石器	P−22	Va	5.5	4.3	1.5	27.5	〃		
15	〃			11.2	4.5	1.6	85.0	〃		
23	不定形石器			6.0	4.4	1.5	33.7	〃		
19	〃	Q−22	Va	3.7	3.2	1.0	12.3	〃		
24	〃	W−20	Vb	5.0	3.7	1.6	30.8	〃		
20	〃	I−33	V	4.1	3.3	1.1	13.7	〃		
21	〃	H−32	盛土	3.7	2.5	1.2	11.1	〃		
18	〃	I−33	Ⅳ	3.5	2.3	0.8	6.0	〃		
26	〃	V−20	Vb	6.0	4.0	1.1	20.6	〃		
17	〃	P−23	Ⅳa	2.5	2.5	0.8	3.0	〃		
22	〃	P−22	Ⅳa	4.2	3.5	0.9	9.5	〃		
25	〃	G−35	Vb	6.6	3.9	1.5	32.2	〃		
27	〃	H−33	Va	3.4	2.5	1.4	11.6	〃		

第6表　礫石器計測表

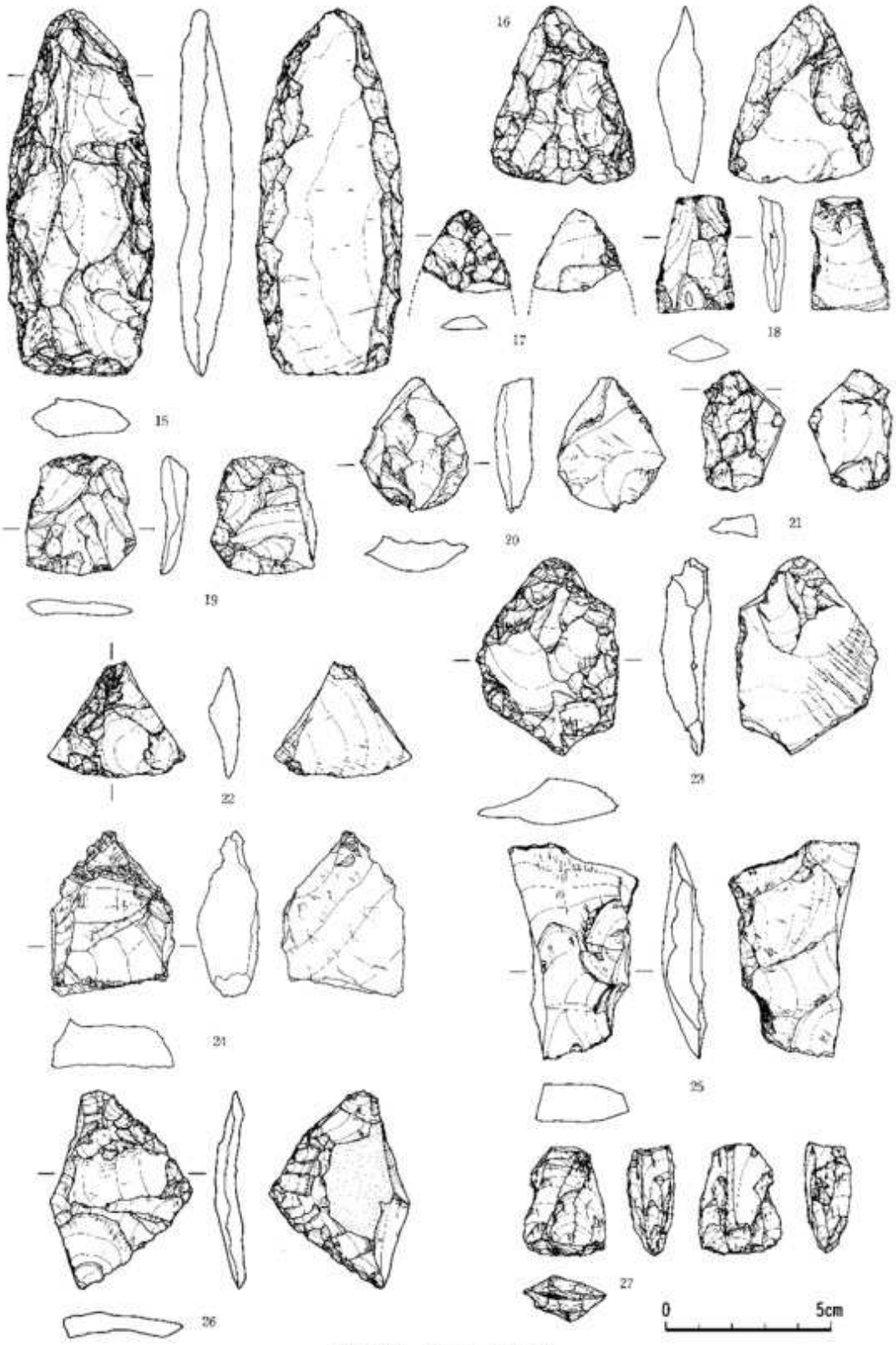
実測図	器種	グリッド	層位	計測値				石質	備考
				長 cm	幅 cm	厚 cm	重 g		
28	磨斧	M−27	盛土	6.8	4.4	1.0	47	緑色頁岩	
29	〃	I−35		7.3	3.3	1.0	37	ホルンフェルス	
30	打斧	O−35	盛土	6.0	4.1	1.7	47	頁岩	
31	〃	20Ⅳ		11.0	5.4	2.8	162	安山岩	
32	〃	V−20	Vb	(3.8)	(4.9)	(1.0)	(27.7)	頁岩	基部
33	石錘	20Ⅳ		4.4	3.2	1.2	23	凝灰岩	
34	〃	D−57	V	7.2	5.1	1.9	83	安山岩	
35	〃	Q−22	Ⅳa	10.1	5.9	1.5	121	頁岩	
36	〃	B−47	Ⅳb	10.4	7.1	2.5	300	花崗斑岩	
37	〃	D−57	Vb	6.7	5.9	2.1	122	砂岩	
38	〃			5.7	5.0	1.6	71	石英砂岩	
39	磨石類	P−23	Ⅳa	11.5	9.0	4.3	450	安山岩	
40	〃	H−33	Ⅳ	13.2	8.0	4.5	498	〃	
41	〃	T−21	〃	17.3	10.2	5.8	1,201	〃	
42	〃	Q−22	〃	14.2	9.8	5.2	1,100	〃	2片接合
43	〃	V−20	Vb	(10.1)	8.0	5.5	(471)	〃	
44	〃			(10.1)	6.0	5.4	(389)	〃	
45	〃	Q−22	Ⅳ	10.8	7.9	4.9	603	砂岩	
46	〃	C−39	〃	10.0	5.9	3.4	297	安山岩	
47	〃	I−34	V	9.7	7.9	4.8	635	〃	
48	〃	I−33	Ⅳ	(10.8)	(9.8)	5.2	(781)	〃	
49	〃	V−20	Vb	(5.5)	(7.2)	(5.0)	(205)	〃	
50	敲石	T−20	Ⅳa	6.1	5.4	3.0	142	チャート	
51	〃	V−20	Ⅳ	7.5	5.0	4.3	215	安山岩	
52	台石	I−33	〃	(8.9)	(7.2)	1.2	(144)	〃	
53	〃	J−32	〃	(9.2)	(8.4)	2.1	(249)	〃	
54	〃	V−20	Ⅳa	(8.5)	(5.5)	2.8	(176)	〃	
55	棒状	G−34他	Va	13.8	2.8	1.3	57	頁岩	2片接合
56		C−37	V	3.3	2.0	0.8	18.8	砂岩	



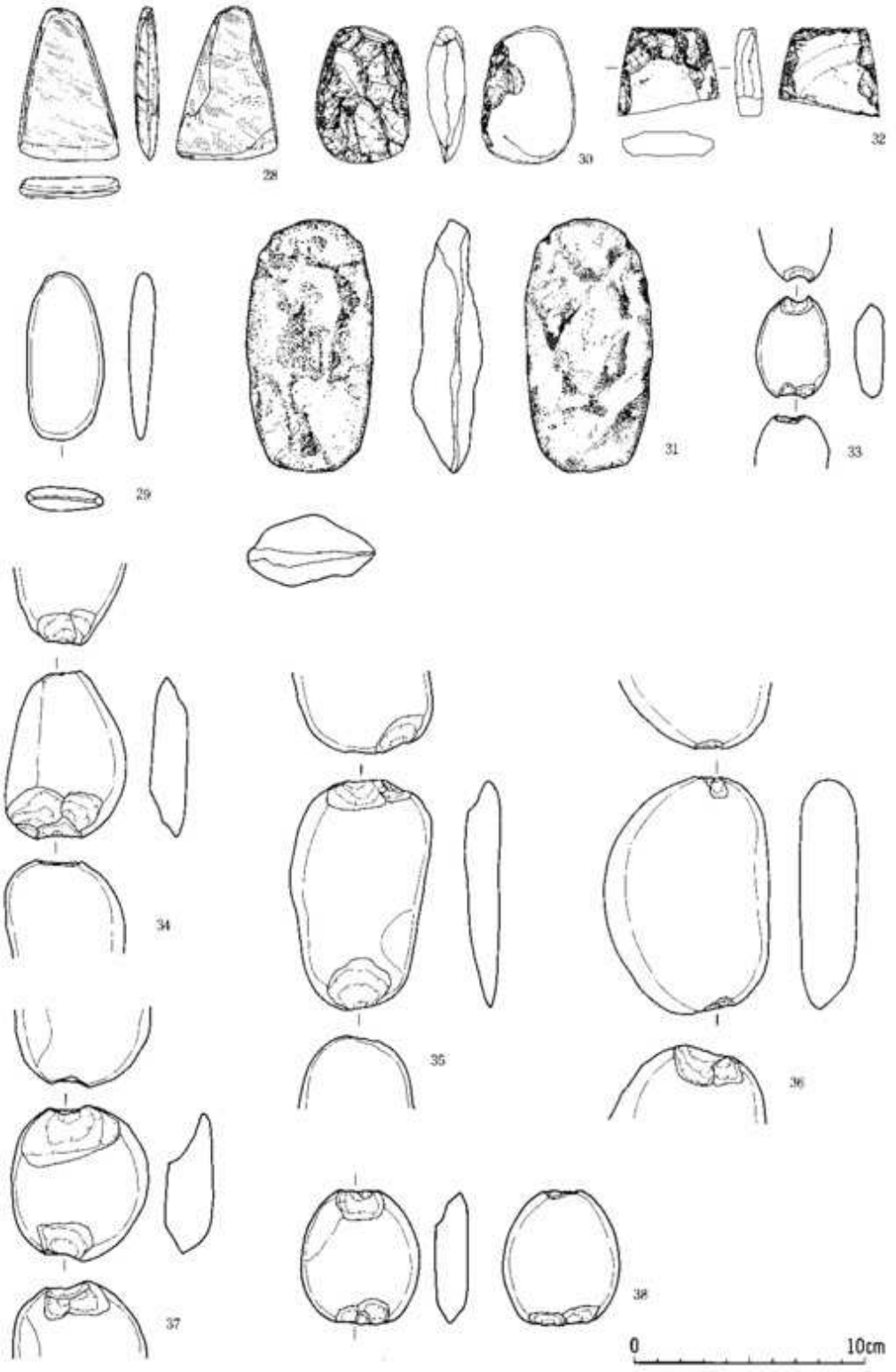
第39図　石器・石質組成図



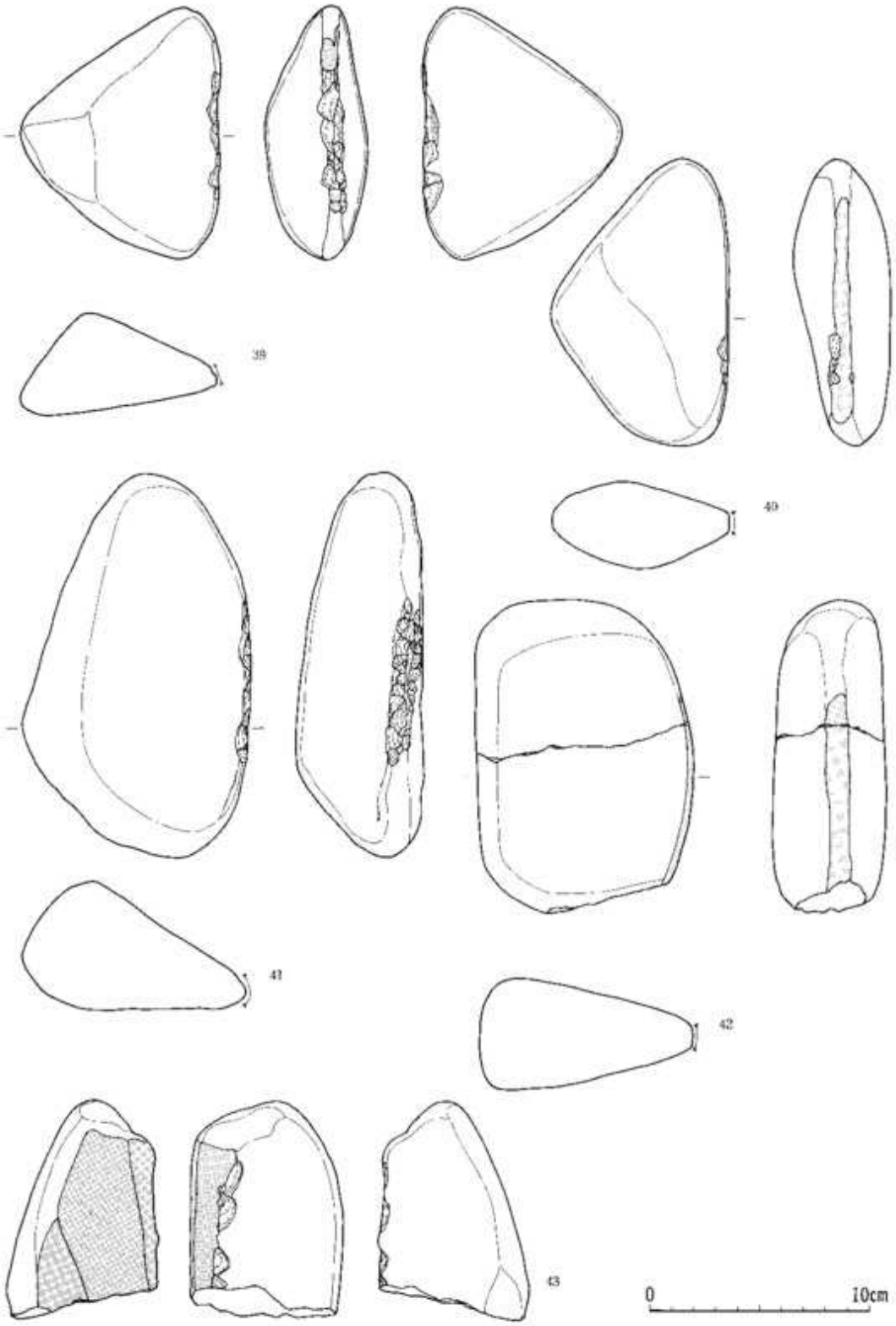
第40図　剥片石器（1）



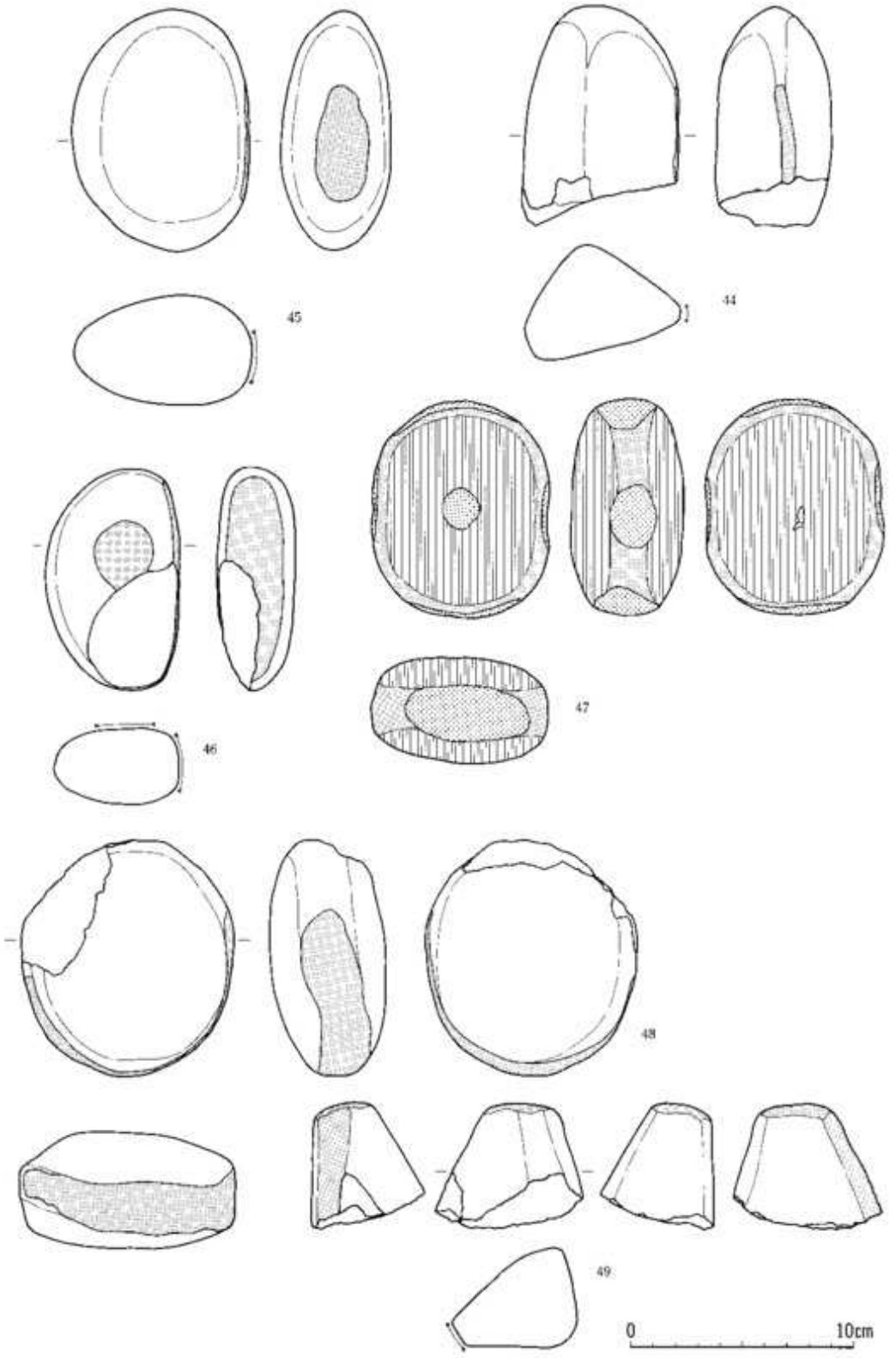
第41図　剝片石器（2）



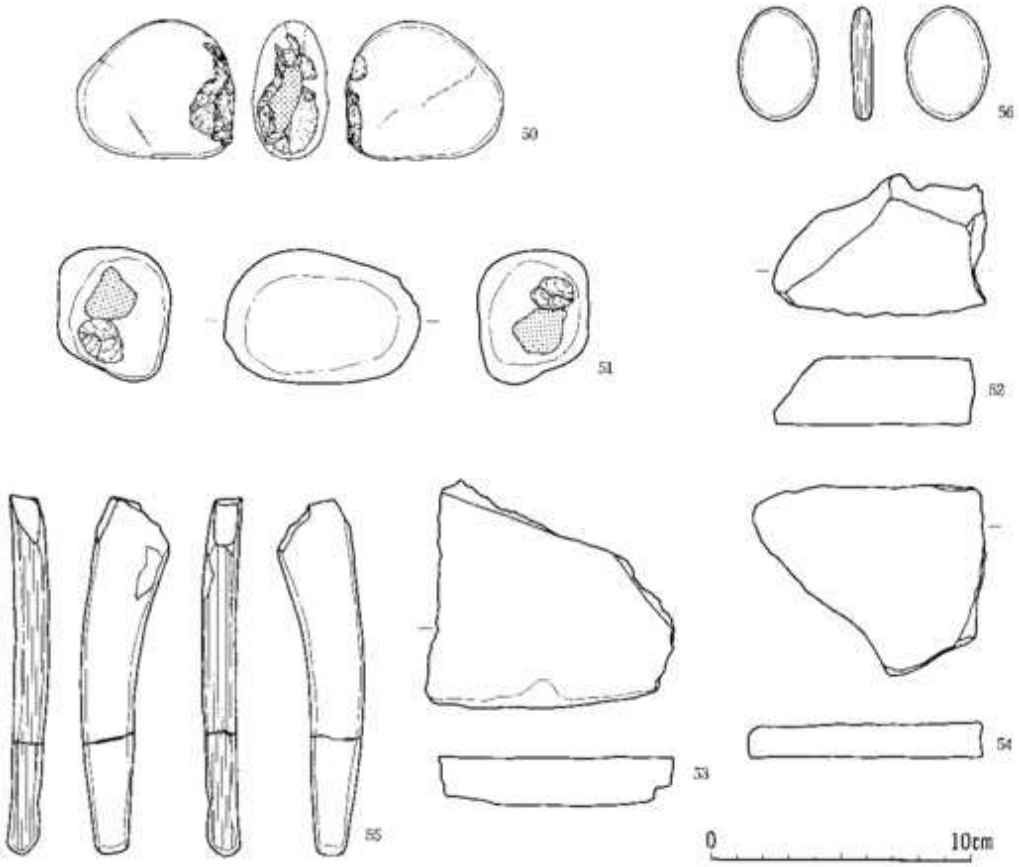
第42図　礫 石 器(1)



第43図　礫 石 器(2)



第44図　燻　石　器(3)



第45図　礫　石　器(4)

第　章　ま　と　め

1　本遺跡からは、縄文時代早期から歴史時代に至る様々な時代の遺物が出土した。そのなかで主体をなすものは、縄文時代前期初頭の芦野　群・表館式と早稲田 6類、及び縄文時代後期初頭の十腰内　群土器である。

2　調査によって、縄文時代前期初頭の芦野　群・表館式期の竪穴住居跡 1軒と、早稲田 6類期の炉跡 1基、時期不詳の溝状ピット 3基を検出した。この時期の住居跡の検出は、青森県内では初めてである。

3　芦野　群・表館式と称される一群の土器は、細分される可能性が強い。しかし、現時点ではその内容を明確に把握し得ない。早稲田 6類と含め今後更に検討する必要がある。

4　縄文時代前期初頭の特徴的な遺物として、漁網用と考えられる土器片錘が出土した。また、H地区から約 250m北の発茶沢遺跡A地区からも43点出土しているところから、漁撈活動の一端を伺うことができる。

5　本遺跡出土の縄文時代後期初頭の十腰内　群以前の土器は、各個体ごとに異なる特徴を有しているが、この時期の土器は、現時点ではその内容が明確にされてないことから、それぞれの編年的位置関係を把握するまでには至らなかった。

6　剥片石器は極めて少ない。そのなかで石鏃の占める割合は高い。形態からすべて縄文時代前期初頭と考えられるが、他の器種については明確ではない。

7　石器は、層位的に分類できるものもあるが、全体量が僅少であるため、土器との共伴関係及び時期ごとの石器組成は把握できない。

8　本遺跡の主体をなす縄文時代前期初頭及び後期初頭においても、遺物は極めて小さなブロックに分かれての出土で、竪穴住居跡を検出したブロックにおいても同様である。また、他の時期も個体数は非常に少なく、すべて小破片で出土した。このことから、この地区は鷹架沼及び本台地を舞台としたキャンプサイトの一つとしての性格を有していたと考えられる。

（三宅・白鳥）

注・参 考 文 献

注 1　名久井文明　1961「青森県芦野遺跡の土器群について」　考古学雑誌　57- 2

2　佐藤達夫　渡辺兼庸　1960　「六ヶ所村表館出土の土器」　上北考古学会誌　1

3　二本柳正一　角鹿扇三　佐藤達夫　1957　「上北郡早稲田貝塚」　考古学雑誌　43- 2

4　麻生　優　1953　「竹管文に関する試論」　上北文化　24

5　佐原　真　1956　「土器面における横位文様の施文方法」　石器時代　3

6　可児通宏　1969　「土器（竹管文の分類）」　多摩ニュータウン遺跡調査報告

7　西川博孝　1983　「施文原体（竹管）」　縄文文化の研究　5（縄文土器　）

8　篠原　正　1978　「新橋遺跡における阿玉台式土器の竹管文と施文具の研究」　新橋遺跡発掘調査報告

9　昭和58年、青森県埋蔵文化財調査センターが調査を行った。本報告と同様、昭和60年 3月刊行。本遺跡から、直線にして約 4km北に所在する。

10　注 5に同じ

11　注 2に同じ、採集地点が、今回の調査対象となったＨ地区とほぼ同一であるか、または他の地区であるかは不明である。

12　注 1に同じ

13　青森県教育委員会　1982　「発茶沢」

14　青森県教育委員会　1980　「永野遺跡」

15　青森県教育委員会　1980　「大面遺跡発掘調査報告書」

16　青森県教育委員会　1980　「砂沢平遺跡発掘調査報告書」

17　青森県教育委員会　1983　『前坂下（ 13) 遺跡』「下北地点原子力発電所建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書」

18　青森県教育委員会　1982　「山崎遺跡発掘調査報告書」

19　青森県立郷土館　1976　「縄文式土器のうつりかわり」

20　欠・持長地遺跡など。宮城県教育委員会　1981　「仙南・仙塩広域水道関係遺跡調査報告書」所収

21　奏　昭繁　1977　「松原」　置賜考古学会

22　児玉作左衛門・大場利夫　1954　「函館市春日町出土の遺物について」　北方文化研究報告　9

23　北海道埋蔵文化財センター　1982　「吉井の沢遺跡」

24 北海道埋蔵文化財センター　1984 『美々 4遺跡』 「美沢川流域の遺跡群 」

25 北海道埋蔵文化財センター　1984 『美々 5遺跡』 「美沢川流域の遺跡群 」

26 竹島国基　1975 「宮田貝塚」

27 宮城県教育委員会　1977 『金山貝塚』 「亀岡遺跡・金山貝塚」

28 熊谷常正　1979 「岩手県東磐井郡の縄文時代前期土器群」 考古風土記 4

29 岩手県埋蔵文化財センター　1983 「小堀内 遺跡発掘調査報告書」

30 富士見市教育委員会　1983 「打越遺跡」

31 庄野靖寿（1974「関山貝塚」）、佐々木保彦（注30に同じ）、黒坂禎二（大宮市遺跡調査会 1984 「深作東部遺跡群」）など。

32 青森県教育委員会　1981 「鷹突通跡発掘調査報告書」

33 青森県教育委員会　1984 「和野前山遺跡」

34 大沼忠春　1981 「道央部の縄文前期土器群の編年について」 北海道考古学 17
熊谷常正　1983 「岩手県における縄文時代前期土器群の成立」

35 青森県教育委員会　1978 「源常平遺跡発掘調査報告書」

36 青森県教育委員会　1979 「桔梗野工業団地造成に伴う埋蔵文化財試掘調査報告書」

37 青森県教育委員会　1981 「表館遺跡」

38 同遺跡（青森県立郷土館 1976）調査時に、近くの河口近辺で採集した資料であるが、同報告書には掲載していない。

39 青森県教育委員会　1984 「弥栄平（ 2）遺跡」

40 青森市蛍沢遺跡発掘調査団　1979 「蛍沢遺跡」

41 横山裕平氏よりピエス・エスキーユとの指摘を受けた。

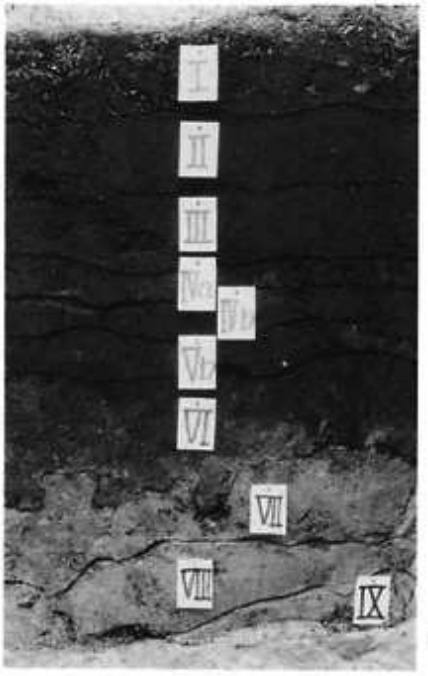
遠　　景

調査風景

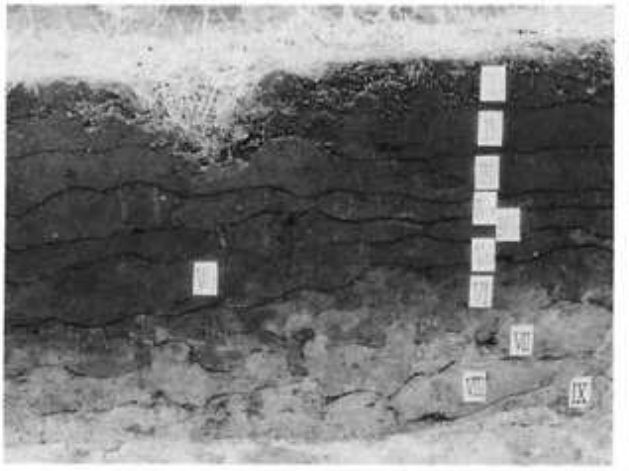
調査風景

調査風景

1



2



3

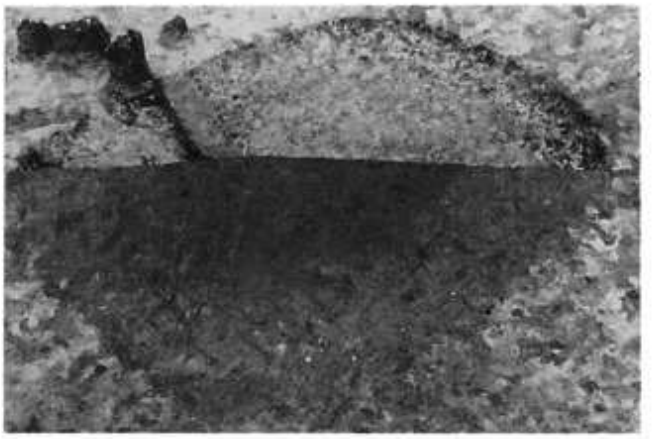
4

1．調査風景

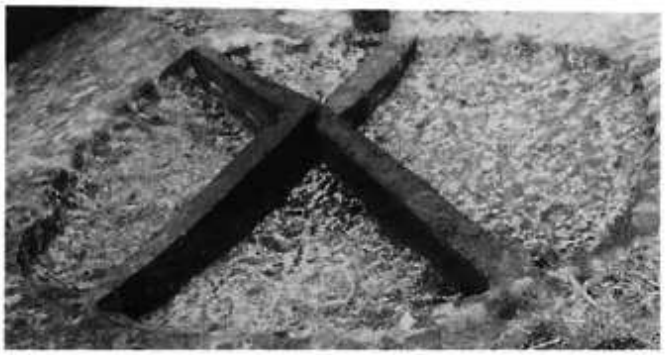
2・3　基本層序

4．20Ⅳ区の堆積土と遺物出土状況

竪穴住居跡（層序）



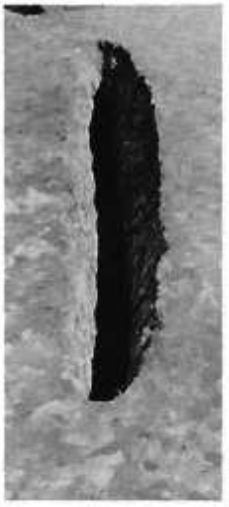
竪穴住居跡



竪穴住居跡

竪穴住居跡（完掘）

炉　　跡



第１号溝状ピット

第２号溝状ピット

第３号溝状ピット

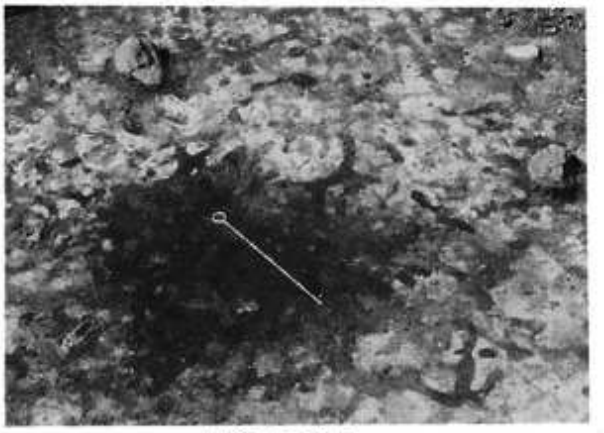
第１号溝状ピット

第２号溝状ピット

黒色土のしみ

第３号溝状ピット

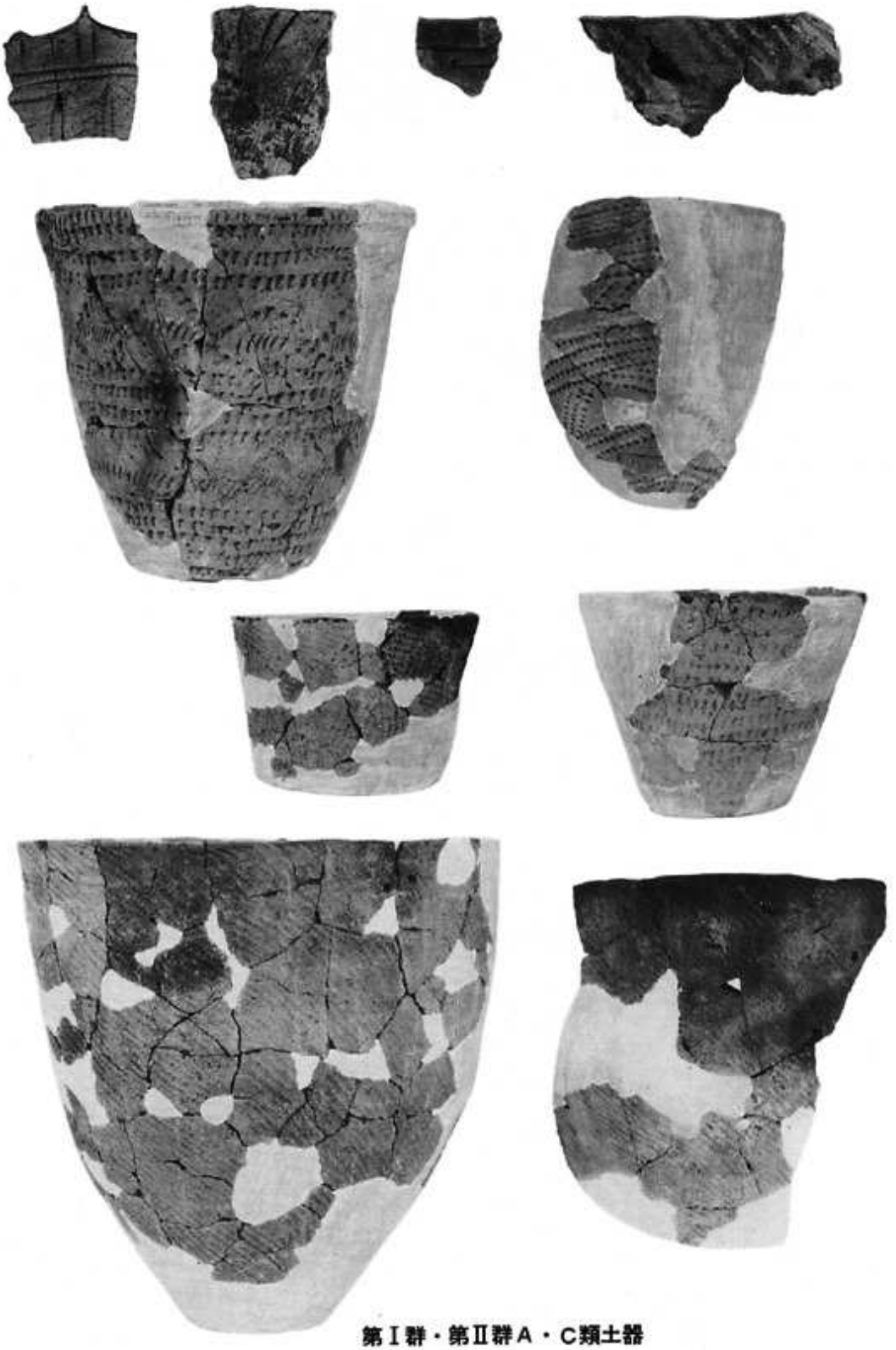
礫群



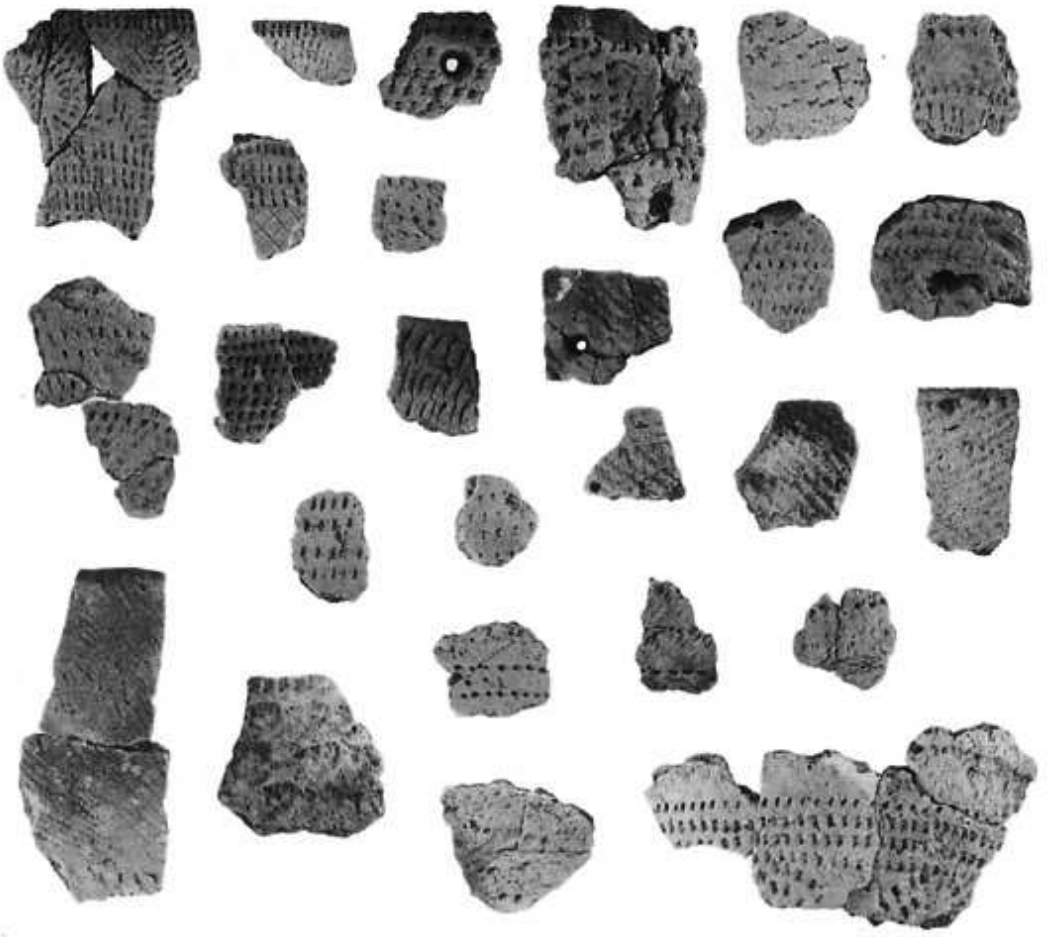
黒色土のしみ

遺物出土状況

遺物出土状況

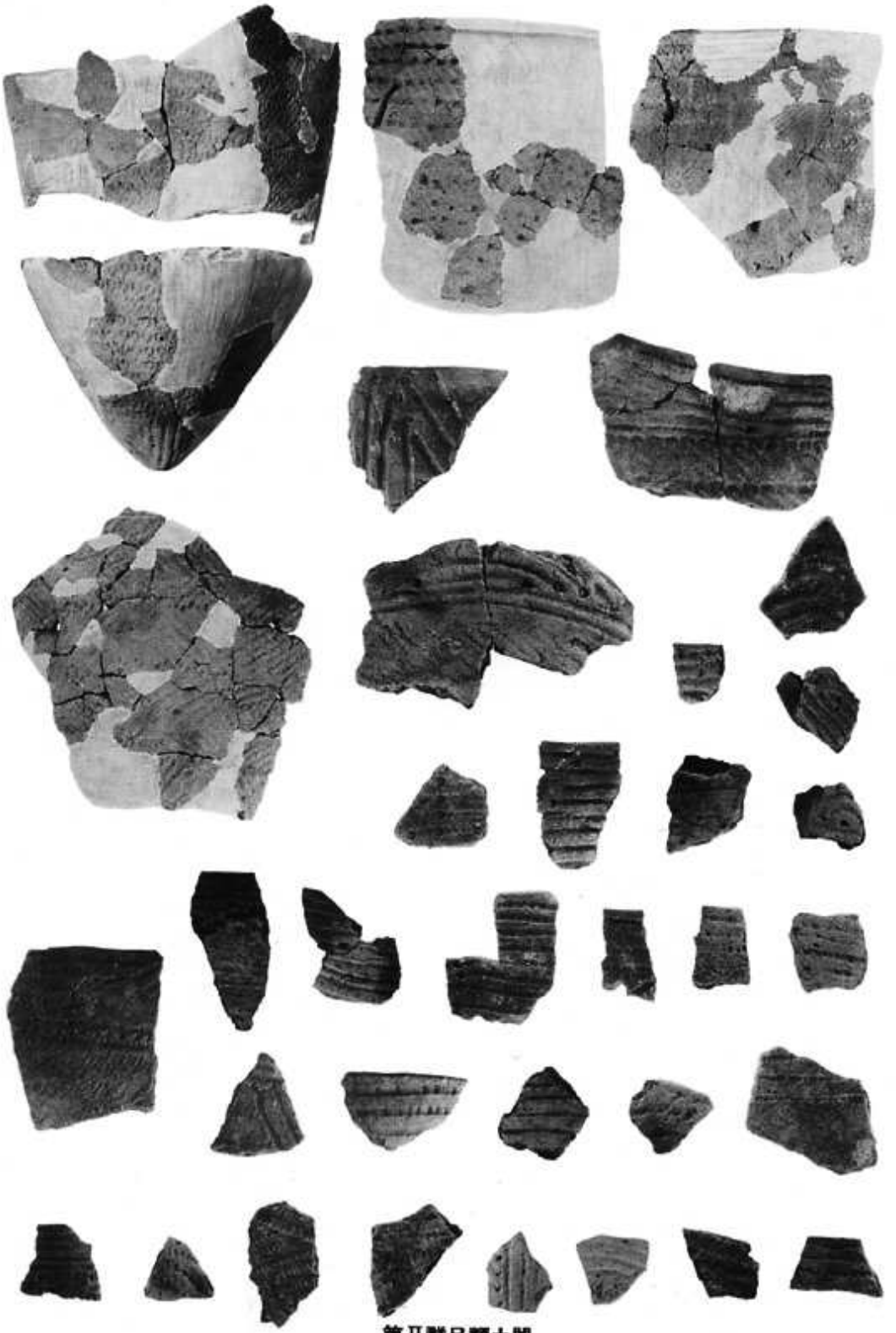


第Ⅰ群・第Ⅱ群A・C類土器

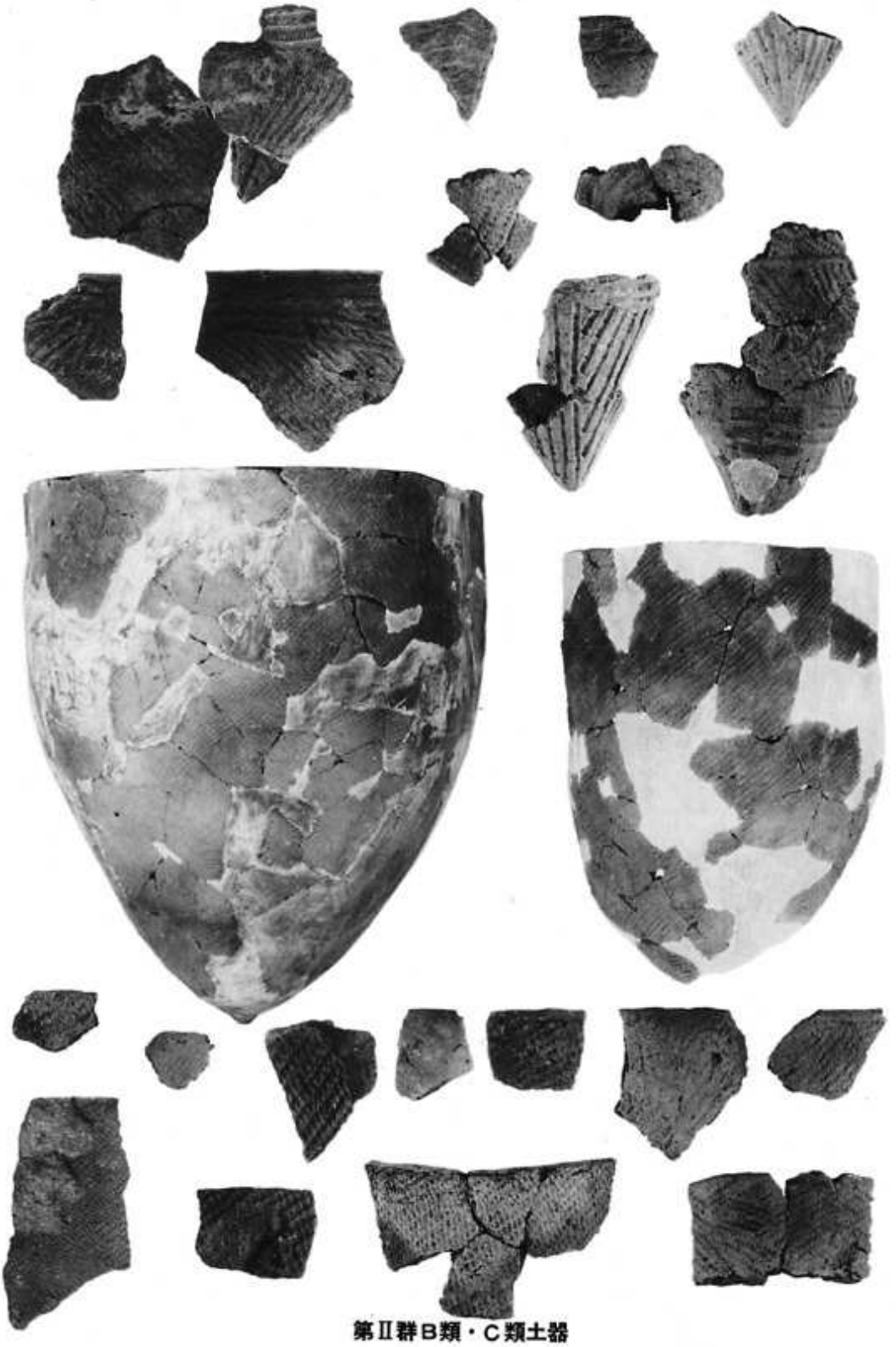


第Ⅱ群A・C類土器

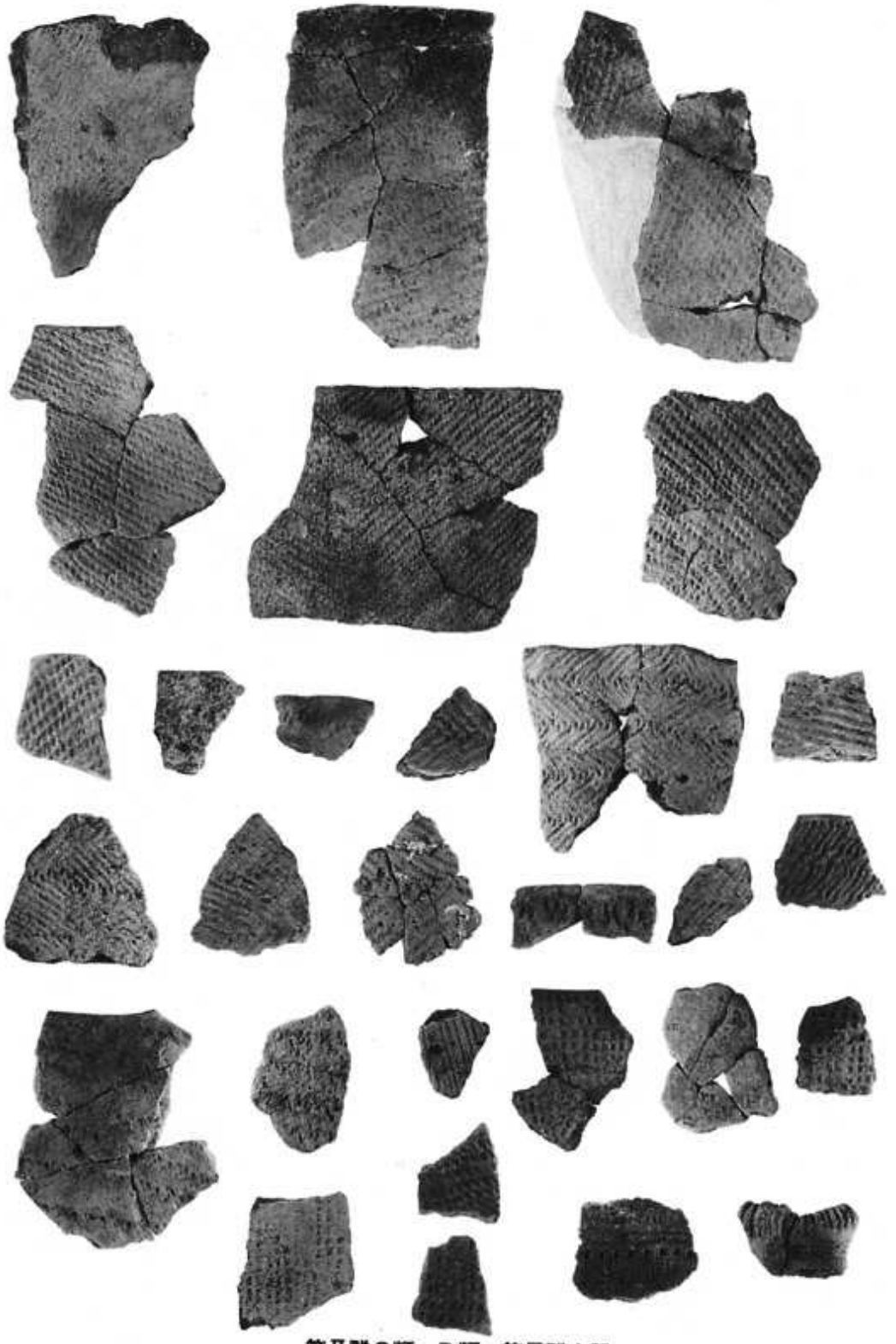
第Ⅱ群A・B類土器



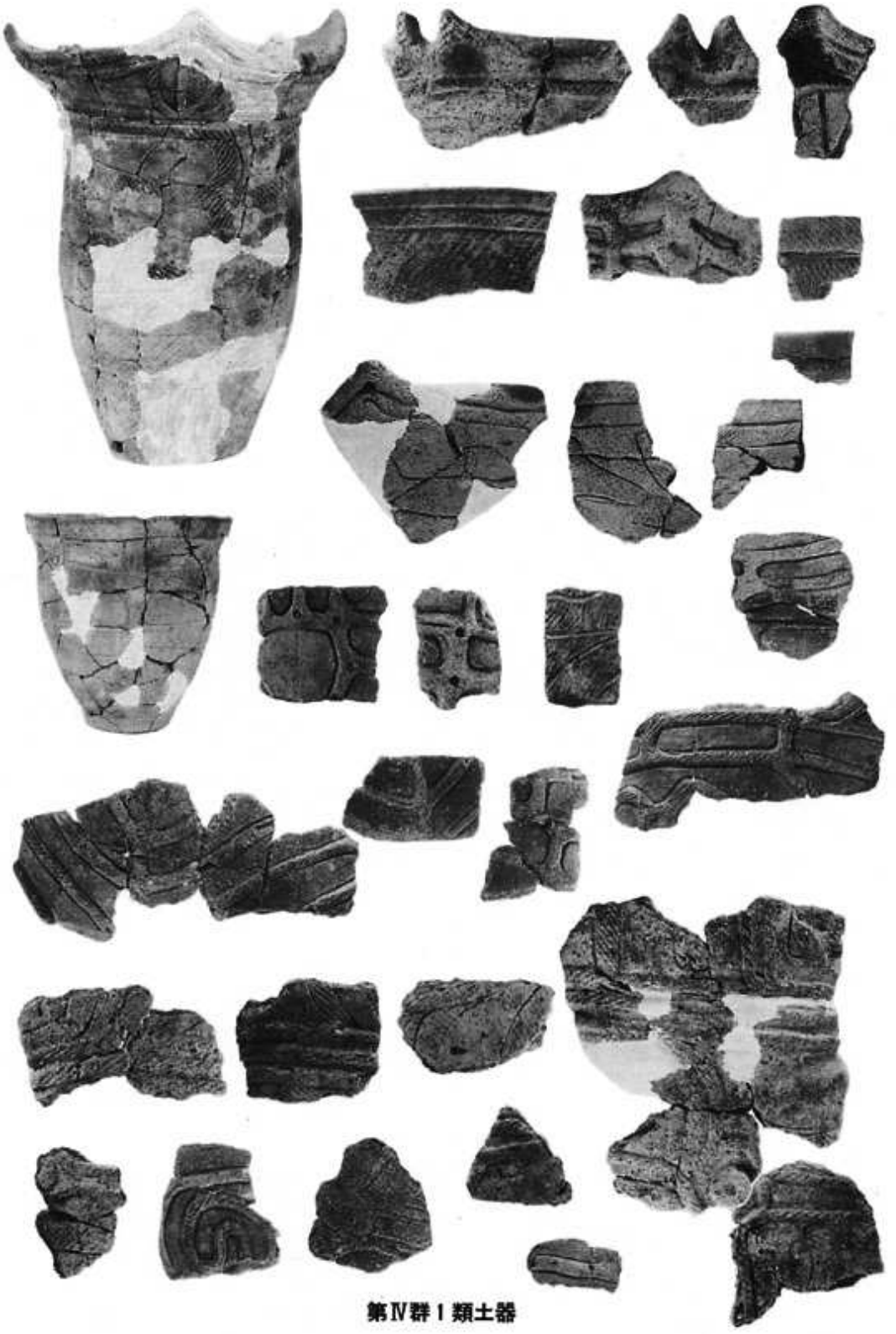
第Ⅱ群B類土器



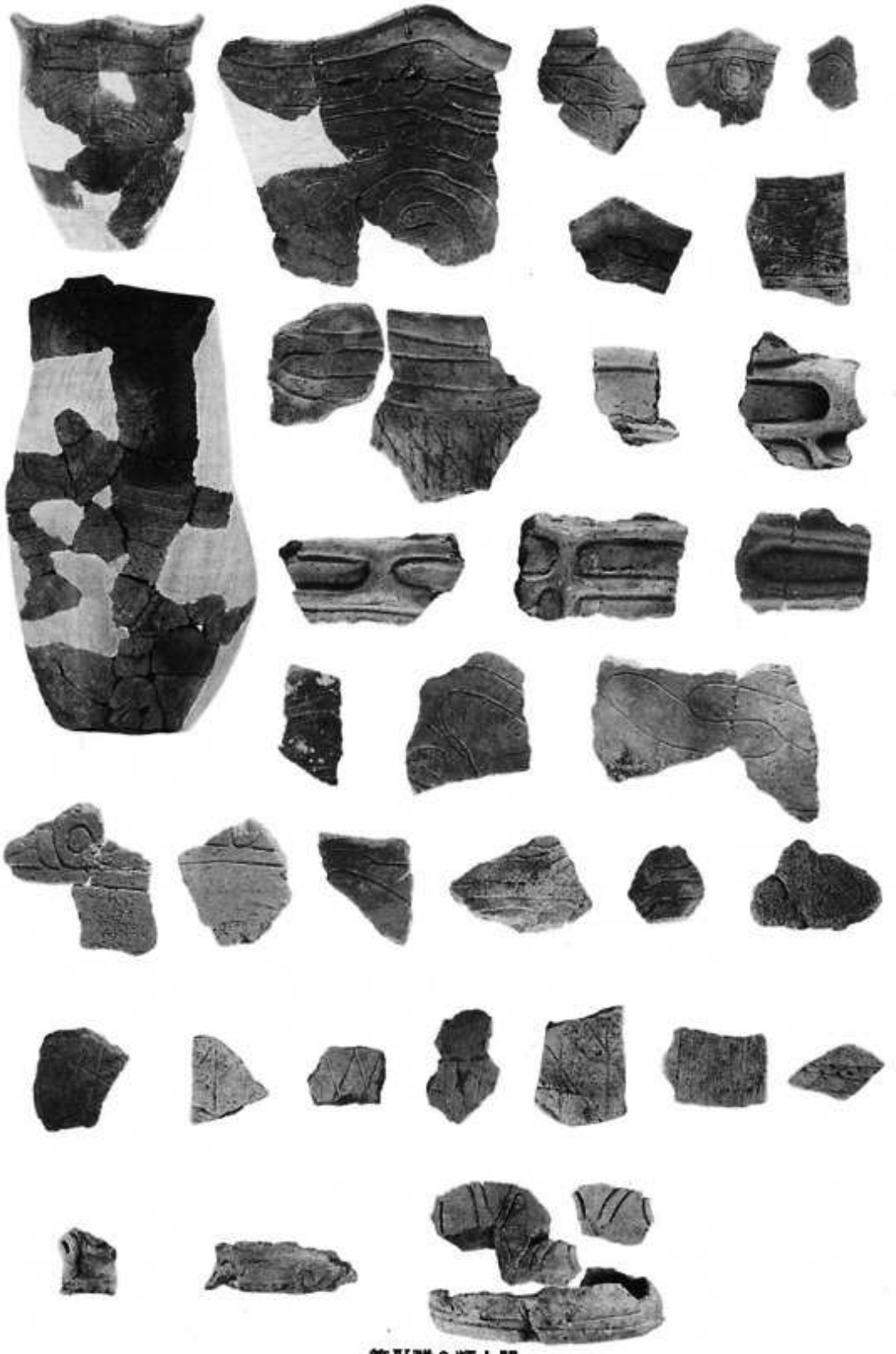
第Ⅱ群B類・C類土器



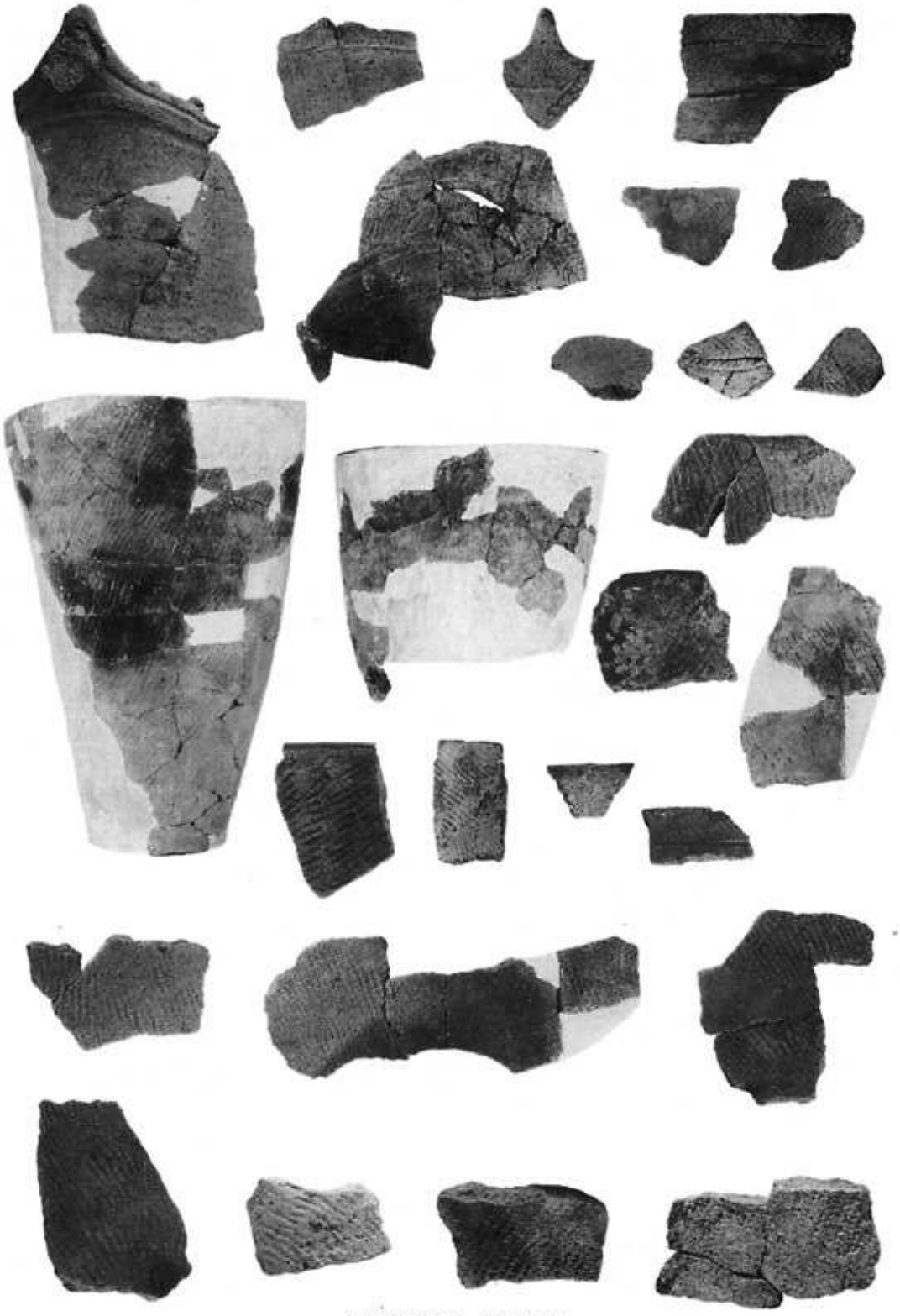
第Ⅱ群C類・D類・第Ⅲ群土器



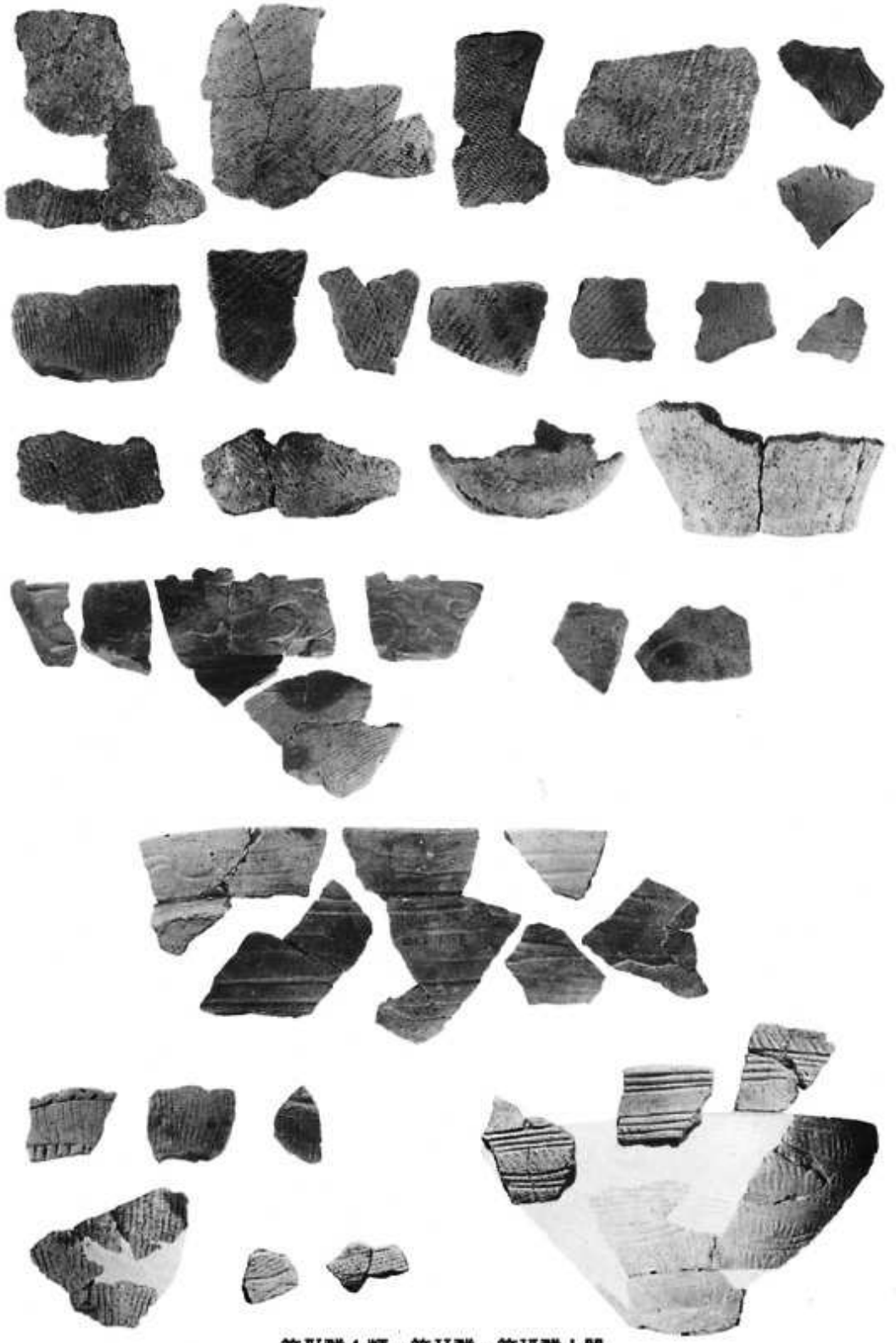
第Ⅳ群１類土器



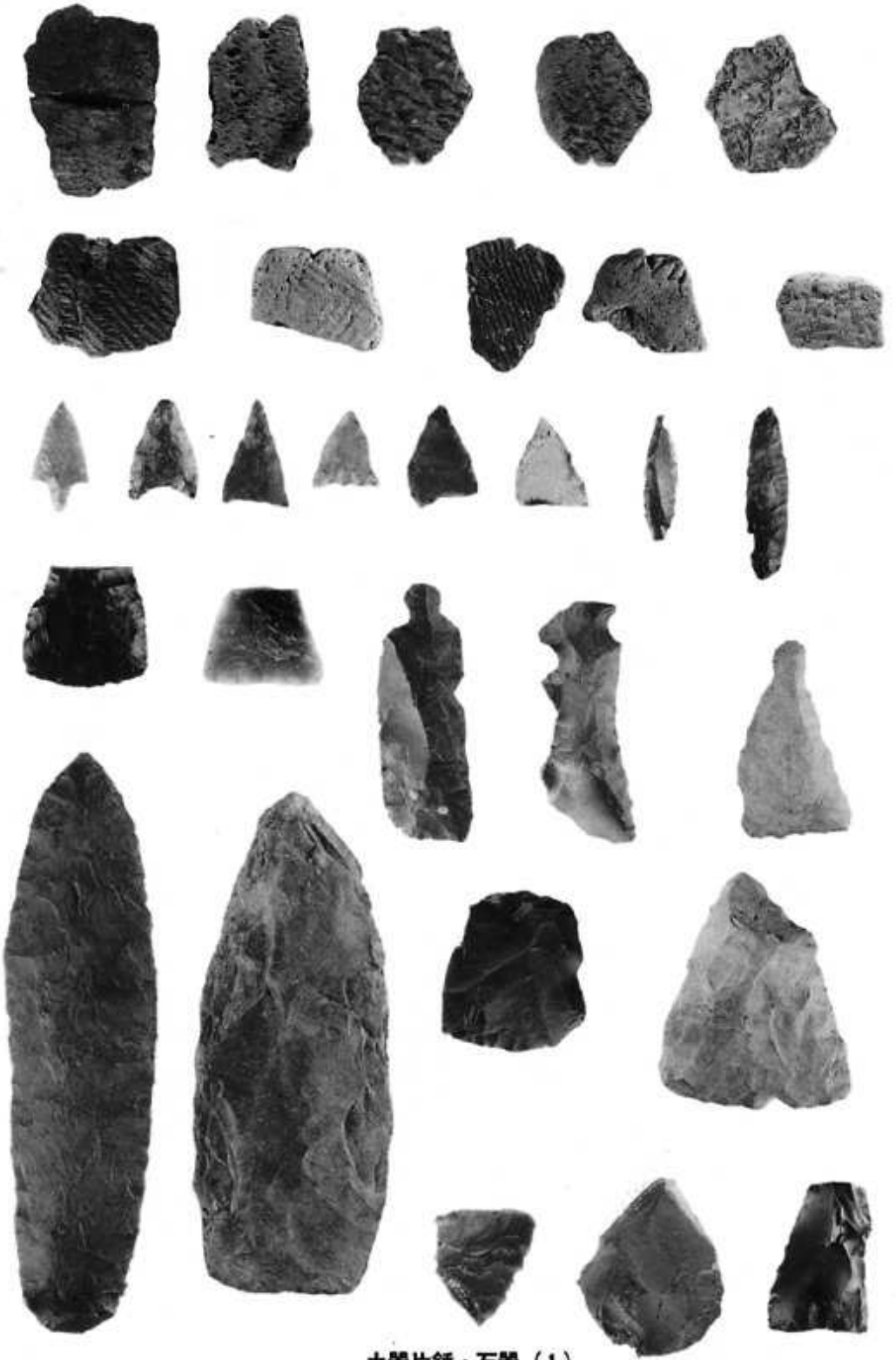
第Ⅳ群２類土器



第Ⅳ群３類・４類土器



第Ⅳ群4類・第Ⅴ群・第Ⅵ群土器



土器片錘・石器（1）

石　　器（2）

石　　器（3）

青森県埋蔵文化財調査報告書第91集

表館遺跡調査報告書Ⅱ

印刷発行　昭和60年3月30日
発　　行　青森県教育委員会
編　　集　青森県埋蔵文化財調査センター
　　青森市新城字天田内152―15
印　　刷　長尾印刷株式会社
　　青森市大字平新田字森越17―1
　　電　話　0177（26）7121